

南島原市文化財調査報告書 第30集

# 通野遺跡

—大苑地区県営畠地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う発掘調査—

2022

長崎県南島原市教育委員会



南島原市文化財調査報告書 第30集

# 通野遺跡

—大苑地区県営畠地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う発掘調査—

2022

長崎県南島原市教育委員会



## 発刊にあたって

本書は、長崎県南島原市有家町大苑に所在する通野遺跡の発掘調査報告書です。通野遺跡は、島原半島の東部に位置する遺跡で、雲仙山系から延びるゆるやかな丘陵上に立地しています。島原半島は長崎県内における農業産出額の約4割を占める農業地帯であり、遺跡周辺でも雲仙の火山灰質土壤を基盤としておもに葉タバコの栽培がさかんに行われています。このたびの発掘調査は、営農環境の整備、生産性の向上を目的とした大苑地区のは場整備事業に伴って実施いたしました。

発掘調査では、旧石器時代から中世にわたっての多彩な遺構や遺物を検出いたしました。特に縄文時代早期の押型文土器や、縄文時代末から弥生時代前半にかけての遺物群などが充実した出土内容をみせています。また、柱穴内に残存した柱材の検出とそれらの年代測定結果は、島原半島において不明な点の多い弥生時代前期における大変貴重な成果となりました。今後は、できるだけ多くの場面でこれらの文化財とその情報の発信・周知を図り、活用の機会を設けていきたいと存じます。

末筆になりましたが、発掘調査を実施するにあたり多大なるご理解とご協力をいただきました島原振興局の皆様、地元地権者・耕作者の皆様、工事関係の方々、現地調査と整理調査に従事くださいました作業員の方々、そのほか関係各位に心より感謝申し上げ、発刊のあいさつといたします。

令和4年3月31日

南島原市教育委員会  
教育長 松本 弘明

## 例　　言

- 1 本書は、通野遺跡（長崎県南島原市有家町大苑所在）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長崎県島原振興局が事業主体である大苑地区県営畠地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴って実施した。
- 3 調査は、長崎県南島原市教育委員会が主体となって以下の期間で実施した。  
本調査　　A～D区 平成18年11月1日～平成19年3月19日  
E～H区 平成19年6月1日～平成19年10月19日
- 4 現地調査及び本報告書作成に係る整理調査の体制と担当は、以下のとおりである。

### 調査体制

南島原市教育委員会 教育長	音 弘賢（平成18年度～平成22年6月） 定方 郁夫（平成22年7月～平成26年7月） 永田 良二（平成26年8月～令和3年8月） 松本 弘明（令和3年8月～）
教育次長	井口 敬次（～平成22年度） 水島 文昌（平成23年度～平成25年度） 渡部 博（平成26年度～平成28年度） 深松 良藏（平成29年度～平成31年度） 栗田 一政（令和2年度～）
理事	宮崎 誠（平成31年度）
文化財課長	松本 慎二（平成22年度～平成31年度）
文化財課文化財班長	岡野 博明（令和2・3年度） 松本 慎二（～平成21年度） 林田 順助（平成22年度～平成25年度） 木村 岳士（平成26年度～平成29年度） 末永 透（平成30年度） 鬼塚 俊範（平成31年度） 梶原 知治（令和2・3年度）

### 調査担当

#### 本調査

南島原市教育委員会 文化財課文化財班 主査（学芸員） 荒木 伸也（平成18・19年度）

## 整理調査

南島原市教育委員会 文化財課文化財班 副参事（学芸員）荒木 伸也

（平成18年度～平成31年度、うち平成25年度～平成28年度は世界遺産登録推進室）

南島原市教育委員会 文化財課文化財班 副参事（学芸員）本多 和典（令和2・3年度）

- 5 現地調査における遺構配置図、個別遺構実測図、土層実測図の作成と製図は、（株）埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。航空写真の撮影は、（有）スカイサーベイ九州に委託した。
- 6 自然科学分析は、（株）古環境研究所に委託した。
- 7 現地調査における写真撮影は、荒木による。本書掲載の遺物の写真撮影は、本多による。
- 8 遺物の実測・製図は、（株）埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託し、また、一部を整理作業員が補足した。土器の拓本は、整理作業員が行った。
- 9 本書の刊行にあたって、以下の作業員が携わった。  
細波泉、下田金衛、飛永弘恵、横田香織
- 10 本書に関する遺物、図面、写真等は、南島原市深江埋蔵文化財整理室において保管している。
- 11 本書の執筆・編集は、本多による。



## 本文目次

第Ⅰ章 はじめに .....	1
第Ⅱ章 調査の成果.....	4
第1節 土層と遺構 .....	4
1 土層.....	4
2 遺構.....	4
第2節 出土遺物 .....	17
1 土器・陶磁器.....	17
(1) 縄文時代早期～縄文時代中期の土器.....	17
(2) 縄文時代後期～弥生時代前期の土器.....	22
(3) 弥生時代中期以降の土器・陶磁器.....	36
2 石器.....	49
第Ⅲ章 自然科学分析 .....	59
第1節 樹種同定 .....	59
第2節 放射性炭素年代測定 .....	67
第3節 植物珪酸体分析 .....	72
第Ⅳ章 まとめ .....	78

## 挿図目次

第1図 通野遺跡位置図① (S = 1/200,000)	1
第2図 通野遺跡位置図② (S = 1/20,000)	2
第3図 調査区配置図 (S = 5,000)	2
第4図 土層実測図 (S = 1/150)	5
第5図 A区遺構配置図 (S = 1/200)	9
第6図 B区遺構配置図 (S = 1/200)	9
第7図 C区遺構配置図 (S = 1/200)	10
第8図 D区遺構配置図 (S = 1/200)	11
第9図 E区遺構配置図 (S = 1/200)	12
第10図 G区遺構配置図 (S = 1/200)	13
第11図 H区遺構配置図 (S = 1/200)	14
第12図 ピット1実測図 (S = 1/40)	15
第13図 ピット2実測図 (S = 1/40)	15
第14図 ピット3実測図 (S = 1/40)	15
第15図 ピット4実測図 (S = 1/40)	15
第16図 ピット5実測図 (S = 1/40)	15
第17図 ピット6実測図 (S = 1/40)	15
第18図 ピット7実測図 (S = 1/40)	15
第19図 ピット8実測図 (S = 1/40)	15
第20図 ピット9実測図 (S = 1/40)	16
第21図 ピット10実測図 (S = 1/40)	16
第22図 ピット11実測図 (S = 1/40)	16
第23図 壁穴状遺構実測図 (S = 1/40)	16
第24図 縄文時代早期～縄文時代中期の土器実測図① (S = 1/3)	19
第25図 縄文時代早期～縄文時代中期の土器実測図② (S = 1/3)	20
第26図 縄文時代早期～縄文時代中期の土器実測図③ (S = 1/3)	21
第27図 縄文時代早期～縄文時代中期の土器実測図④ (S = 1/3)	23
第28図 縄文時代早期～縄文時代中期の土器実測図⑤ (S = 1/3)	24
第29図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器実測図① (S = 1/3)	25
第30図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器実測図② (S = 1/3)	26
第31図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器実測図③ (S = 1/3)	27
第32図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器実測図④ (S = 1/3)	29
第33図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器実測図⑤ (S = 1/3)	31
第34図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器実測図⑥ (S = 1/3)	33
第35図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器実測図⑦ (S = 1/3)	35

第36図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器実測図⑧ (S = 1 / 3) .....	36
第37図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器実測図⑨ (S = 1 / 3) .....	37
第38図	縄文時代後期～弥生時代前期の土器実測図⑩ (S = 1 / 3) .....	38
第39図	弥生時代中期以降の土器・陶磁器実測図① (S = 1 / 3) .....	39
第40図	弥生時代中期以降の土器・陶磁器実測図② (S = 1 / 3) .....	40
第41図	石器実測図① (1 ~ 3 : S = 2 / 3, 4 ~ 9 : S = 1 / 2) .....	50
第42図	石器実測図② (S = 2 / 3) .....	51
第43図	石器実測図③ (S = 1 / 2) .....	52
第44図	石器実測図④ (50 ~ 52 : S = 1 / 3, 53 : S = 1 / 4) .....	53
第45図	石器実測図⑤ (54 ~ 55 : S = 1 / 4, 56 ~ 57 : S = 1 / 3) .....	54
第46図	石器実測図⑥ (58 ~ 62 : S = 1 / 4, 63 ~ 64 : S = 1 / 3) .....	55
第47図	石器実測図⑦ (65 ~ 69 : S = 1 / 3, 70 ~ 74 : S = 2 / 3, 75 : S = 1 / 5) .....	56
第48図	炭化材① .....	64
第49図	炭化材② .....	65
第50図	炭化材③ .....	66
第51図	暦年較正結果① .....	70
第52図	暦年較正結果② .....	71
第53図	植物珪酸体分析結果 .....	76
第54図	植物珪酸体 (プラント・オパール) .....	77

## 表 目 次

第1表	出土土器ほか観察表① .....	41
第2表	出土土器ほか観察表② .....	42
第3表	出土土器ほか観察表③ .....	43
第4表	出土土器ほか観察表④ .....	44
第5表	出土土器ほか観察表⑤ .....	45
第6表	出土土器ほか観察表⑥ .....	46
第7表	出土土器ほか観察表⑦ .....	47
第8表	出土土器ほか観察表⑧ .....	48
第9表	出土石器観察表① .....	57
第10表	出土石器観察表② .....	58
第11表	樹種同定結果 .....	63
第12表	試料と方法 .....	67
第13表	放射性炭素年代測定結果 .....	69
第14表	植物珪酸体分析結果 .....	75

## 図版目次

図版1	通野遺跡全景①（南から）	81
図版2	通野遺跡全景②（西から）	82
図版3	D区遺構検出状況	83
	E区遺構検出状況	83
図版4	G区遺構検出状況	84
	H区遺構検出状況	84
図版5	作業状況	85
図版6	A区南壁土層①	86
	A区南壁土層②	86
図版7	柱穴列検出状況①	87
	柱穴列検出状況②	87
	ピット1検出状況	87
	ピット2検出状況	87
	ピット3検出状況	87
	ピット4検出状況	87
	ピット5検出状況	87
	ピット6検出状況	87
図版8	ピット7検出状況	88
	ピット8検出状況	88
	ピット9検出状況	88
	ピット10検出状況	88
	ピット11検出状況	88
	竪穴状遺構検出状況	88
	竪穴状遺構堆積状況①	88
	竪穴状遺構堆積状況②	88
図版9	出土土器ほか①	89
図版10	出土土器ほか②	90
図版11	出土土器ほか③	91
図版12	出土土器ほか④	92
図版13	出土土器ほか⑤	93
図版14	出土土器ほか⑥	94
図版15	出土土器ほか⑦	95
図版16	出土土器ほか⑧	96
図版17	出土土器ほか⑨	97
図版18	出土土器ほか⑩	98

図版19 出土土器ほか⑪	99
図版20 出土土器ほか⑫	100
図版21 出土土器ほか⑬	101
図版22 出土土器ほか⑭	102
図版23 出土土器ほか⑮	103
図版24 出土土器ほか⑯	104
図版25 出土土器ほか⑰	105
図版26 出土土器ほか⑱	106
図版27 出土土器ほか⑲	107
図版28 出土土器ほか⑳	108
図版29 出土土器ほか㉑	109
図版30 出土土器ほか㉒	110
図版31 出土土器ほか㉓	111
図版32 出土土器ほか㉔	112
図版33 出土土器ほか㉕	113
図版34 出土石器①	114
図版35 出土石器②	115
図版36 出土石器③	116
図版37 出土石器④	117
図版38 出土石器⑤	118



## 第Ⅰ章 はじめに

通野遺跡は、長崎県南島原市有家町大苑に所在する。立地としては、遺跡は雲仙山系から有明海へとむかって南東に延びる丘陵上に展開しており、標高は60m前後である。遺跡のある丘陵は、有明海を望んだとき左手を堂山川が、右手を貝森川が流れ、どちらも侵食によって急崖を形成している。

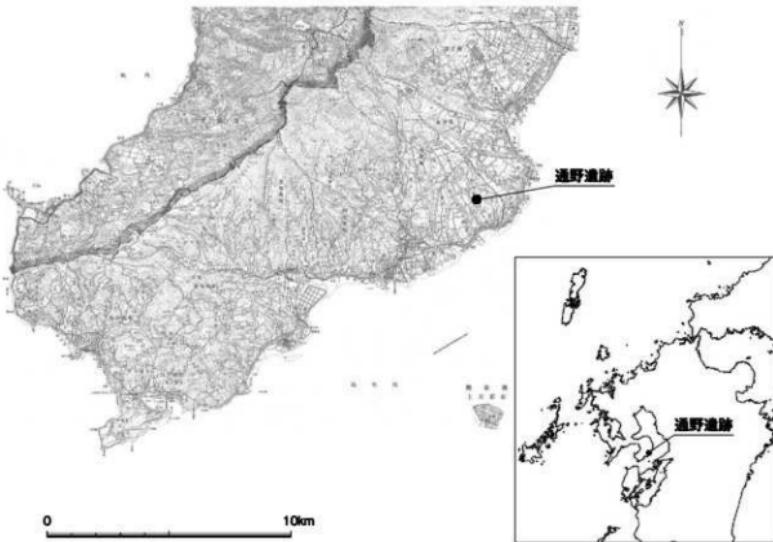
発掘調査は、長崎県島原振興局によって畑地帯総合整備事業（担い手育成型・大苑地区）が計画されたことに伴い、平成18年度及び平成19年度の2か年にわたって実施した。

通野遺跡における発掘調査の面積は、A区約170m<sup>2</sup>、B区約60m<sup>2</sup>、C区約340m<sup>2</sup>、D区約620m<sup>2</sup>、E区約760m<sup>2</sup>、G区約850m<sup>2</sup>、H区約700m<sup>2</sup>で、計約3,500m<sup>2</sup>である。なお、F区については、表土剥ぎまでを行ったが、遺跡の残存状況が思わしくなかったため、調査対象から除外している。

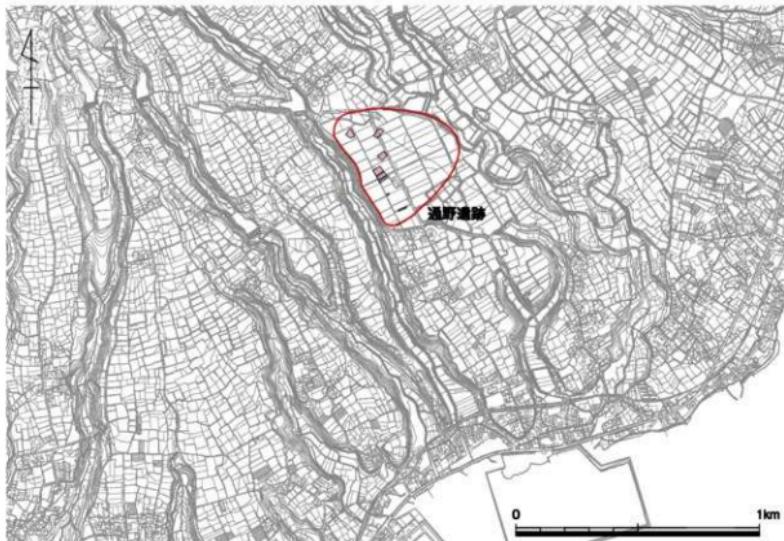
大苑地区においては、本報告の通野遺跡のほかに大苑遺跡と宮野遺跡がいずれも同一丘陵上の通野遺跡より海手に存在しており、大苑遺跡は平成14年度と平成17年度に、宮野遺跡は平成16年度と平成17年度に発掘調査を実施している。

大苑遺跡では、中世期の掘立柱建物跡や弥生時代中期の小兒墓棺墓の検出があり、縄文時代晩期の土器・石器や中世期の土師皿、青花、青磁などの出土がある。

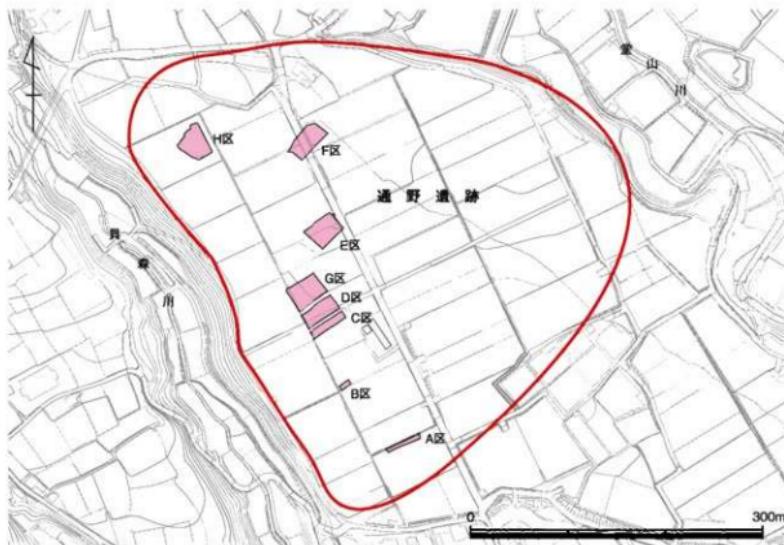
宮野遺跡では、中世期の造営とみられる溝の検出があり、また、縄文時代早期の押型文土器、縄文時代晩期から弥生時代早期にかけての土器・石器、弥生時代中期の土器、古墳時代の須恵器、中世の土器・陶磁器など多彩な遺物の出土がみられる。



第1図 通野遺跡位置図① (S=1/200,000)



第2図 通野遺跡位置図② (S=1/20,000)



第3図 濃査区配置図 (S=1/5,000)



通野遺跡全景①（南から）



通野遺跡全景②（西から）

## 第Ⅱ章 調査の成果

### 第1節 土層と遺構

#### 1 土層

今回の通野遺跡における発掘調査においては、基本土層の整理が十分ではないが、黒褐色土層及び明褐色土層から主に縄文時代早期と縄文時代晚期の遺物が主体的に出土したことが調査者によって記録されている。遺物の注記をみてみると、層位の判別が可能なもののうち大部分は3層となっており、若干2層となっているものもある。おそらくは、3層が明褐色土層に、2層が黒褐色土層に対応するものと推測する。なお、縄文時代晚期とされているものには、弥生時代早・前期の突堤文期の資料を含んでいるものと思われる。

ここで、近年の発掘調査の情報蓄積が進んでいる南島原市有家町・西有家町域の基本土層を確認しておく。

#### 南島原市有家町・西有家町域基本土層

- I層 耕作土及び耕作基盤土。
- II層 黒褐色土。古代・中世遺物包含層。
- III層 黄褐色土。弥生時代中・後期遺物包含層。
- IV層 褐色土。縄文時代後期～弥生時代前期遺物包含層。
- V層 黄褐色土。褐色土をまだらに含む。縄文時代早期遺物包含層。
- VI層 黒褐色土。
- VII層 灰黄色土。旧石器時代遺物包含層。

通野遺跡の調査において遺物包含層として掘削対象となったのは、有家町・西有家町域基本土層のII層及び明黄褐色系の土色を呈するIII～V層であると判断する。ただし、調査写真を見る限り遺構検出面は明黄褐色系の土色であり、第VI層の黒褐色土層上面まで掘削した状況は確認できない。おそらくIII～V層の中途のどこかで遺構の検出がなされたものと判断する。

#### 2 遺構

まず調査ごとに検出した遺構の内容を概観し、その後に個別の遺構について記述する。なお、F区については、表土剥ぎ後に遺構・遺物の残存状況がよくなく、調査対象から除外している。

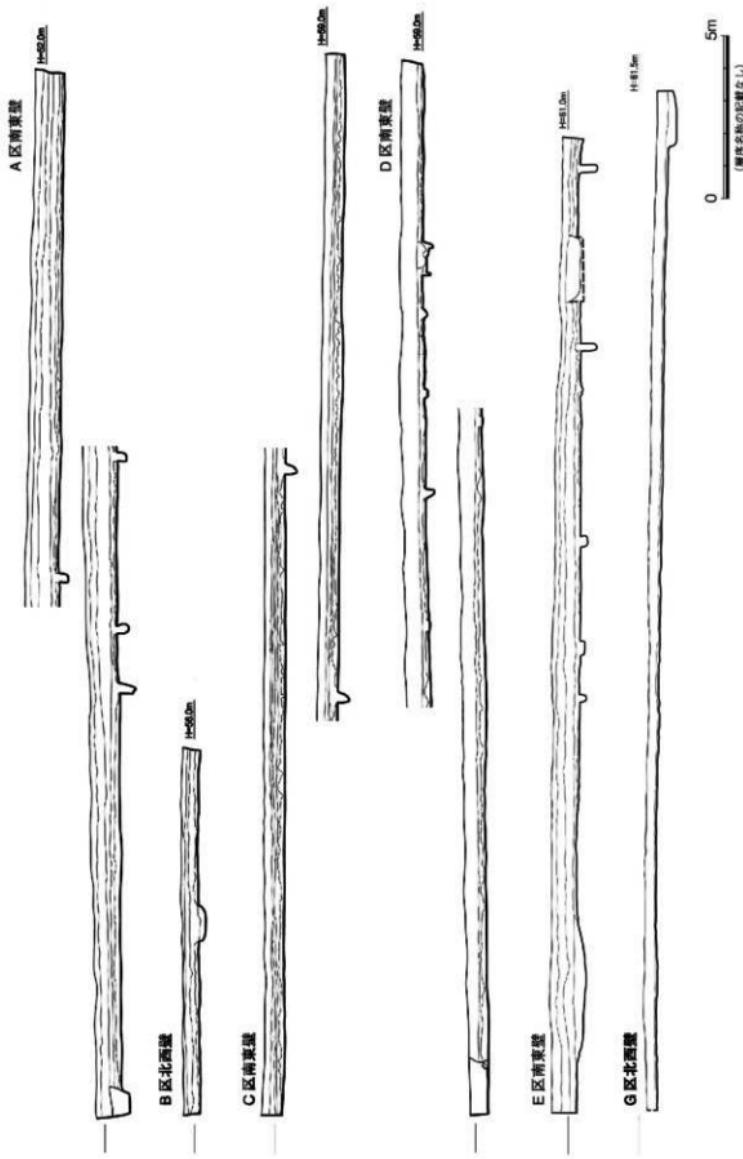
#### A区（第5図）

今回の調査区としては最も南、海手に位置する調査区である。50基を超えるピット等が確認された。

#### B区（第6図）

A区の北側に位置する調査区で、遺跡としては南部にあたる。ピット1基の検出にとどまった。

第4図 土層実測図 ( $S = 1/150$ )



#### C区・D区・G区（第7図、第8図、第10図）

遺跡の中ほど、西側を流れる貝森川寄りの地点である。平成18年度調査のC区、D区と平成19年度調査のG区、3つの調査区が連なる。各調査におけるピットの検出数は、C区が約100基、D区が約680基、G区が約1,100基である。最も海手のC区ではピットの分布は比較的まばらであるが、D区とG区については、非常に密度が高い。柱穴列、焼土面や炭化材を伴うピットなどの検出がみられる。また、多くのピット群からは複数の建物群の復元が可能であると考えるが、現地調査時の検証が不十分であるため、ここでの抽出は控える。

#### E区（第9図）

G区の北東部に位置する調査区で、G区同様非常に高い遺構密度である。確認されたピットは、1,100基以上である。また、調査区の北側で直角に曲がる溝状遺構ほか4条の溝状遺構が確認されている。多くのピット群からは複数の建物群の復元が可能であると考えるが、現地調査時の検証が不十分であるため、ここでの抽出は控える。

#### H区（第11図）

遺跡の北部地点に位置する調査区で、貝森川沿いの地点である。約1,200基のピットを検出している。多くのピット群からは複数の建物群の復元が可能であると考えるが、現地調査時の検証が不十分であるため、ここでの抽出は控える。調査区北側においては、平面方形を呈する竪穴状遺構を検出している。

#### 柱穴列（第8図）

D区において検出である。調査区の中央付近を北西・南東方向に横切る。柱穴の並びは間隔をほとんど取らずに連続して隣り合っており、若干の蛇行がみられる。北西部で間隔が空く部分がみられ、この部分を含めれば柱穴列の長さは約17m、含めなかつた場合は約12mである。

柱穴列の延長については、海手のC区、山手のG区においては確認されていない。ただし、G区では、柱穴列の延長線上に重なるように溝状の遺構が検出されており、柱穴列と関連する遺構の可能性が考えられる。

D区においては、柱穴列の南西側（貝森川側）と柱穴列の北東側幅約10mほどで遺構密度が低く、それよりさらに北東側では遺構密度が高くなる傾向がみられる。この遺構密度の高低の傾向は、G区の溝状遺構を挟んででもうかがえそうである。

#### ピット1（第12図）

D区において検出である。平面は不整橢円形を呈し、長軸106cm、短軸66cmを測る。断面二段掘りの形状をなすが、これは本来下層面検出のものを同時に掘削したことによるものである。深さは24cmを測る。焼土、炭化材を検出した。樹種同定試料 No.5、No.6。

#### ピット 2 (第13図)

D区において検出である。平面は不整楕円形を呈し、長軸96cm、短軸64cmを測る。二段掘りとなっており、最深部で深さは30cmである。焼土、炭化材を確認した。樹種同定試料 No. 7, No. 8。

#### ピット 3 (第14図)

D区において検出である。長軸90cm、短軸42cmの平面楕円形をなす。北側ほど深くなっている。最深部で深さ44cmである。柱材と考えられる炭化材を検出した。樹種同定試料 No. 10～No. 12。放射性炭素年代測定試料 No. 3。

#### ピット 4 (第15図)

D区において検出である。直径50cm、深さ92cmで、柱穴であると考えられる。検出面付近で焼土が確認され、また、検出面レベルで柱材と思われる炭化材が確認された。樹種同定試料 No. 13, No. 14。放射性炭素年代測定試料 No. 4。

#### ピット 5 (第16図)

D区において検出である。直径46cm、深さ36cmである。検出面レベルで炭化材が確認された。樹種同定試料 No. 15。放射性炭素年代測定試料 No. 5。

#### ピット 6 (第17図)

E区において検出である。平面は直径71cmの円形を呈し、深さは26cmを測る。石臼(第47図75)と疊複数個の検出があった。樹種同定試料 No. 22, No. 23。放射性炭素年代測定試料 No. 6。

#### ピット 7 (第18図)

G区において検出である。平面は長軸64cmの不整形をなし、深さは最深部で49cmである。焼土、炭化材の検出がある。樹種同定試料 No. 34。放射性炭素年代測定試料 No. 7。

#### ピット 8 (第19図)

G区において検出である。平面は長軸83cm、短軸57cmの楕円形をなし、深さは26cmを測る。焼土が認められた。

#### ピット 9 (第20図)

G区において検出である。平面は長軸66cm、短軸44cmの楕円形をなし、深さはさほどなく6cmである。焼土の検出がみられた。

ピット10（第21図）

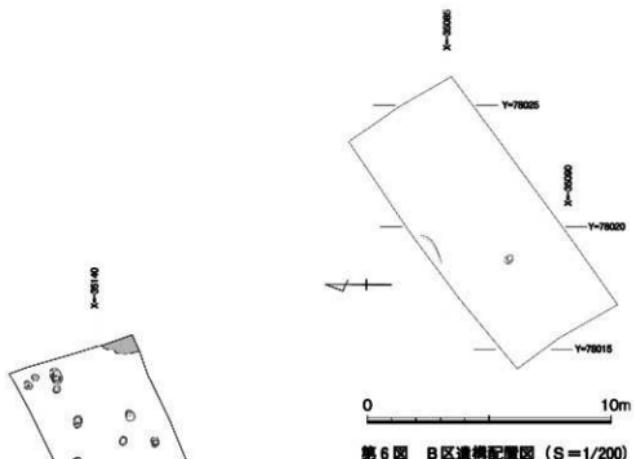
G区において検出である。平面64cmの円形をなし、深さは8cmである。焼土及び炭化材の検出があった。樹種同定試料 No. 37。放射性炭素年代測定試料 No. 8。

ピット11（第22図）

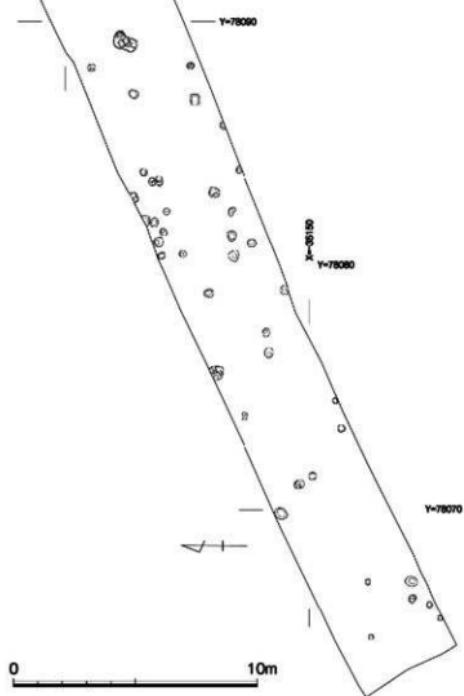
G区において検出である。平面121cmの円形をなし、深さは14cmを測る。樹種同定試料 No. 36。

豊穴状遺構（第23図）

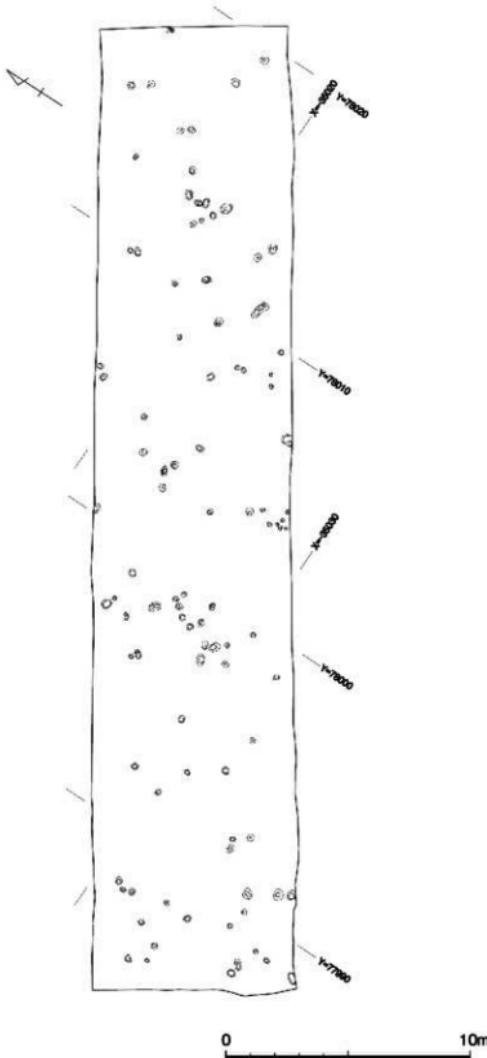
H区において検出である。平面は約3.0m×約2.5mの方形をなし、深さは最深部で60cmである。内部には不整形の落ち込みがみられるが、柱穴になるようなピットは認められない。また、床面には厚く炭化材の堆積が認められる。樹種同定試料 No. 40～No. 53。放射性炭素年代測定試料 No. 10。



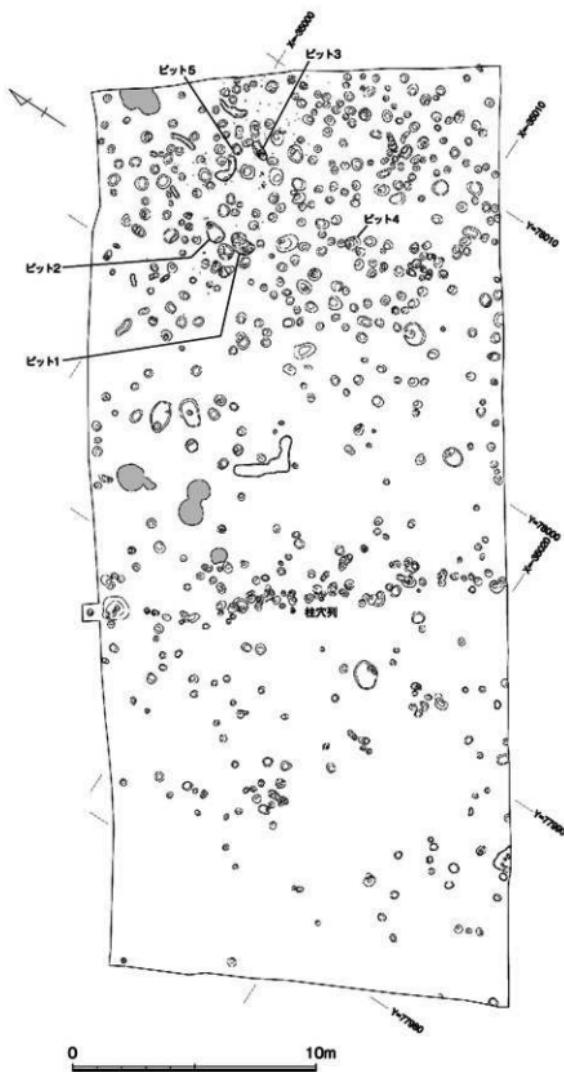
第6図 B区造構配置図 ( $S = 1/200$ )



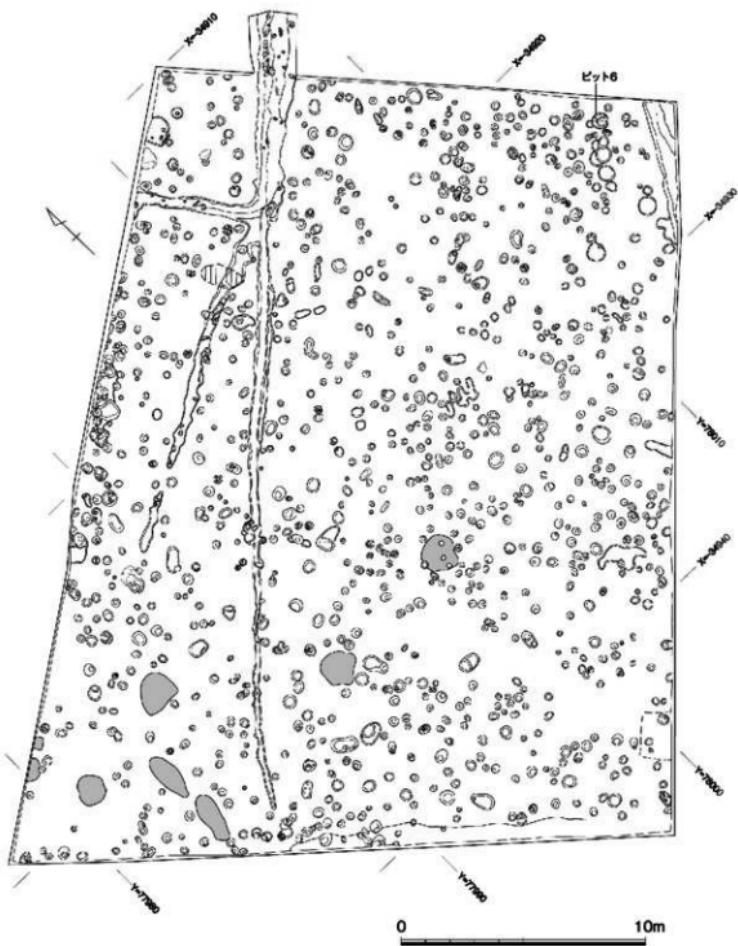
第5図 A区造構配置図 ( $S = 1/200$ )



第7図 C区造橋配置図 ( $S=1/200$ )



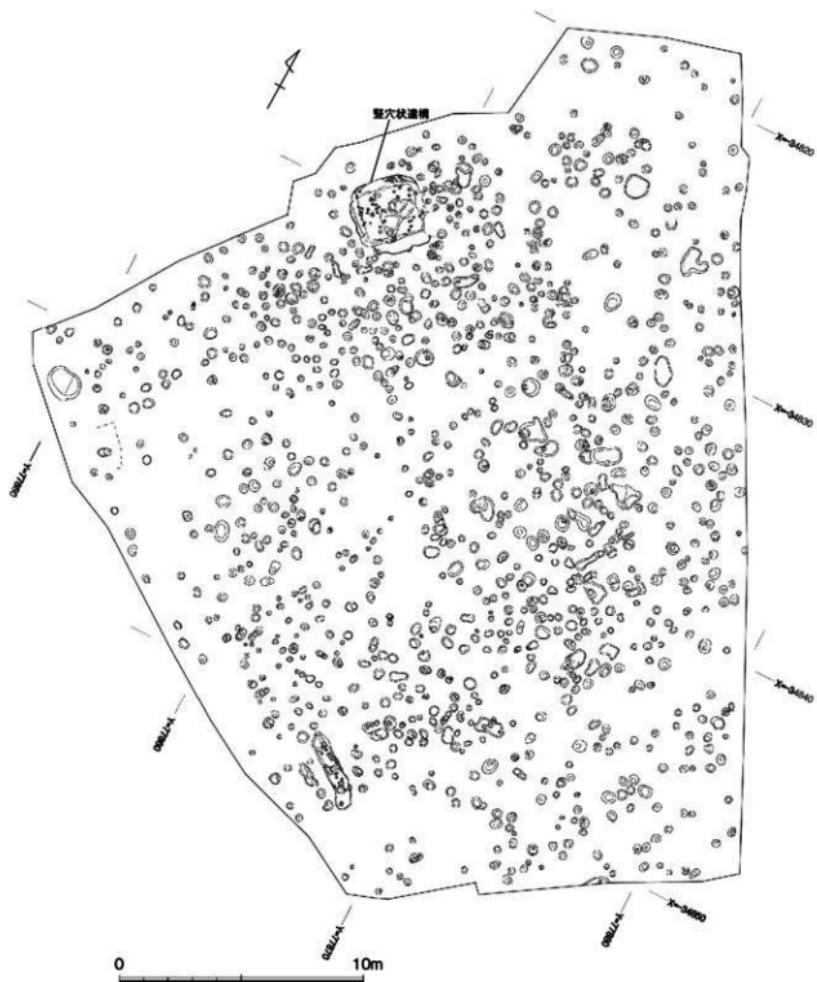
第8図 D区造構配置図 ( $S=1/200$ )



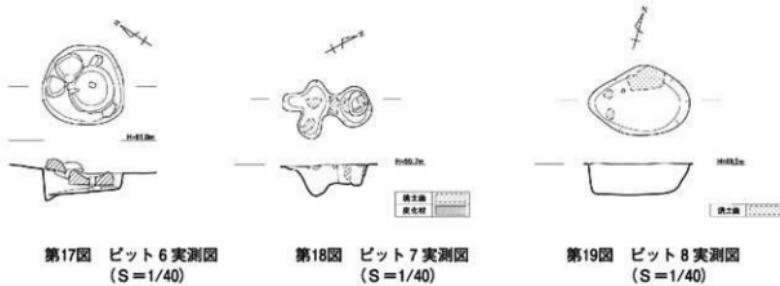
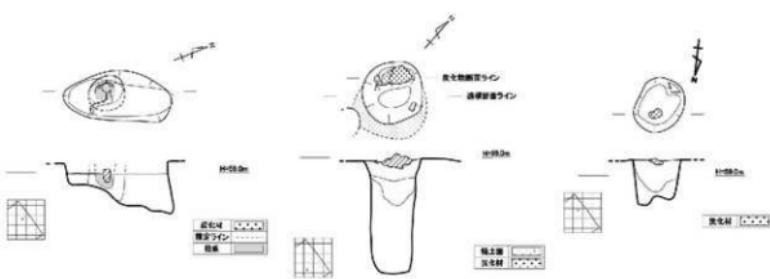
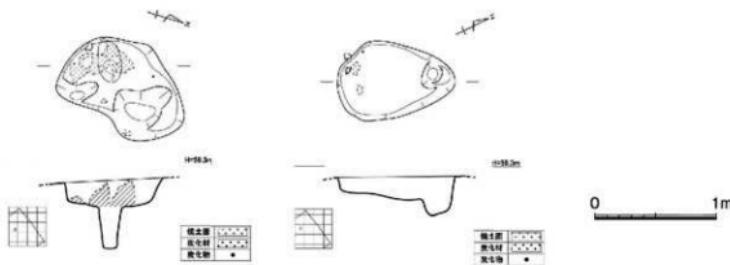
第9図 E区造構配置図 (S=1/200)



第10図 G区造構配図 (S=1/200)



第11図 H区造構配置図 ( $S=1/200$ )

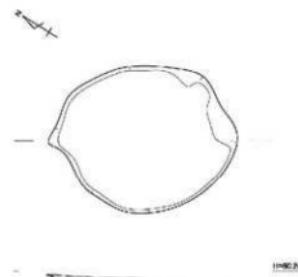




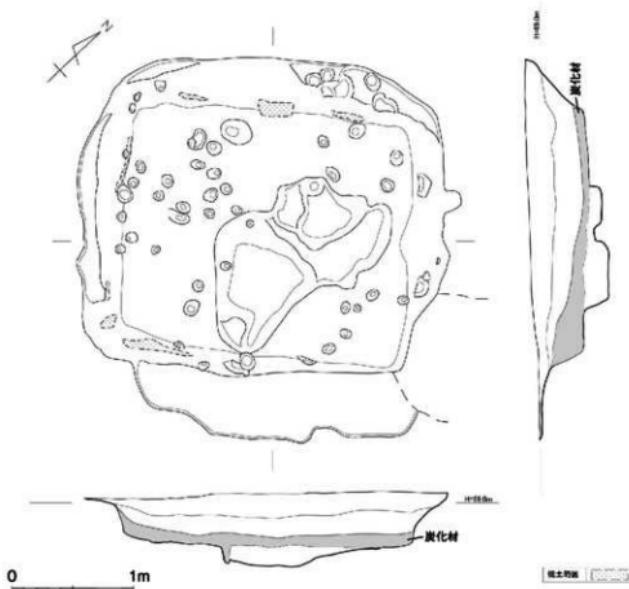
第20図 ピット9実測図  
(S = 1/40)



第21図 ピット10実測図  
(S = 1/40)



第22図 ピット11実測図  
(S = 1/40)



第23図 竪穴状遺構実測図 (S = 1/40)

## 第2節 出土遺物

### 1 土器・陶磁器

#### (1) 繩文時代早期～縄文時代中期の土器

1～97は押型文土器である。

1～35は楕円文を施文するものである。連珠文、円文もここに含める。

1～12は外面のみに施文を行う。1は口唇部を平坦に整え、外面の楕円文は連珠となっている。2はやや外傾しており、斜方向に施文する。3は直線的に外傾する口縁部で、粒の長い楕円文である。

4は薄手の器壁である。5は口唇部を丸く整えており、施文は横方向である。6は厚手の器壁から口唇部断面は先細りとなる。外面には粒の小さい楕円文を横方向に施文する。7は横方向の施文である。

8は大きく外傾するものと思われる。9は厚手の器壁で、口唇部は丸く整える。10は大きく外傾し、施文は円文である。11は外傾する薄手の口縁部で、口唇部はナデ調整により平坦である。12は強く外傾、口唇部はやや外反する。器壁が厚い。

13～17は外面と口唇部に施文を行うものである。13は外傾する資料で、連珠文を横方向に施文する。14はわずかに内傾しており、粒の小さい楕円文である。15は直立する口縁部である。16は外傾しており、口唇部は平坦である。17はわずかに外傾する口縁部で、外面には横方向の施文が行われる。

18～23は外面と口縁部内面に施文を行うものである。18は器高14.4cmの小型の深鉢で、直径6.8cmの平底の底部から開いて立ち上がった胴部は中ほどでやや膨らみをもち、口縁部は外傾する。復元口径は19.0cmを測る。外面の施文は斜方向である。19は断面やや先細りとなる外傾する口縁部である。外面口唇部から1cmほどは無文である。20の施文は連珠文によるもので、外面には横方向に施文される。21はやや外傾する口縁部で、楕円の粒は比較的小さく、外面の施文は横方向である。22は強く外反する口縁部の資料である。23は強く外傾しており、楕円文の粒は小さい。外面の施文は横方向である。

24・25はいずれも強く外反する口縁部付近の資料であるが、口唇部は欠く。

26～31は内面に原体条痕のある資料である。26はごく小さい平底の底部から胴部は膨らみをもって外へ立ち上がり、口縁部は大きく外反して断面は先細りとなる。楕円文の粒は小さく、外面の施文は横方向である。復元口径16.4cm、復元底径4.6cm、器高11.5cmを測る。27の楕円文はやや粒が大きく、口縁部内面の原体条痕は短く入る。28の楕円は粒が連なった連珠文で、内面の原体条痕は短めである。29の原体条痕は長めに入る。楕円文の粒は小さく、外面は口唇部に沿う部分は横方向、それより下位は斜方向の施文である。30は薄手の器壁である。外面は連珠文を縦方向に施文し、内面は口唇部付近まで連珠文を施文したのち、原体条痕を入れる。31は薄手の器壁で、口唇部は先細りとなる断面である。

32～35は底部の資料である。32、35は平底、33・34はやや上げ底の資料である。

36～68は山形文を施文する資料である。

36～41は外面のみに施文を行うものである。36は復元口径26.4cmを測る。器壁は厚く、口唇部はナデ調整により平坦に整える。外面の山形文は大ぶりである。37は外反する口縁部で、口唇部は丸く整える。外面の施文は横方向である。38は断面先細りとなる口縁部で、外面に波の緩い山形文が横方向に施文される。39は大きく外傾する口縁部で、外面は横方向の施文である。40は口唇部を丸く整え、

外面には目の細かい山形文を横方向に入れる。41は直立する口縁部で、断面はやや先細りとなる。

42~44は外面と口唇部に施文を行うものである。42はやや外傾して直線的に立ち上がる口縁部の資料で、外面の施文は斜方向である。43はほぼ直立する口縁部で、外面への施文は斜方向である。44は外傾する資料で、施文は縱方向である。

45は内外面に施文を行うものである。大きく外傾する口縁部で、口径に対して器高の低い鉢形をなすものと思われる。外面の施文は口縁部に層部分が横方向、それより下位は斜方向である。

46~57は内面に原体条痕の認められる資料である。46は外反する口縁部で、外面の施文は斜方向である。47は外反する口縁部で、外面の施文は多方向に入る。48~52は外反する口縁部である。いずれも外面は横方向に施文し、内面は口唇部付近まで山形文を施文したうえで、その上に原体条痕を重ねている。48~50、52はいずれも比較的細かい山形文である。53の外面には縱方向の施文がなされ、内面には短い原体条痕が入る。54は外反する口縁部で、外面の施文は横方向である。内面の原体条痕は比較的長めに入る。55も外反する口縁部で、外面の施文は横方向である。56の口唇部は平坦に整える。57の内面には斜方向に原体条痕が入る。

58~61は口唇部を欠くが、いずれも内外面に山形文の施文が認められるものである。61は細かい山形文である。

62~68は底部の資料である。いずれも平底であるが、65については若干上げ底となる。また、底面には葉脈圧痕が認められる。復元底径は、62が8.7cm、63が5.4cm、64が5.0cm、65が6.8cm、66が5.6cmである。

69~89は格子目文の資料である。

69~74は外面のみに施文するものである。69は小型品で、復元口径は13.9cmを測る。口縁部は外傾し、口唇部は丸く整える。70~72はやや外傾する口縁部である。73は外反する口縁部、74は直立する口縁部である。

75・76は外面と口唇部に施文する資料である。どちらもわずかに外傾する。

77~81は内外面に施文する資料である。大きく外反し、ナデ調整で口唇部は平坦に整える。79は強く外傾する資料である。80の器壁は比較的薄手で、外反する。

81は内面に原体条痕が入る資料である。外反して大きく開く。

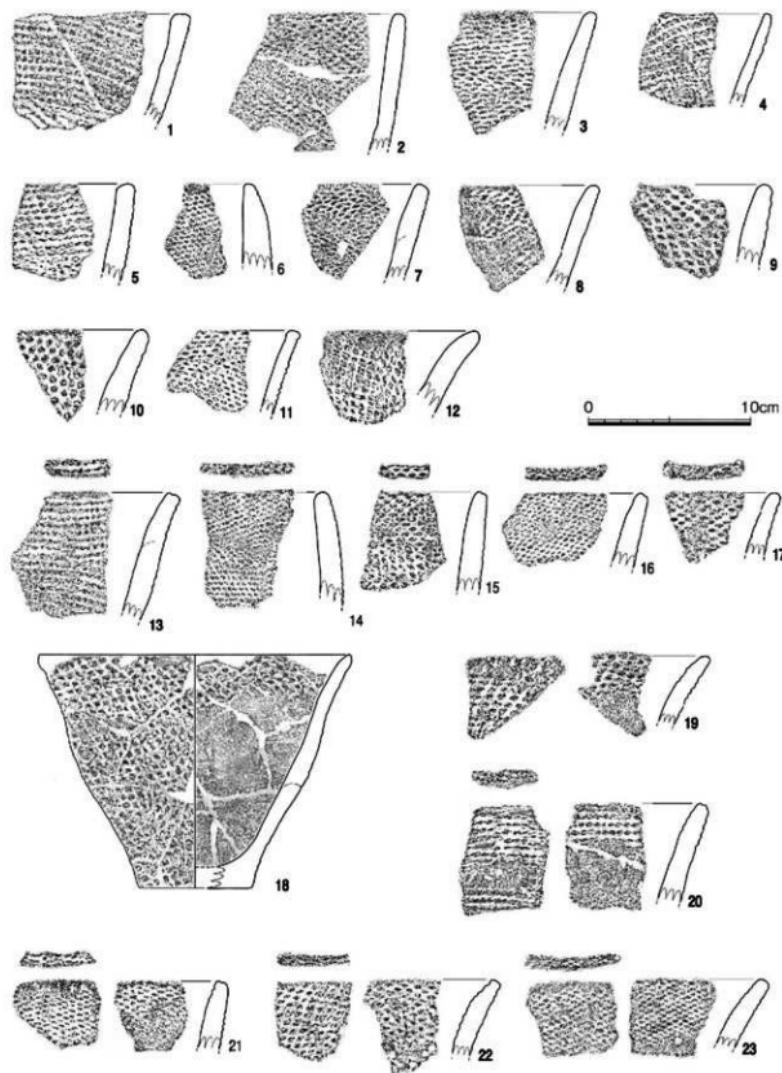
82は口唇部を欠くが、内面にわずかに格子目文が確認できる。

83~89は底部の資料である。83はわずかに上げ底となっており、胴部は粘土組積み上げの接合部分で破損する。復元底径9.0cmである。84は平底で、復元底径9.2cmである。85も平底で、復元底径は9.4cmを測る。86は復元底径5.0cm、87は復元底径5.6cmで、どちらも比較的小型品の底部であろう。88はしっかりとした上げ底で、復元底径は6.6cmを測る。

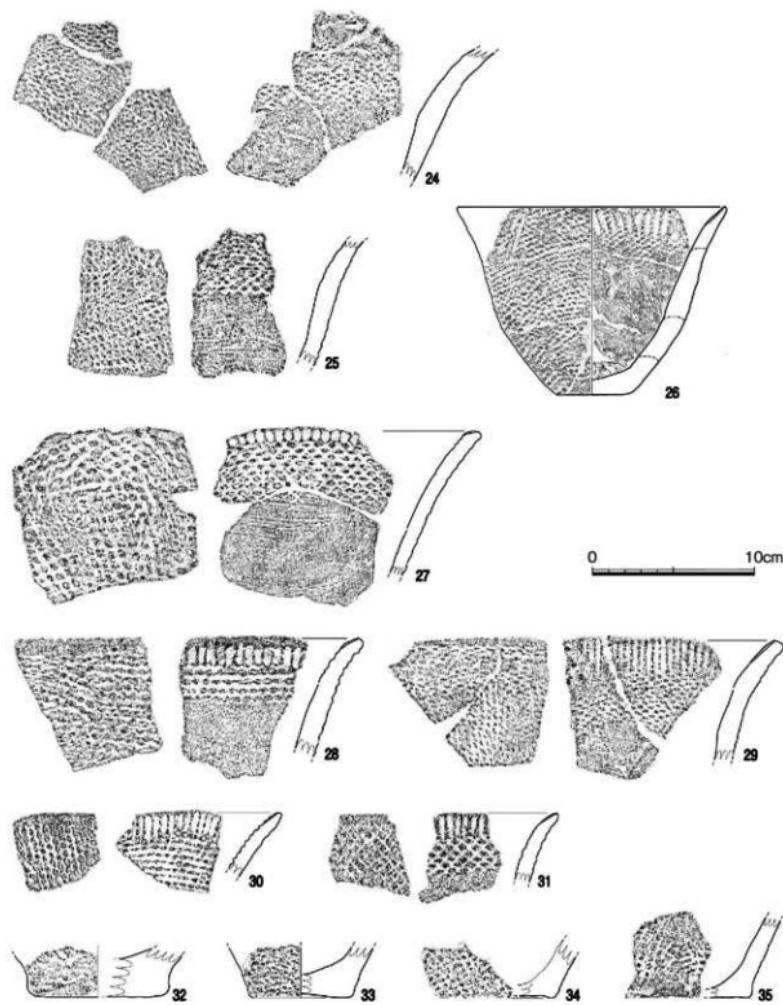
90~94は平行文の資料である。90は直立する口縁部で、口唇部は丸く整える。91は大きく外へ開く口縁部で、内外面に施文する。92も大きく外反する口縁部で、外面には平行文を、内面には原体条痕のみを施文し、口唇部には刻目を施す。93は胴部の資料である。94は復元底径7.1cmを測る平底の底部で、底面には葉脈の圧痕が残る。

95~97は異種押型文原体による施文がみられる資料である。

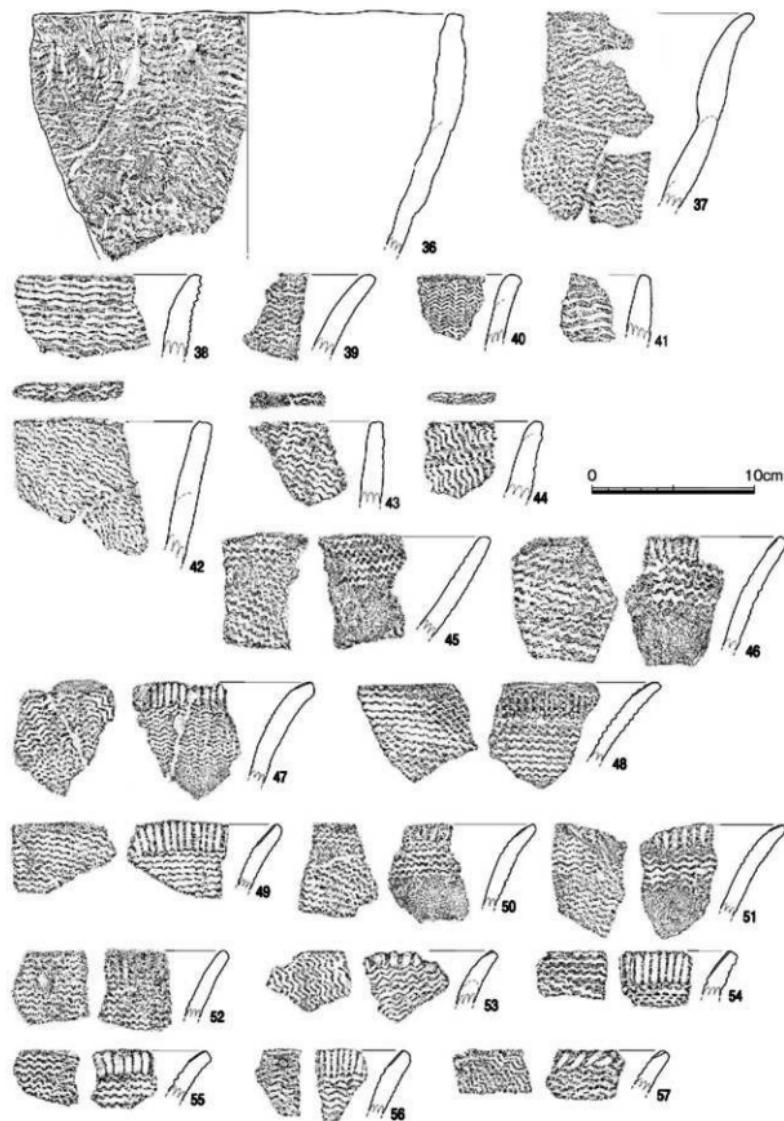
95は大きく外反する薄手の口縁部で、外面には格子目文、内面には山形文と原体条痕が施文される。



第24図 縄文時代早期～縄文時代中期の土器実測図① (S = 1 / 3)



第25図 縄文時代早期～縄文時代中期の土器実測図② (S = 1 / 3)



第26図 縄文時代早期～縄文時代中期の土器実測図③ (S = 1 / 3)

96は大きく開く口縁部の資料で、外面には山形文が施され、内面には楕円文と短い原体条痕が施される。97は脣部の資料で、外面に山形文と平行文が観察される。

98は外傾する口縁部の資料で、外面には粘土紐をつまみ出すようにして貼り付けた装飾と縱方向の沈線文を施し、内面には横方向に短沈線を連続して入れる。また、口唇部には爪によるものと思われる刻目を施す。99は脣部から屈曲して外に開く口縁部の資料で、口縁部外面には凹線文を施す。

## (2) 縄文時代後期～弥生時代前期の土器

100～107は縄文時代後・晚期の砲弾型を呈する粗製の深鉢である。

100は復元口径33.0cmを測る深鉢で、脣部はほぼ直立して立ち上がり、口縁部は外反してわずかに開く。外面は貝殻条痕調整のち擦過調整を施す。内面は横方向の擦過調整を施し、そのちに口縁部のみナデ調整を行う。101は口唇部に突起をもつ資料で、内外面ともに貝殻条痕調整を施す。粘土紐積み上げの痕跡が明瞭である。一応深鉢に含めたが、洗面器状の器形の粗製浅鉢である可能性もある。102は大きく開く脣部から直立する口縁部に至る。103は薄手の器壁であるが、比較的大型の深鉢であろう。104は口唇部をナデ調整によって平坦にする。105は不明瞭な屈曲部を作つて口縁部は外傾する。106は粘土紐の積み上げが観察される資料である。107は直立する口縁部で、外面には斜方向の貝殻条痕調整を施す。口唇部はナデ調整で平坦に整える。内面には丁寧なナデ調整が施される。

108～111は丸みを帯びた脣部から大きく外へ開く口縁部をもつ鉢の資料である。口唇部断面は尖り気味で、内外面ともに研磨調整が施される。108は口唇部内面に沈線1条を引く。110・111は口唇部外面に沈線2条を引く。

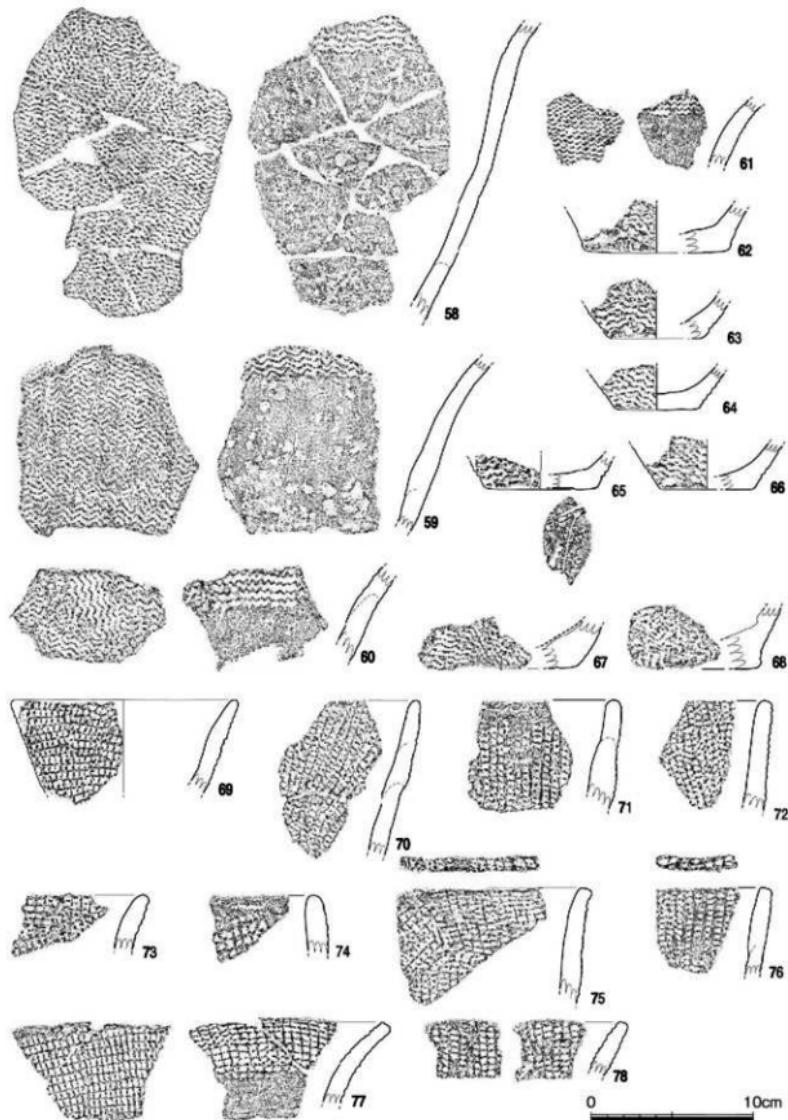
112・113は磨消縄文の資料である。113は鉢の内湾する口縁部である。114も内湾する口縁部で、外面には沈線と刻目が施される。

115～124は脣部上位で屈曲する深鉢の資料である。そのうち115～119は脣部上位で屈曲し、口縁部は強く外反する深鉢の資料で、いずれも内外面ともに研磨調整が施される古相のものである。

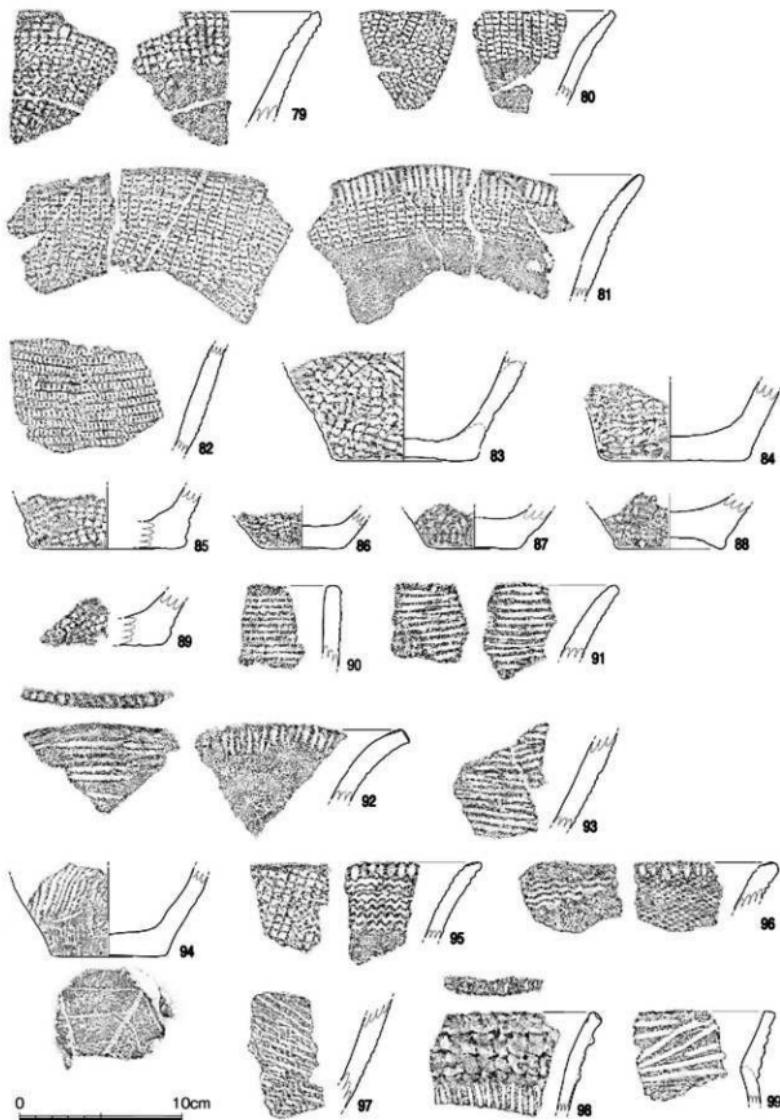
120は復元口径29.0cm、復元脣屈曲部径32.0cmを測る。直線的に立ち上がる口縁部はやや内傾する。内外面ともに擦過調整を行うが、外面はそのちナデ調整を施す。121は屈曲部から強く内傾する口縁部である。122は屈曲して内傾する口縁部で、口唇部は平坦に整える。124は口唇部をつまみ出るようにナデ調整を行い、外側へと張り出しを作る。

125～144は脣部で屈曲し、上位で外反する頸部から口縁部文様帶へと至る鉢、深鉢の資料である。125は外反する頸部に直立する口縁部がつく。口縁部外面には1条の沈線を引き、口縁部内面には段を作る。126は強く外反する頸部にやや内傾する口縁部が短く立ち上がる。口縁部には2条の沈線を引く。口唇部は平坦である。127は波状をなす口縁部で、断面は内湾気味である。沈線2条を引く。

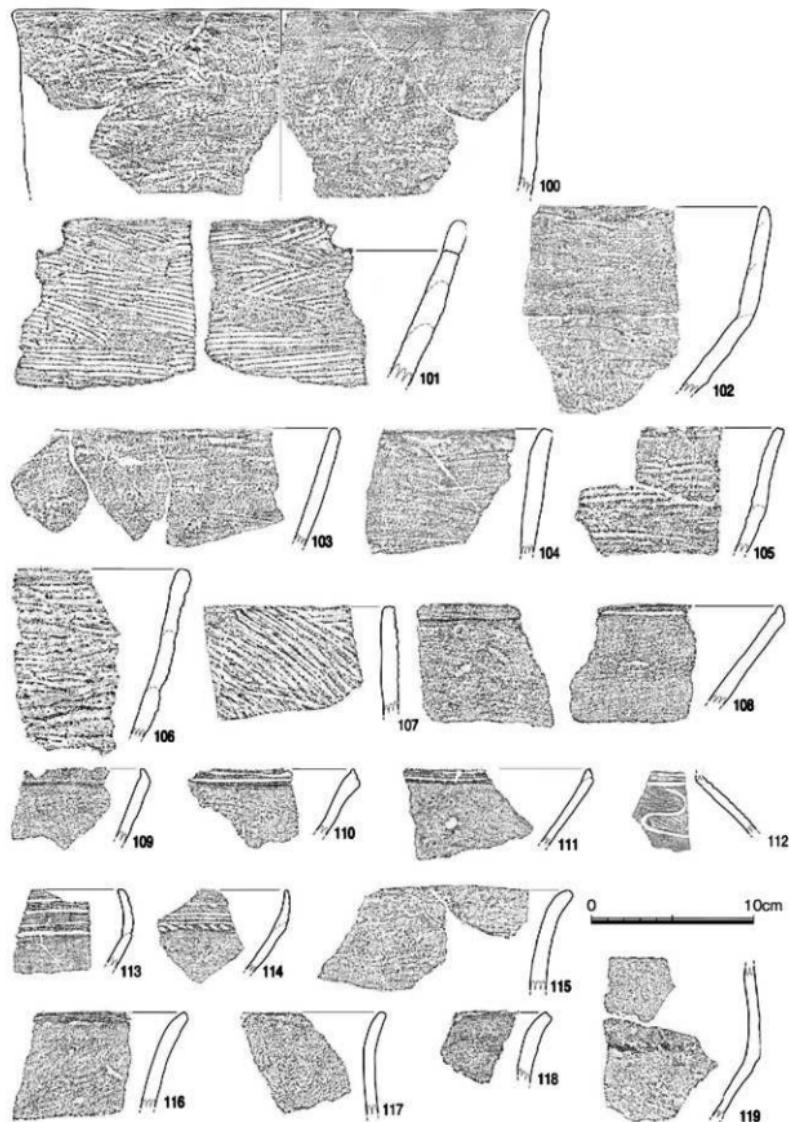
128は短く立ち上がる口縁部で、2条の沈線を引く。129は直立する口縁部に2条の沈線を引く。口唇部は平坦に整える。130は2条の沈線を引いた内傾する口縁部である。131・132は同一個体と思われる。頸部と口縁部との境界の外面での張り出しが不明瞭である。2条の沈線を引く。133は頸部から口縁部へは屈曲するのみで、外面での張り出しが作らない。口縁部には2条の沈線が入る。口唇部は平坦である。134は強く外反する頸部に口縁部を直立させてのせる。3条の沈線を引く。135は3条の沈線を引く口縁部で、直立する。136は外傾する口縁部で、3条の沈線をもつ。



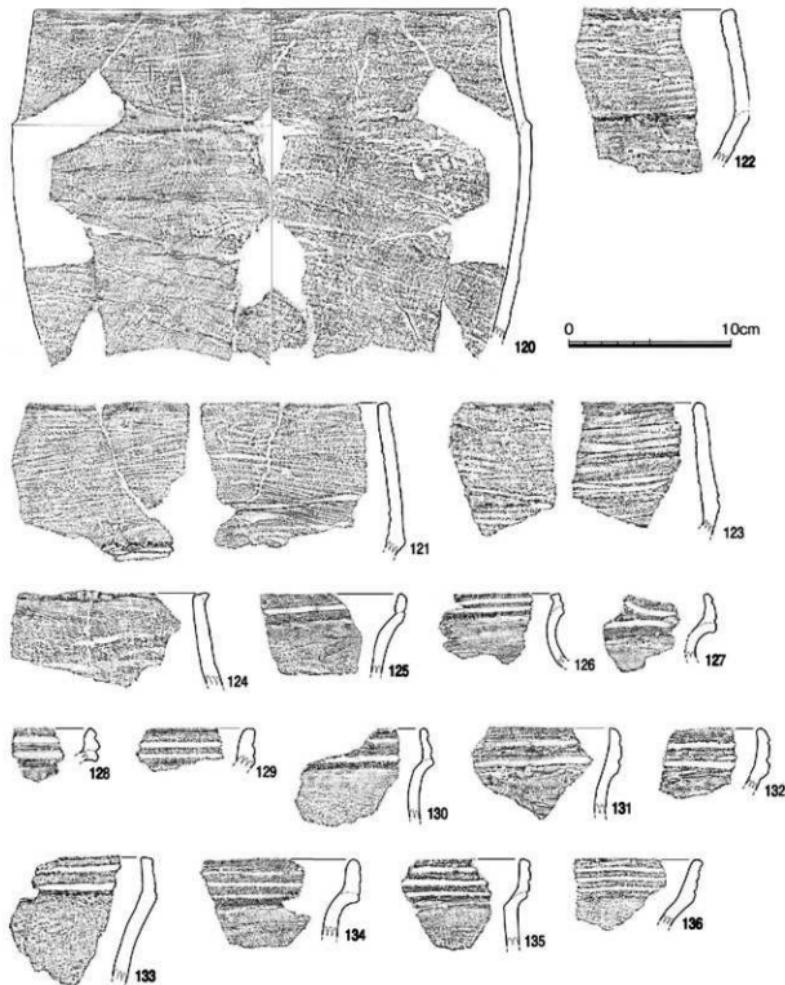
第27図 純文時代早期～純文時代中期の土器実測図④ (S = 1 / 3)



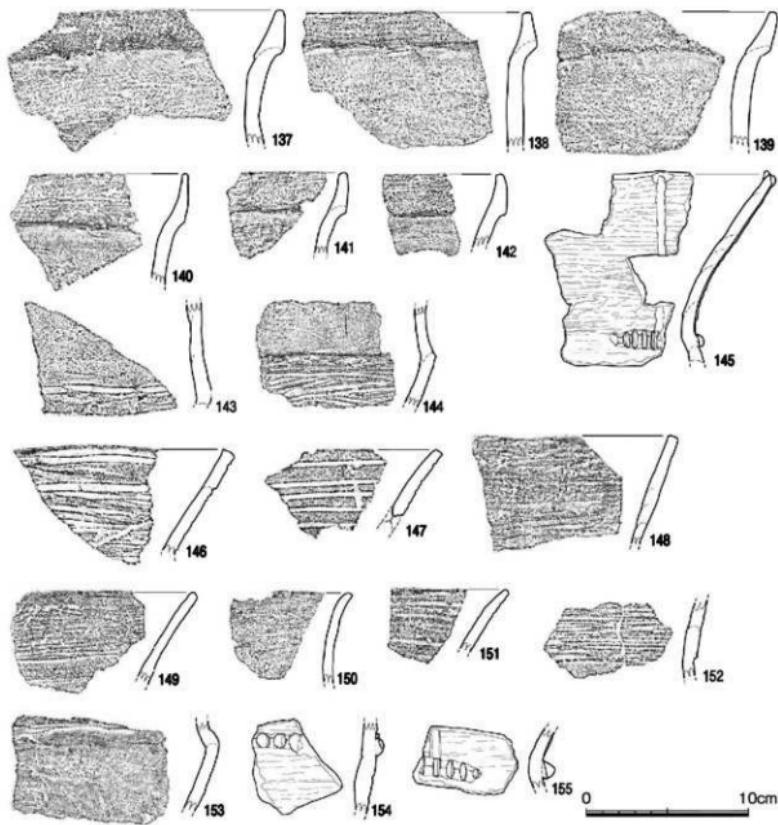
第28図 縄文時代早期～縄文時代中期の土器実測図⑤ (S = 1 / 3)



第29図 繩文時代後期～弥生時代前期の土器実測図① (S = 1 / 3)



第30図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器実測図② (S = 1 / 3)



第31図 桶文時代後期～弥生時代前期の土器実測図③ (S = 1 / 3)

137～142は口縁部文様帶に沈線を施さないものである。140は器壁に細かい間隙が多数観察される。143・144は胴屈曲部の資料である。143は屈曲部直上に沈線1条を巡らす。144は屈曲部より下位は貝殻条痕調整を残すが、上位は研磨調整によって貝殻条痕調整を消している。

145～155は肩部をもち、口縁部は大きく外傾もしくは外反する深鉢の資料である。

145は肩部から外面で段を作つて口縁部は大きく外傾する。肩部には短い粘土紐を貼り付け、刻目を施す。口縁部外面には横方向の貝殻条痕が施される。また、口唇部に指押さえによる凹点を施し、そこから垂下沈線を引く。146は大きく開く口縁部で、外面下端には肩部と口縁部との境界となる段が観察される。外面には粗く横方向の沈線を引く。口唇部は平坦に整える。147は大きく外傾する口縁部で、口唇部は平坦に整えており、外面には平行沈線を引く。焼成後の穿孔が認められる。148是比较的薄手の器壁で大きく外傾する口縁部である。149～151は外反する口縁部で、薄手の器壁である。152は肩部と口縁部との境界となる段が認められる資料である。153は丸みを帯びた肩部で、その上部には外面に段が認められる。154は粘土紐の貼付装飾であると判断した。粘土紐への刻目は指先による。155は肩部の資料で、短い粘土紐の貼り付けに刻目を施す。また、垂下沈線が確認できる。

156～189は突帯文土器の壺である。

156～159は指先による刻目を施したものである。156は外傾する口縁部で、口縁部の突帯は口唇部から0.9cm下がった位置に貼り付けられる。157は口唇部に直接刻目を施す。158・159は胴部突帯の資料である。159は強い屈曲をみせる。

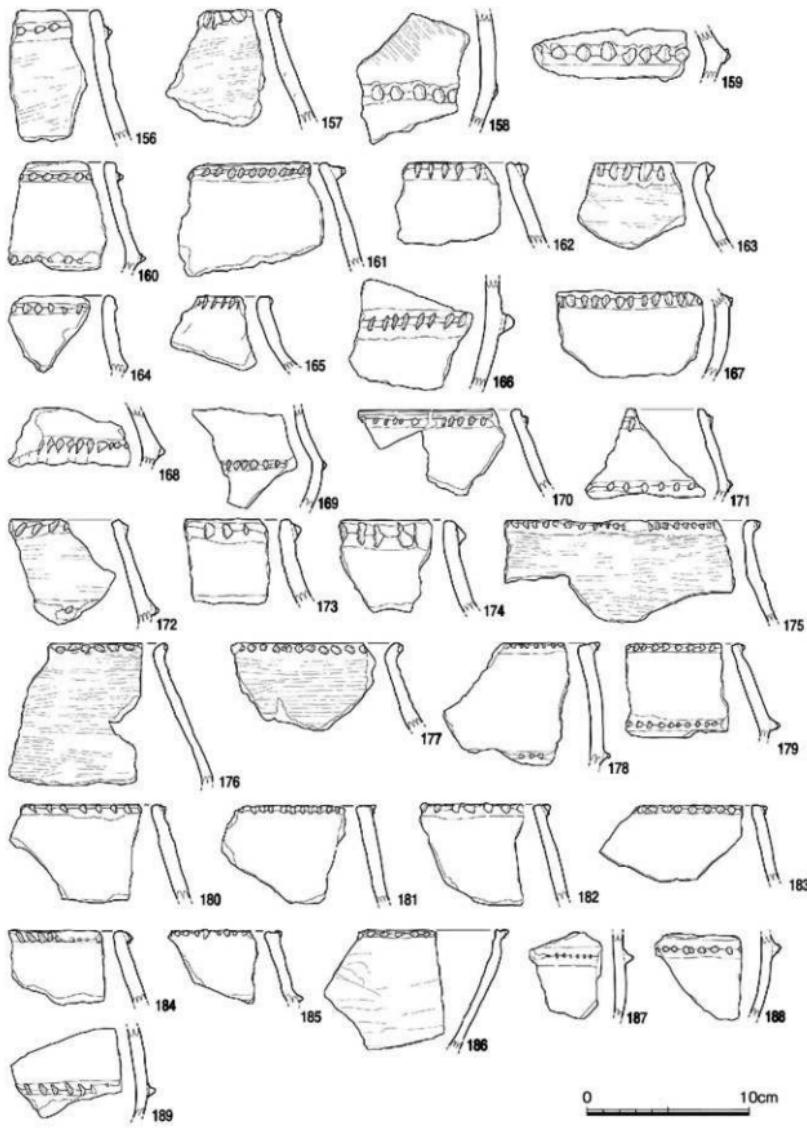
160～169はヘラ状工具による刻目を施した資料である。160の口縁部は強く内傾し、口唇部上面はナデ調整により平坦である。口縁部突帯は口唇部から0.5cm下がった位置への貼り付けである。外面ともに丁寧にナデ調整を行つてゐる。161は内傾する口縁部に背の高い突帯が口唇部に近接して貼り付けられる。162の突帯も口唇部に近接して貼り付けられる。163は強く内傾する口縁部で、外反する口唇部に直接刻目が施される。164は小型品で、口縁部は内傾する。口縁部の突帯は口唇部から0.4cmほど下がる。165は強く内傾する口縁部で、口唇部を外反させて直接刻目を施す。166～169は胴部の資料である。166は屈曲が不明瞭である。167は強く屈曲するものと思われ、内外面に擦過調整を残す。168も強く屈曲する。169は小型品で、口縁部は内傾、外反する。

170～172は棒状工具の側面押し当てによる刻目と思われる。170は強く内傾する口縁部で突帯は口唇部から0.3cmほど下がる。外面には炭化物が付着する。171は非常に薄手の作りで、胴部でしっかりと屈曲し、口縁部は内傾する。口縁部突帯は口唇部から0.5cm下がる。172は胴部突帯から強く屈曲して内傾する口縁部である。口縁部突帯は口唇部に近接する。斜方向の刻目が入る。

173・174は二枚貝貝殻腹縁による刻目を施す。同一個体の可能性が高い。内傾する口縁部で、突帯は口唇部から0.2cmほどと近い。外面には横方向の擦過調整が残る。

175～177は竹管状工具による刺突で刻目を入れるものである。いずれも内傾する口縁部で、口唇部を外反させて刻目を施し、外面には横方向の貝殻条痕調整が残る。同一個体の可能性が高い。

178～186は口唇部に接して突帯を貼り付けるものである。178は胴部と口縁部の2条の突帯をもつ。屈曲は不明瞭で、突帯は断面三角形で、刻目は細かく入る。179も2条の突帯をもち、口縁部突帯のほうが胴部突帯より細い。180は内傾する口縁部で、外面には横方向の擦過調整が残る。181の突帯はごく小さく、外面は丁寧なナデ調整が施される。182は強く内傾し、丁寧なナデ調整が行われる。183は



第32図 縄文時代後期～弥生時代前期の土器実測図④ (S = 1 / 3)

比較的薄手の器壁で内傾する。外面のナデ調整は丁寧である。184は強い内傾をみせる。185は小型品とみられ、口唇部から胴部突帯までは幅が狭い。口縁部の刻目については、突帯を貼り付けるのではなく、口唇部外端をつまみ出したうえで直接刻目を施した可能性がある。186は非常に薄手の器壁で、外面には粗いナデ調整が施される。口縁部の突帯はごく細いものである。胴部突帯はもたず、一条臺もしくは一条鉢となるものか。187～189は胴部突帯の資料である。187は明瞭に屈曲せず、断面三角の突帯先端に細かく刻目を施す。188・189の屈曲も緩い。189の外面には炭化物が付着する。

190～209は深鉢、突帯文土器壺類の底部資料である。190～193は上げ底の資料である。190・191は内外面ともにナデ調整を行う。192は外面と底面が研磨調整である。193は外面、研磨調整が観察され、底面は擦過調整により底面を上げる。194は断面張り出しをもたない平底の資料で、外面、底面には研磨調整が施される。

195～200は断面張り出しをもつ底部の資料である。195の外面は比較的丁寧なナデ調整を施す。196は外面胴部に貝殻条痕調整が残る。197の外面は擦過調整が施される。198は内面にリング状に炭化物が付着する。199は底面に研磨調整が行われており、比較的器壁は薄手である。壺の底部である可能性も残る。

201～203は粗製深鉢の底部で、断面張り出しをもたないものである。202は胴部外面に貝殻条痕調整が残る。203の外面底部付近は丁寧なナデ調整を行っている。

204～209は断面張り出しをもって厚底となるものである。上げ底の204、206～208と、平底の205、209がある。205は内面にリング状に炭化物が付着する。206の底面上げ底となっている部分には粘土搔き取りの擦過調整が明瞭である。208の底面は浅く擦過調整によって粘土を搔き取る。209は底径6.5cmと小型品である。

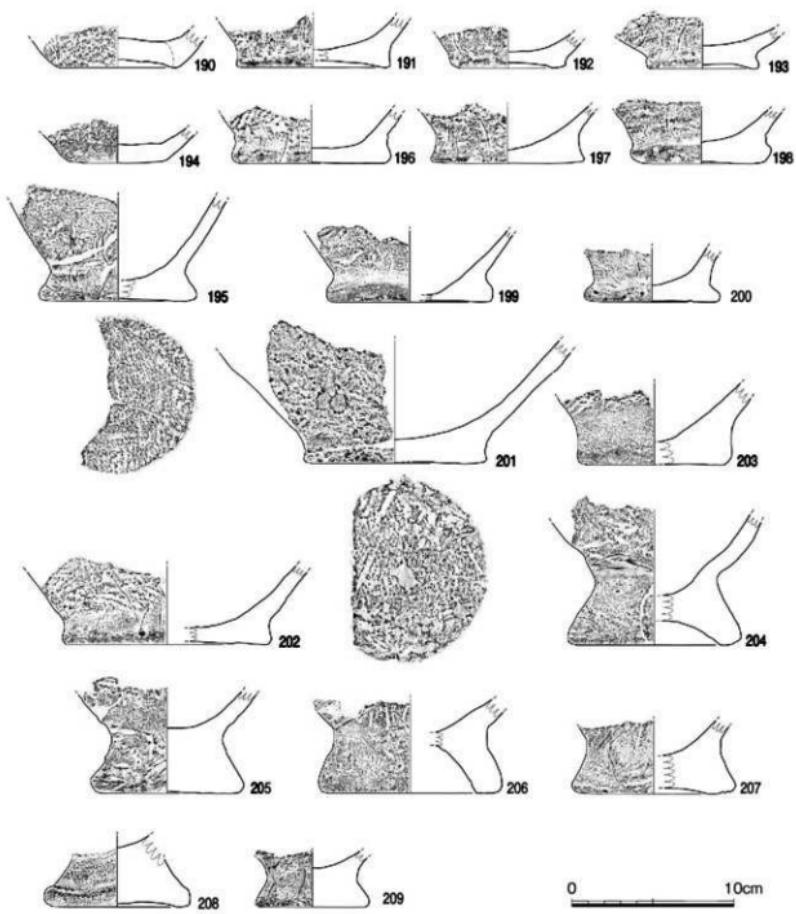
210～303は浅鉢の資料である。

210～212は外反する頸部に口縁部がつく資料である。210は外開きの頸部で、口縁部は直立して外面に2条の沈線を引く。211・212は強く外反する頸部に短い口縁部がつく。口縁部外面には1条の沈線を引く。

213は強く外反して立ち上がる資料で、口唇部内面に段を作る。214は浅く立ち上がる胴部に肩部を作って外開きの短い頸部、口縁部に至り、口唇部内面に段を作る。

215～221は丸底、扁球状の胴部に短い頸部がついて口縁へと至るものである。口縁部は丸縁となるものが多い。215は胴部最大径18.6cmを測る資料で、外面、胴部下半、肩部と頸部との境界にそれぞれ段を作る。頸部は外傾し、口縁部には突起がつく。G区で検出された直径90cm、深さ48cmの土坑内より出土した。植物珪酸体分析試料No.15～No.20。216は非常に薄手の器壁で、ややなで肩となる胴部に外傾する短い頸部がつき、口縁部は丸縁とならず、口唇部にはヒレ状の突起がつく。217は強く張り出した肩部に短い頸部と丸縁の口縁部がつく。口縁部には外面に1条の沈線を引く。218は口唇部にリボン状突起をもつ。外面には沈線を引く。219は外面に沈線を引く。220・221は強く張った肩部に外傾する頸部がつく。口縁部外面には沈線を引かない。

222は胴部最大径7.7cm、底径3.2cmの小型の資料で、上げ底となる底部から胴部は開いて立ち上がり、肩部を作る。大きく開く頸部から口縁部に至ると思われるが、口縁部付近は欠損している。肩部には2条の沈線を引くが、1条は途中で途切れ、あいまいである。



第33図 純文時代後期～弥生時代前期の土器実測図⑤ (S = 1 / 3)

223～225は波状口縁となるものである。223は突起をもち、口唇部内外に段を作る。224は緩い波状の口縁となる。外面には三叉文を含む沈線文が施され、外面胴部下位には段を作るものと思われる。225は波頂部の資料で、断面、口縁部は肥厚し、口唇部は先細りとなる。

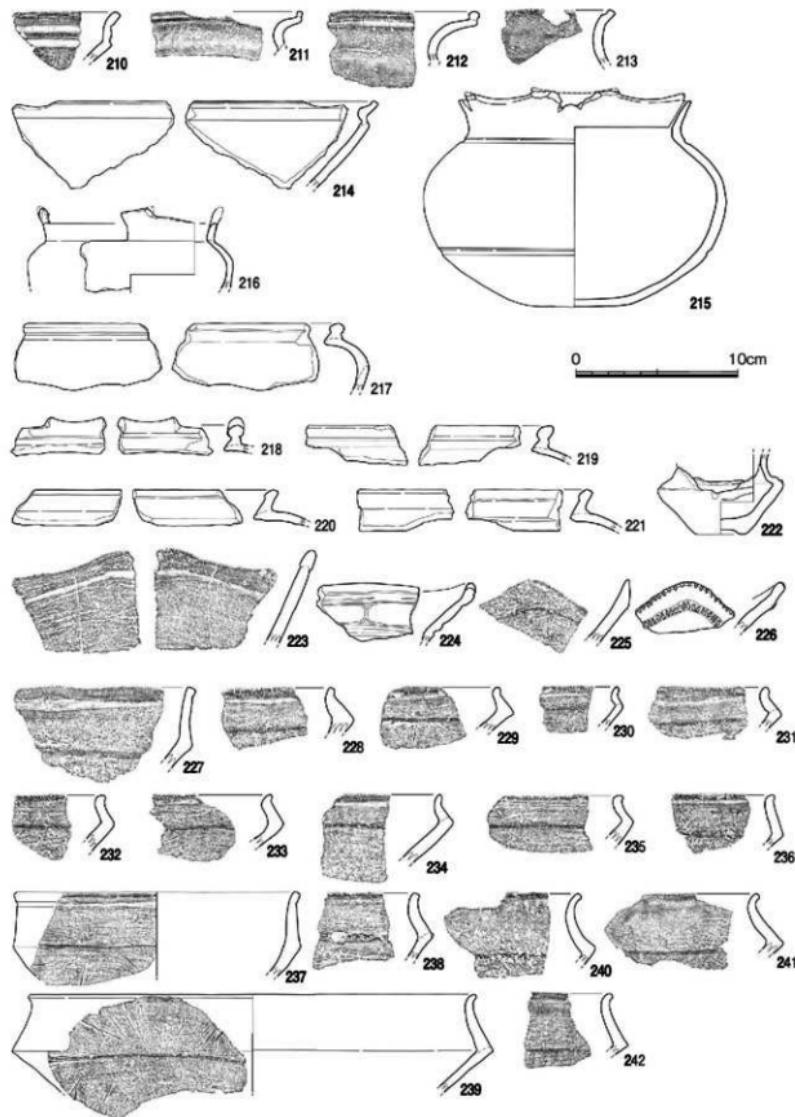
226はいわゆる方形浅鉢である。口唇部とその下位に貼り付けた突帯にそれぞれ刻目を施す。

227～242は断面逆「く」字状の屈曲をみせる資料である。227はほぼ直立する口縁部で、外面に1条の沈線を引く。228～236は口唇部を外反させ、外面で段を作る。237はやや膨らみをもった胴部から屈曲して口縁部は直立する。口縁部外面には沈線を引く。丁寧に研磨調整を施した黒色磨研土器である。238は外反する口縁部で、口唇部は平坦である。屈曲には刻目を施す。外面、屈曲部以下に炭化物の付着が認められる。239～242は屈曲部から強く口縁部は内傾し、口唇部は先細りとなって外反する資料である。239は復元口径27.6cm、復元胴部最大径29.6cmを測る。

243～282はボウル状、洗面器状の器形の資料である。小型の塊形のものも含む。243・244は比較的小型の資料で、精製である。243は黒色磨研で、胴部外面に緩く稜を作る。口唇部は外へ屈曲し、内面には不明瞭な沈線が走る。244は内外面ともに擦過調整のうちにナデ調整を施す。外面には炭化物が付着する。245～247は屈曲部をもつ資料である。いずれも内外面ともに研磨調整である。248～250は外反する口縁部の資料である。248・249はナデ調整、250は研磨調整を施す。251は復元口径18.8cm、器高6.6cmの資料である。丸底から浅く聞く胴部はそのまま口縁部へと直線的に至り、口唇部はわずかに外反する。器壁は非常に薄い。外面には研磨調整を施すが、底部付近は擦過調整を残す。内面はナデ調整である。252・253の外面には炭化物が付着する。254は内外面ともに丁寧な研磨調整が施される。

255は直線的に外傾する口縁部で、内面、口唇部から4cmほどは研磨調整を施す。256は内外面に貝殻条痕調整を施し、内面はその後ナデ調整を行う。外面には炭化物の付着がある。257は内外面ともに擦過調整を施し、内面についてはそのちナデ調整を行う。外面口縁部付近に炭化物が付着する。258は断面先細りとなる外傾する口縁部で、内外面ともに貝殻条痕調整を施し、内面の口縁部近くについてはナデ調整を行う。外面に炭化物の付着が認められる。259は貝殻条痕調整の残る外面に炭化物が付着する。263はヒレ状突起を付す。264は突起をもつか波状となる口縁部である。外面には擦過調整が施される。265は口唇部に突起をつける。266は胴部の資料で、丸底となるものと思われる。外面には貝殻条痕調整を施し、内面は貝殻条痕調整のち粗くナデ調整を行う。内面下部には炭化物が付着する。267は内外面ともにナデ調整を施した厚手の器壁である。突帯をカーブさせて貼り付け、ヘラ状工具による刻目を施す。

268～282は口縁部に刻目もしくは刻目突帯をもつ資料である。268～271は口唇部に直接刻目を施すものである。268～270はいわゆるヘラ状工具による刻目である。271の刻目は棒状工具の側面押し当てによるものと思われる。272・273は突帯に指先による刻目を施す。272の突帯は口唇部に近接する。273は外面に炭化物が認められる。274～279はヘラ状工具による刻目を施す。275、277・278の突帯は口唇部に近接する。278は浅く広がる口縁部で、内面は丁寧に研磨調整を施す。280・281は二枚貝貝殻の腹縁による刻目である。280は太目の突帯に大ぶりの刻目を施す。外面には炭化物の付着が認められる。281は突帯下に2条単位の線刻が入る。282は口唇部に接して貼り付けられた突帯におそらく植物の茎を裁断したものと思われる竹管状工具の小口を刺突することによって刻目を入れる。外面に



第34図 桜文時代後期～弥生時代前期の土器実測図⑥ (S = 1 / 3)

は横方向の貝殻条痕調整が行われ、炭化物が付着する。屈曲部をもつが外面で段を形成しており、組織痕土器の可能性もある。

283~297は型取り成型によって製作された組織痕土器である。283~288はアンギンの圧痕が残る資料である。283はボウル状の器形をなすものと思われる。3cm幅程度の粘土紐の積み上げが明瞭である。外面口縁部付近は浅く擦過調整を施し、内面には粗い研磨調整を行う。アンギンの経糸間幅は0.4cmと非常に狭い。284は復元口径34.8cmを測る。口縁部外面には貝殻条痕調整を残す。下部にわずかに残るアンギン圧痕は経糸間が0.4cmと非常に狭い。285・286は同一個体であると思われる。285は口縁部への立ち上がり部分、286はそれより下位の部分である。内面はいずれも丁寧に研磨調整が行われる。286の外面には部分的に研磨調整を帯状に入れてアンギン圧痕を消している。287の内面は丁寧に研磨調整が行われる。外面には炭化物が付着する。288の内面は丁寧なナテ調整である。

289・290は網目圧痕の残る資料である。290の内面は丁寧に研磨調整が施されており、黒色を呈する。

291~296は籠目圧痕の資料である。291は復元口径33.0cm、器高13.4cmを測る。丸底の底部には幅約0.4cmの素材を編んだ籠目の圧痕が観察される。口縁部はやや外傾し、外面には貝殻条痕調整が施される。292はやや不鮮明であるが、外面下部に圧痕が残る。外面圧痕部と口縁部との境界には段を搔き取るような擦過調整が施される。外面には炭化物が付着する。293も圧痕部から口縁部への立ち上がり部分である。295の内面は研磨調整が施される。

297は網目圧痕と籠目圧痕の2種がみられる資料である。外型としての籠と、粘土と外型とを剥がれやすくするための網の両方の圧痕が残ったものである。

298~303は底部の資料である。298は復元底径5.8cmの上げ底の資料である。内面には炭化物が認められる。299は内外面ともに丁寧な研磨調整が行われている。300は非常に薄手の作りである。301は底部が若干上がる。全体よく研磨されている。302は底面含め全体に研磨調整を施すが、やや粗い。303はごく細い沈線2条を外面に引く。

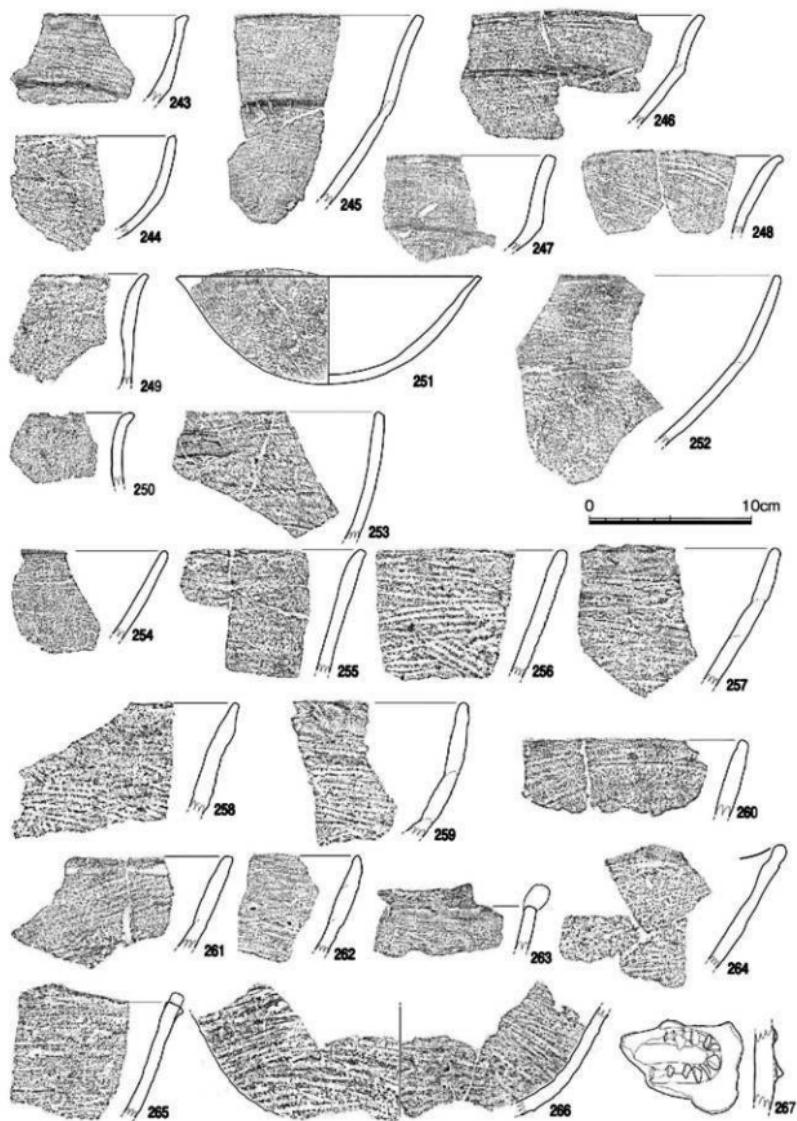
304は脚台付きの精製土器脚部で、外面には沈線1条を引く。

305~322は壺の資料である。丹塗りを施すものと施さないものがみられる。305~313は内傾する頸部から口縁部が外反するものである。314~317は内傾する頸部から口縁部は外反して、口唇部を丸く肥厚させるものである。314は復元口径17.4cmを測る。肩部から頸部へは強い屈曲をみせ、しっかりと肩の張る資料であると思われる。315は復元口径15.2cmである。318の口縁部は大きく外へ外傾する。復元口径は18.9cmである。

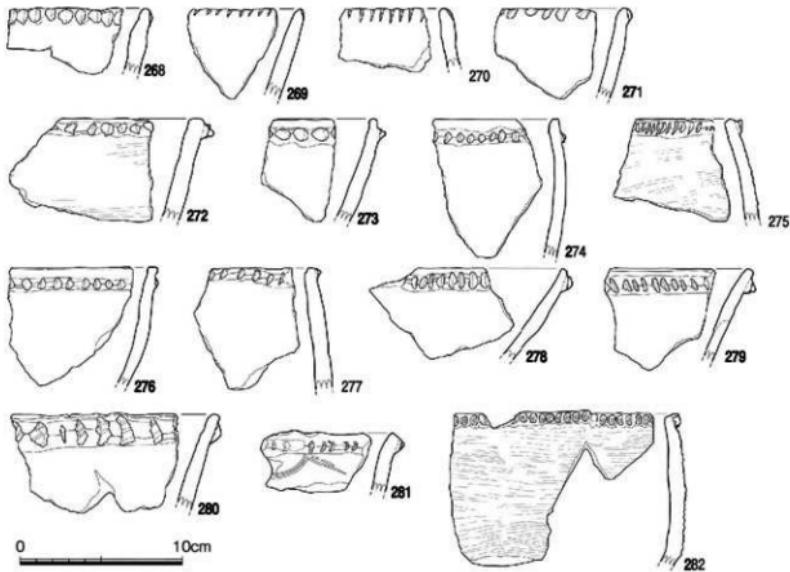
319・320は肩部と頸部の外面境界に段を作る。321は胴部上半から頸部下位にかけてのものである。肩部と頸部との境界は不明瞭である。復元胴部最大径は26.2cmである。外面には4条の沈線文と二枚貝殻腹縁による円弧文を入れる。さらにその上方にも1条の沈線が認められる。322は上げ底の資料である。

323・324は高坏形土器の資料である。323は指先によるものと思われる刻目を施す。324は断面三角の突帯を巡らすが、刻目は入れない。

325は復元直径5.8cmを測る土製の紡錘車である。沈線などはみられず、無文である。



第35図 繩文時代後期～弥生時代前期の土器実測図⑦ (S = 1 / 3)



第36図 繩文時代後期～弥生時代前期の土器実測図⑥ (S = 1 / 3)

### (3) 弥生時代中期以降の土器・陶磁器

326～332は弥生時代中期の壺口縁部である。326～329は断面三角の突帯状をなす中期前葉のものである。330～332は鋸先状をなしており、中期中葉のものである。334～336は断面「く」字状をなす弥生時代後期の壺口縁部である。337～339は古墳時代初頭の壺口縁部である。341～343は土師器の壺口縁部である。341は復元口径18.0cmを測る。

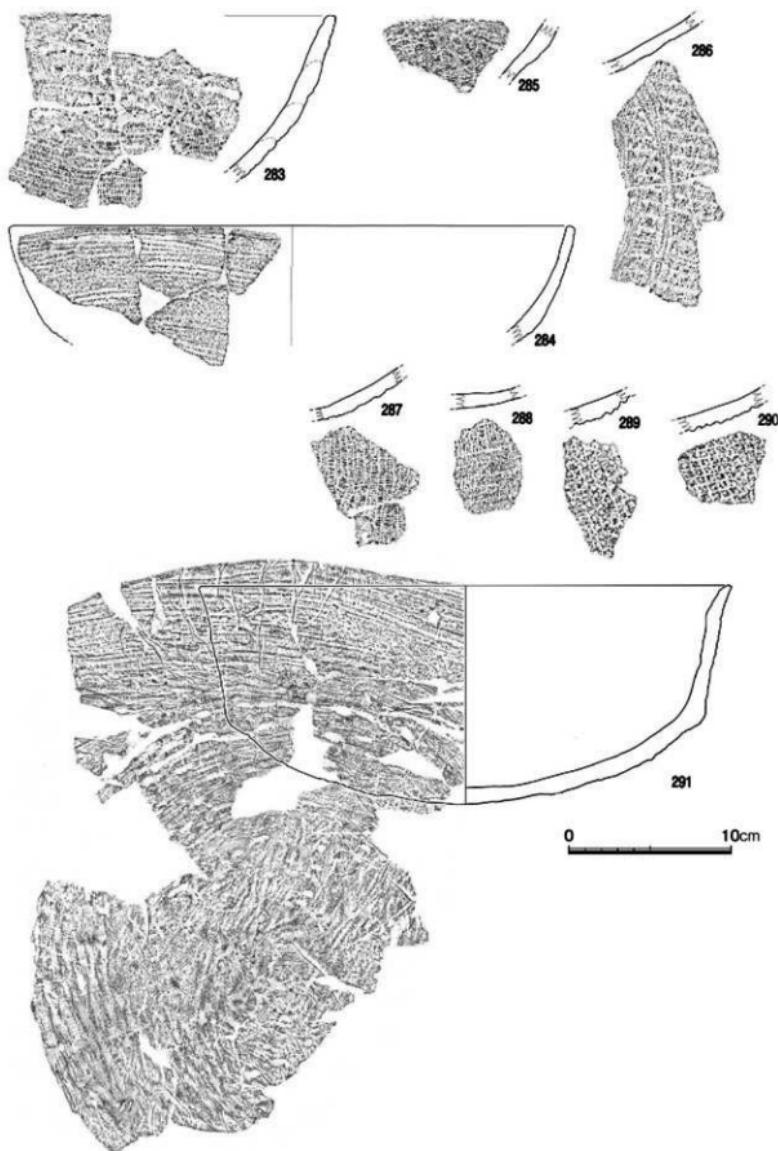
344～351は弥生時代中期の壺の資料である。344～346は胴部の資料で、3条の断面三角の突帯をもつ。347・348は広口壺の口縁部である。348は口唇部を肥厚させる。349は復元口径9.5cmの袋状口縁、350は復元口径18.0cmの複合口縁である。351は長頸壺で、肩部との境界に沈線文をもつ。

352～356は弥生土器の壺もしくは壺の底部である。352・353は台付壺の脚部である。底径はそれぞれ8.8cm、8.6cmを測る。354はやや丸みを帯びた平底で、復元底径は11.2cmである。355・356は狭小な平底である。355は底径5.8cm、356は復元底径4.6cmである。

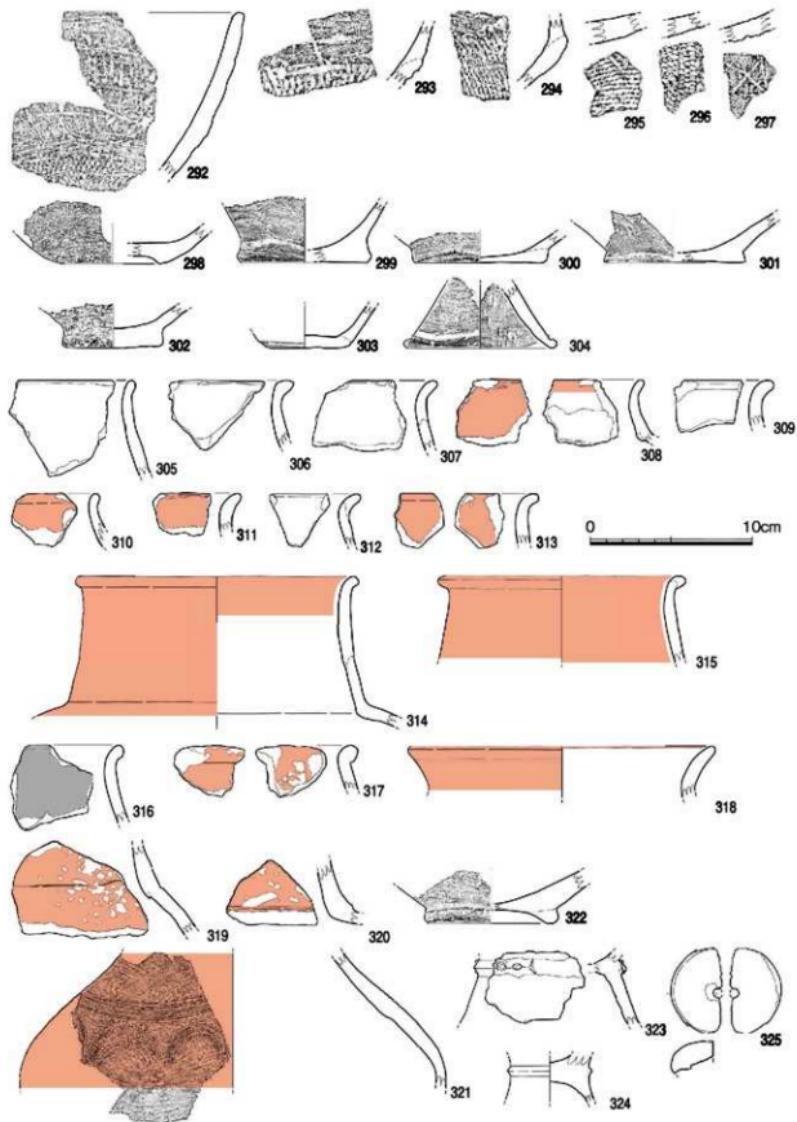
357はいわゆる「肥前型器台」で、沈線文と方形の透かしをもつ。

358・359は高坏の脚部である。358は裾部に暗文を施しており、復元底径は19.0cmである。

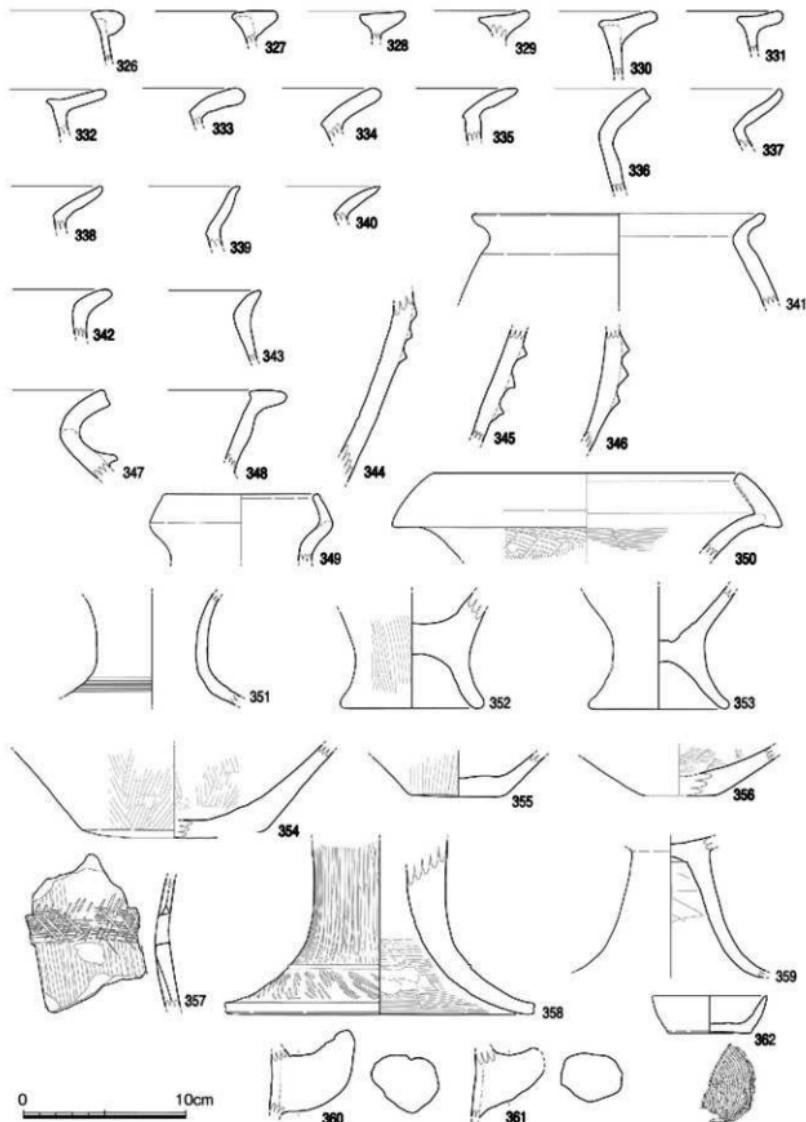
360・361は土師器瓶の把手部分である。362は回転糸切りの痕跡を底面にもつ土師皿である。復元口径7.0cm、復元底径5.0cm、器高2.3cmである。



第37図 繩文時代後期～弥生時代前期の土器実測図⑨ (S = 1 / 3)



第38図 溝文時代後期～弥生時代前期の土器実測図⑩ (S = 1 / 3)

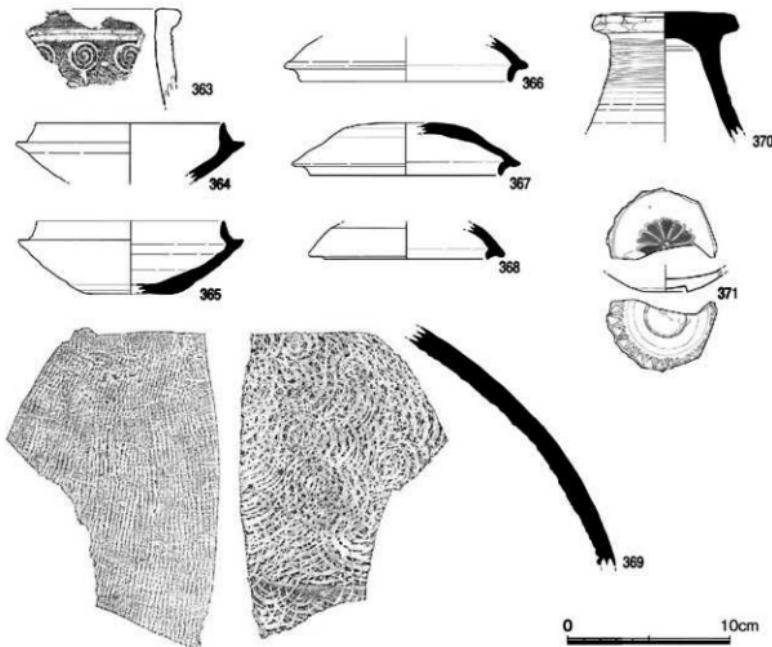


第39図 弥生時代中期以降の土器・陶磁器実測図① (S = 1 / 3)

363は瓦質の火鉢口縁部である。口縁部は肥厚させ、口縁部下には渦巻きのスタンプ文を施す。

364～370は須恵器である。364・365は壺身である。364は復元口径11.4cm、復元最大径13.8cmを測る。365は復元口径11.5cm、復元最大径13.8cm、器高4.4cmである。366～368は壺蓋である。366は復元口径12.8cm、復元最大径15.0cmを測る。367は復元口径11.6cm、復元最大径14.0cm、器高3.2cmを測る。368は復元口径10.0cm、復元最大径12.0cmである。369は大型壺の肩部である。外面にタキ目、内面に同心円状の当て具痕がみられる。370は高壺の壺部を成形後に削り落としたものを焼成している。

371は基筒底の青花皿加工品で、周縁を連続的に打ち欠いている。外面には芭蕉葉文、内面見込には花文が描かれる。



第40図 弥生時代中期以降の土器・陶磁器実測図② (S = 1 / 3)

第1表 出土土器ほか観察表①

番号	器種	記述	層位	文様・調査		色調	胎土	備考
				外側	内側			
1	深鉢	トイ口-3層	3層	椎円押版文	ナデ	にぶい黄褐色 灰黃	にぶい黄褐色 灰黃	角閃石・長石・石英・白色粒子
2	深鉢	トイHPT6□		椎円押版文	ナデ	明赤褐色	明褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子・ 白色粒子
3	深鉢	トイ口26区		椎円押版文	ナデ	橙・にぶい黄褐色	橙	角閃石・長石・石英・白色粒子
4	深鉢	トイ126区		椎円押版文	ナデ	浅黄・暗灰黃	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英
5	深鉢	トイE-125区		椎円押版文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子
6	深鉢	トイH-3U層	3U層	椎円押版文	ナデ	にぶい黄褐色・灰 黃	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子
7	深鉢	トイH-3層	3層	椎円押版文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色・灰 黃	角閃石・長石・石英
8	深鉢	トイ126区		椎円押版文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子・ 白色粒子
9	深鉢	トイ126区		椎円押版文	ナデ	浅黄・黃褐色	改黃	角閃石・長石・石英
10	深鉢	トイ126区		椎円押版文	ナデ	にぶい黄褐色	改黃	角閃石・長石・石英・赤色粒子
11	深鉢	トイ126区		椎円押版文	ナデ	にぶい黄褐色	灰黃	角閃石・長石・石英・赤色粒子・ 白色粒子
24	深鉢	トイ126区		椎円押版文	ナデ	にぶい黄褐色・青 灰	浅黃・暗灰黃	角閃石・長石・石英・赤色粒子
13	深鉢	トイ126区		椎円押版文	ナデ	橙	橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子・ 白色粒子
14	深鉢	トイH-1層	1層	椎円押版文	ナデ	橙・にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子
15	深鉢	トイF		椎円押版文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子
16	深鉢	トイ126区		椎円押版文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子
17	深鉢	トイH-S3層	3層	椎円押版文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・長石・石英
18	深鉢	トイH-5-8		椎円押版文	ナデ	明黃褐色	明黃褐色	角閃石・長石・石英
19	深鉢	トイ126区		椎円押版文	ナデ	椎	椎	口唇部に椎円押版文
20	深鉢	トイHPT10-18		椎円押版文	ナデ	にぶい橙	灰黃褐色	口唇部に椎円押版文
21	深鉢	トイE-23区		椎円押版文	ナデ	にぶい橙・にぶい 青	角閃石・長石・石英・赤色粒子	表面に青化物付着
22	深鉢	トイHPT10		椎円押版文	ナデ	椎	椎	口唇部に椎円押版文
23	深鉢	トイH-E3層	3層	椎円押版文	ナデ	にぶい橙	改黃褐色・椎	角閃石・長石・石英・赤色粒子・ 白色粒子
24	深鉢	トイ135区		椎円押版文	ナデ	南円押亘文/ナ デ	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子・ 白色粒子
25	深鉢	トイ126区		椎円押版文	ナデ	椎	角閃石・長石・石英・赤色粒子	
26	深鉢	トイE-23層	3層	底全体赤痕・椎円 押版文ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	明褐色	角閃石・長石・石英
27	深鉢	トイH-E3層	3層	椎円押版文	ナデ	底全体赤痕・椎円 押版文ナデ	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・黑色粒子・ 白色粒子
28	深鉢	トイ126区		椎円押版文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子
29	深鉢	トイ口26区		椎円押版文	ナデ	底全体赤痕・椎円 押版文ナデ	椎	表面に灰化物付着
30	深鉢	トイF		椎円押版文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子
31	深鉢	トイE-23層	3層	椎円押版文	ナデ	底全体赤痕・椎円 押版文ナデ	にぶい橙	角閃石・長石・石英
32	深鉢	トイH-E3層	3層	椎円押版文/ナ デ	ナデ	椎・明褐色	灰黃	角閃石・長石・石英・赤色粒子
33	深鉢	トイ126区		椎円押版文	ナデ	にぶい黄褐色	灰黃	底面調査ナデ
34	深鉢	トイ126区		椎円押版文	-	椎	にぶい黄褐色・灰 褐色	底面調査ナデ・工 具痕
35	深鉢	トイH-E3U層	3U層	椎円押版文	ナデ	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	底面調査ナデ
36	深鉢	トイ126区		山形押版文	ナデ	椎	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子・ 白色粒子
37	深鉢	トイ口26区		山形押版文	ナデ・ナデ・■ 通	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子・ 白色粒子
38	深鉢	トイ126区		山形押版文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子・ 白色粒子
39	深鉢	トイ135区		山形押版文	ナデ	浅黃	改黃	角閃石・長石・石英
40	深鉢	トイH-3層	3層	山形押版文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英
41	深鉢	トイE-23層	3層	山形押版文	ナデ	にぶい黄褐色・黃 褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子
42	深鉢	トイH-E3層	3層	山形押版文	ナデ	椎	椎	角閃石・長石・石英・白色粒子
43	深鉢	トイ126区		山形押版文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	口唇部に山形押版文
44	深鉢	トイ135区		山形押版文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・白色粒子
45	深鉢	トイ126区		山形押版文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	口唇部に山形押版文
46	深鉢	トイ126区		山形押版文	ナデ	底全体赤痕・山形 押版文ナデ	底灰黃・黑 褐色	表面に灰化物付着
47	深鉢	トイ126区		山形押版文	ナデ	にぶい黄褐色・黑 褐色	底灰黃・黑 褐色	角閃石・長石・石英・白色粒子
48	深鉢	トイF		山形押版文	ナデ	底全体赤痕・山形 押版文	にぶい黄褐色・黄 褐色	口唇部に山形押版文
49	深鉢	トイF		山形押版文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英
50	深鉢	トイE-23層	3層	山形押版文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	底面調査・山形 押版文ナデ

第2表 出土土器ほか観察表②

番号	器種	記述	層位	文様・開窓		色調		出土	備考		
				外側		内側					
				外側	内側	外側	内側				
51	深鉢	トイH-N3層	3層	山形押模文	墨体朱赤、山形 押模文/ナデ	にぶい黄緑	橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
52	深鉢	トイH-NSL		山形押型文	墨体朱赤、山形 押模文/ナデ	にぶい褐	橙	角閃石・長石・石英・白色粒子			
53	深鉢	トイF		山形押型文	墨体朱赤、山形 押模文/ナデ	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
54	深鉢	トイH-3層	3層	山形押模文	墨体朱赤、山形 押模文/ナデ	にぶい黄緑	黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
55	深鉢	トイ125区		山形押型文	墨体朱赤、山形 押模文/ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英			
56	深鉢	トイB-31U層	3U層	山形押模文	墨体朱赤、山形 押模文/ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英			
57	深鉢	トイE-23層	3層	山形押型文	墨体朱赤、山形 押模文/ナデ	にぶい黄緑	浅黄	角閃石・長石・石英			
58	深鉢	トイE-3層	3層	山形押型文	山形押模文/ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
59	深鉢	トイH		山形押型文	山形押模文/ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・白色粒子			
60	深鉢	トイ-91区		山形押型文	山形押模文/ナデ	にぶい黄緑・暗 灰黄	にぶい黄緑・暗 灰黄	角閃石・長石・白色粒子			
61	深鉢	トイH-E3層	3層	山形押型文	山形押模文/ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
62	深鉢	トイH-E3層	3層	山形押型文	ナデ	浅黄	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子・ 白色粒子	底面調整ナデ		
63	深鉢	トイ135区		山形押型文	ナデ	にぶい褐	橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整ナデ		
64	深鉢	トイ-H-31層	3L層	山形押模文	ナデ・撒銅斑 明黄緑	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
65	深鉢	トイB-31層	3L層	山形押型文	ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英			
66	深鉢	トイ135区		山形押型文	ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	底面に黒墨斑痕			
67	深鉢	トイH-E3層	3層	山形押型文	-	にぶい褐	暗灰黄	角閃石・長石・石英・白色粒子	底面調整ナデ		
68	深鉢	トイH-E3層	3層	山形押型文	開溝の無不明	明黄緑	浅黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整ナデ		
69	深鉢	トイB-31層	3L層	格子目押模文	ナデ	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
70	深鉢	トイH-E3層	3層	格子目押模文	ナデ	にぶい褐	暗 灰黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	外間に炭化物付着		
71	深鉢	トイHP-□		格子目押模文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	角閃石・長石・石英			
72	深鉢	トイ125区		格子目押模文	ナデ	橙・黑褐	橙・にぶい褐	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
73	深鉢	トイB-31層	3L層	格子目押模文	ナデ	にぶい褐	橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子・ 白色粒子			
74	深鉢	トイ□□区		格子目押模文	ナデ	にぶい黄緑	明黄緑	角閃石・長石・石英・白色粒子			
75	深鉢	トイHPT□		格子目押模文	ナデ	明黄緑	明黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子	口唇部に格子目押 型文		
76	深鉢	トイH-N3層	3層	格子目押模文	ナデ	にぶい褐	褐	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
77	深鉢	トイH-E3層	3層	格子目押模文	ナデ	にぶい褐	褐	角閃石・長石・石英・赤色粒子・ 白色粒子			
78	深鉢	トイ126区		格子目押模文	ナデ	にぶい褐	褐	角閃石・長石・石英			
79	深鉢	トイE-3層	3層	格子目押模文	ナデ	にぶい褐	角閃石・暗 灰黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
80	深鉢	トイB-31U層	3U層	格子目押模文	ナデ	にぶい褐	暗 灰黄	角閃石・長石・石英・白色粒子			
81	深鉢	トイB-31層	3L層	格子目押模文	ナデ	にぶい褐	暗 灰黄	角閃石・長石・石英・白色粒子			
82	深鉢	トイ-135区		格子目押模文	ナデ	にぶい黄緑	灰黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
83	深鉢	トイB-31層	3L層	格子目押模文	ナデ・撒銅斑 暗 灰黄	暗 灰黄・浅黄	角閃石・暗 灰黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整ナデ		
84	深鉢	トイH-N3層	3層	格子目押模文	ナデ	にぶい黄緑	暗 灰黄	角閃石・長石・石英・白色粒子	底面調整ナデ		
85	深鉢	トイ135区		格子目押模文	ナデ	にぶい黄緑	暗 灰黄	角閃石・長石・石英・白色粒子	底面調整ナデ		
86	深鉢	トイ126区		格子目押模文	ナデ	にぶい褐	暗 灰黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整ナデ		
87	深鉢	トイH-N3層	3L層	格子目押模文	ナデ	にぶい褐	暗 灰黄	角閃石・長石・石英・白色粒子	底面調整ナデ		
88	深鉢	トイHPT295		格子目押模文	ナデ	にぶい褐	暗 灰黄	角閃石・長石・石英・白色粒子	底面調整ナデ		
89	深鉢	トイHPT355		格子目押模文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	角閃石・長石・石英・白色粒子	底面調整ナデ		
90	深鉢	トイHPT51		平行押模文	ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・白色粒子			
91	深鉢	トイ126区		平行押模文	ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・白色粒子			
92	深鉢	トイH		平行押模文	墨体朱赤/ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子	口唇部に刻印		
93	深鉢	トイB-31層	3L層	平行押模文	ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
94	深鉢	トイF		平行押模文	酒透・ナデ・ナ デ	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面に黒墨斑痕			
95	深鉢	トイF		格子目押模文	墨体朱赤、山形 押模文/ナデ	にぶい褐	角閃石・長石・石英・白色粒子				
96	深鉢	トイ-E3層	3層	山形押模文	墨体朱赤、山形 押模文/ナデ	にぶい黄緑	明黄緑・浅黄	角閃石・長石・石英・白色粒子			
97	深鉢	トイ135区		平行押模文・山 形押模文	ナデ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
98	深鉢	トイF		點付文・沈縫	點付文/ナデ	にぶい褐	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英	口唇部に刻印、點 付文		
99	深鉢	トイ126区		凹彫文/ナデ	研磨・ナデ	にぶい褐	にぶい褐	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
100	深鉢	トイF		貝殻条痕・擦透	ナデ・擦透・ナ デ	にぶい黄緑	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子			

第3表 出土土器ほか観察表③

番号	器種	記述	層位	文様・調査		色調		出土	備考		
				外側		内側					
				外側	内側	外側	内側				
101	深鉢	トイ H		貝紋条痕	貝紋条痕	橙・黒	灰黄褐色、にぶい	角閃石・長石・石英・赤色粒子	ヒレ状突起		
102	深鉢	トイ E-1層 D-E2層	1層・3U層	ナデ、擦過・ナ ダ、擦過	貝紋条痕・ナ ダ	にぶい程	に古い程、にぶ い黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
103	深鉢	トイ D-1層 D-E2b層	1層・2b層	擦過・ナデ	貝紋条痕・ナ ダ	に古い黄褐色・灰 色	灰黃	角閃石・長石・石英	外面に炭化物付着		
104	深鉢	トイ E-1層	1層	擦過	ナデ	にぶい赤褐色	弱褐色、にぶい黄 褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
105	深鉢	トイ D-1層	1層	貝紋条痕	貝紋条痕	に古い程	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
106	深鉢	トイ E-3層 トイ E-1層	1層・3層	貝紋条痕	ナデ	赤褐・黒	赤褐・黒	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
107	深鉢	トイ D-3層	3層	貝紋条痕	ナデ	灰黄褐色・褐灰	灰黄褐色、褐灰	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
108	鉢	トイ E-126区	研磨	沈殿/研磨	に古い黄褐色	灰黃	淡黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
109	鉢	トイ E-W3層	3層	研磨	研磨	程	程	角閃石・長石・石英			
110	鉢	トイ E-126区	沈殿/研磨	研磨	に古い程	に古い黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	淡状口縁			
111	鉢	トイ E-W3層	3層	沈殿/研磨	研磨	に古い黄褐色	に古い黄褐色	角閃石・長石・石英	淡状口縁		
112	鉢	トイ E-W1U層	3U層	唐州織文・沈殿 /研磨	研磨	に古い黄褐色	に古い程	角閃石・長石・石英・董母・赤色 粒子			
113	鉢	トイ E-126区	沈殿/研磨	研磨	に古い黄褐色・灰 色	灰黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
114	鉢	トイ E-126区	沈殿/研磨	研磨	程	程	程	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
115	深鉢	トイ E-3層	3層	研磨	研磨・ナ ダ、研磨	に古い黄褐色	に古い黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
116	深鉢	トイ E-C3層	3層	研磨	研磨	明赤褐色	に古い黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
117	深鉢	トイ F	研磨	研磨	に古い程	に古い程	に古い程	角閃石・長石・石英			
118	深鉢	トイ E-B3層	3層	研磨	研磨	に古い程	灰黄褐色・褐灰	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
119	深鉢	トイ D-C3層 トイ D-1層	3層	ナデ・擦過 ナデ、研磨	に古い黄褐色・褐 灰	暗赤褐色・に古 い黄褐色	角閃石・長石・石英	角閃石・長石・石英			
120	深鉢	トイ F	擦過	に古い黄褐色・程	に古い黄褐色・程	暗赤褐色・に古 い黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
121	深鉢	トイ G-P-6	貝紋条痕	貝紋条痕・ナ ダ、自然条痕	貝紋条痕・ナ ダ	に古い黄褐色・褐 灰	灰黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
122	深鉢	トイ G-1層	1層	貝紋条痕	貝紋条痕・ナ ダ	に古い程	に古い黄褐色・灰 色	角閃石・長石・石英			
123	深鉢	トイ E-S2層	2b層	貝紋条痕・ナ ダ	ナデ	に古い程・褐灰	に古い黄褐色・灰 色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
124	深鉢	トイ E-105区	ナデ	ナデ	に古い黄褐色	に古い黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
125	深鉢	トイ A-3層	3層	沈殿/研磨	研磨	に古い程	に古い程・褐灰	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
126	鉢	トイ E-126区	沈殿/研磨	研磨	に古い程・褐灰	に古い程・褐灰	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
127	鉢	トイ D-B3層	3層	沈殿/研磨	研磨	に古い黄褐色・褐 灰	角閃石・長石・石英・赤色粒子	淡状口縁			
128	鉢	トイ C-1層	1層	沈殿/研磨	ナデ	に古い程	に古い程	角閃石・長石・石英			
129	深鉢	トイ F	沈殿/研磨	研磨	に古い程	に古い赤褐色	角閃石・長石・石英				
130	深鉢	トイ F	沈殿/研磨	研磨・ナ ダ	黒褐	に古い赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
131	深鉢	トイ E-C3層	3層	沈殿/ナ ダ	程	に古い黄褐色	程	角閃石・長石・石英			
132	深鉢	トイ D-C3層	3層	沈殿/研磨	研磨	程	程	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
133	深鉢	トイ F	沈殿/ナ ダ	ナデ・貝紋 条痕・ナ ダ	に古い程	に古い黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
134	深鉢	トイ F	沈殿/ナ ダ、研磨	ナ ダ	に古い程	に古い赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
135	深鉢	トイ A-3L層	3L層	沈殿/研磨	研磨	明赤褐色	に古い程	角閃石・長石・石英			
136											
137	深鉢	トイ A-3層	3層	擦過	ナ ダ、擦過	程・に古い黄褐色	に古い黄褐色・程	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
138	深鉢	トイ A-3層	3層	ナ ダ	研磨	に古い程	灰黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
139	深鉢	トイ A-W3層	3層	擦過	ナ ダ、工具痕 擦過・ナ ダ	程	に古い黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
140	深鉢	トイ A-3L層	3L層	擦過・ナ ダ	研磨	程	に古い黄褐色	角閃石・長石・石英・董母・赤色 粒子	器壁に開闊多数		
141	深鉢	トイ A-3層	3層	擦過・ナ ダ	研磨	に古い程	に古い程	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
142	深鉢	トイ A-W3層	3層	ナ ダ、研磨	研磨	に古い程	に古い程	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
143	深鉢	トイ D-C3層	3層	沈殿/ナ ダ	ナ ダ	に古い程・灰 色	程	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
144	深鉢	トイ E-126区	研磨・貝紋 条痕・ナ ダ	ナ ダ	に古い程	に古い黄褐色	角閃石・長石・赤色粒子				
145	深鉢	H-A-T-1L層	3層・3L層	擦過、斜面切 削痕、貝紋条 痕・ナ ダ	貝紋条痕・ナ ダ、程	に古い黄褐色	程	角閃石・長石・石英・赤色粒子	口唇部に凹点・點 付		
146	深鉢	トイ E-105区	ナ ダ	に古い赤褐色	程	に古い赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
147	深鉢	トイ E-1層	1層	沈殿/ナ ダ	ナ ダ	に古い黄褐色	に古い程	角閃石・長石・石英・赤色粒子	焼成後穿孔		
148	深鉢	トイ E-C2層	2b層	擦過・ナ ダ	後研磨	に古い黄褐色	角閃石・長石・石英		外面に炭化物付着		
149	深鉢	トイ E-W3層	3U層	擦過・ナ ダ	擦過・ナ ダ	に古い黄褐色	後研磨	角閃石・長石・石英			
150	深鉢	トイ F	研磨	ナ ダ	に古い黄褐色	に古い黄褐色	長石・石英				

第4表 出土土器ほか観察表④

番号	器種	記述	層位	文様・画様		色調		出土	備考		
				外側		内側					
				外側	内側	外側	内側				
31	漆鉢	トイ D-E3層	3層	貝紋条痕・ナデ	貝紋条痕・ナデ	浅黄	浅黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	漆鉢	トイ A-B3層	3層	貝紋条痕・ナデ	貝紋条痕・ナデ	にぶい程	程	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	漆鉢	トイ D-□3層	3層	研磨	研磨	にぶい黄	にぶい黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	漆鉢	トイ D-E3層	3層	貼付文/貝紋条痕	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	角閃石・長石	貼付文		
	漆鉢	トイ A-B3層	3層	貝紋条痕・貝紋条痕・ナデ	貝紋条痕・ナデ	にぶい程	程	角閃石・長石・石英	貼付文		
156	甕	トイ 71区		割目安帶/貝紋条痕・ナデ	ナデ	程	程	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
157	甕	トイ D-E3層	3層	割目安帶/貝紋条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄	オリーブ系	角閃石・長石・石英			
158	甕	トイ E3層	3層	貝紋条痕・通過	ナデ	黄褐	にぶい黄	角閃石・長石・石英			
159	甕	トイ 105区		割目安帶/ナデ	研磨	黄褐	にぶい黄	角閃石・長石・石英			
160	甕	トイ 105区		割目安帶/ナデ	ナデ	明黄	程	角閃石・長石・石英			
161	甕	トイ 105区		割目安帶/ナデ	ナデ	にぶい程	にぶい程	角閃石・長石・石英			
162	甕	トイ 105区		割目安帶/ナデ	ナデ	黑褐	灰褐	角閃石・長石・石英	外面に炭化物付着		
163	甕	トイ 71区		割目/貝紋条痕・ナデ	ナデ	透酒	明黄褐	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
164	甕	トイ □-□	3層?	割目・割目安帶/通過	ナデ	にぶい黄	馬糞	角閃石・長石・石英			
165	甕	トイ 105区		割目/ナデ	ナデ	程	程	角閃石・長石・石英			
166	甕	トイ 61区		割目安帶/通過	ナデ	にぶい黄	明黄褐	角閃石・長石・石英			
167	甕	トイ 105区		割目安帶/ナデ・通過	ナデ	透酒	にぶい黄	馬糞			
168	甕	トイ 105区		割目安帶/ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄	角閃石・長石・石英	外面に炭化物付着		
169	甕	トイ 105区		割目安帶/ナデ・通過	ナデ	烟灰	灰黄褐	角閃石・長石・石英			
170	甕	トイ 105区		割目安帶/ナデ	ナデ	程	程	角閃石・長石・石英	外面に炭化物付着		
171	甕	トイ 71区		割目安帶/ナデ	ナデ	明黄褐	にぶい黄	角閃石・長石・石英			
172	甕	トイ 71区		割目安帶/貝紋条痕・ナデ	透酒	暗褐	程	角閃石・長石・石英			
173	甕	トイ C-3層	3層	割目安帶/通過	ナデ・貝紋条痕・通過	にぶい黄	にぶい黄	角閃石・長石・石英			
174	甕	トイ C-3層	3層	割目安帶/通過	ナデ・透酒・にぶい程	程	角閃石・長石・石英				
175	甕	トイ D-E3層	3層	割目安帶/貝紋条痕	ナデ	黄褐	黄褐	角閃石・長石・石英・墨母			
176	甕	トイ E-1層	1層	貝紋条痕	ナデ・貝紋条痕	程	黑褐	角閃石・長石・石英・墨母	外面に炭化物付着		
177	甕	不明		貝紋条痕	透酒・ナデ	にぶい程	程	角閃石・長石・石英			
178	甕	トイ 61区		割目安帶/ナデ	ナデ	程	程	角閃石・長石・石英			
179	甕	トイ 105区		割目安帶/ナデ	ナデ	にぶい程	にぶい黄	角閃石・長石・石英・墨母・赤色粒子			
180	甕	トイ C-3層	3層	割目安帶/通過	透酒・ナデ	にぶい黄	にぶい黄	角閃石・長石・石英			
181	甕	トイ 105区		割目安帶/ナデ	ナデ	にぶい黄	明黄褐	角閃石・長石・石英			
182	甕	トイ 105区		割目安帶/ナデ	ナデ	程	程	角閃石・長石・石英・墨母・赤色粒子			
183	甕	トイ 105区		割目安帶/ナデ	ナデ	程	程	角閃石・長石・石英			
184	甕	トイ 105区		割目安帶/ナデ	ナデ	にぶい程	にぶい程	角閃石・長石・石英			
185	甕	トイ 105区		割目・割目安帶/ナデ	ナデ	にぶい黄	程	角閃石・長石・石英			
186	甕	トイ 71区		割目安帶/通過	ナデ・研磨	烟灰	程	角閃石・長石・石英			
187	甕	トイ 105区		割目安帶/ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	角閃石・長石・石英・墨母・赤色粒子			
188	甕	トイ 13□		割目安帶/ナデ	ナデ	にぶい黄	角閃石・長石・石英				
189	甕	トイ 61区		割目安帶/ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	角閃石・長石・石英	外面に炭化物付着		
190	漆鉢	トイ 61区		ナデ	ナデ	にぶい程	暗灰黄・明黄褐	角閃石・長石・石英			
191	漆鉢	トイ G-3L層	3L層	貝紋条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄	灰黄	角閃石・長石・石英・墨母・白色粒子	底面調整通過・ナデ		
192	漆鉢	トイ 126区		研磨・ナデ	ナデ	にぶい黄	灰黄・浅黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整研磨		
193	漆鉢	トイ E-N3層	3層	研磨	透酒・ナデ	程	にぶい黄	角閃石・長石・石英	底面調整通過		
194	漆鉢	トイ DPTB9		透酒・研磨	ナデ	にぶい黄	透黄	角閃石・長石・石英・墨母	底面調整・ナデ・底面調整研磨		
33	漆鉢	トイ 105区?		ナデ	ナデ	程・にぶい程	黄褐	角閃石・長石・石英・墨母	底面調整・ナデ		
195	漆鉢	トイ D-E3層	2b層・3層	貝紋条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄	透黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整・ナデ		
196	漆鉢	トイ □□区		通過	ナデ	にぶい程	にぶい黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整・ナデ		
197	漆鉢	不明		ナデ	ナデ	にぶい黄	程・灰黄褐	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整・ナデ・外面に炭化物付着		
198	漆鉢	トイ 71区		ナデ	ナデ	にぶい程	にぶい程	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整研磨		
199	漆鉢	トイ 105区		ナデ	ナデ	にぶい程・程	浅黄褐	角閃石・長石・石英	底面調整・ナデ		
200	漆鉢	トイ 105区		ナデ	ナデ	にぶい程・程	程	角閃石・長石・石英	底面調整・ナデ		

第5表 出土土器ほか観察表⑤

番号	器種	記述	層位	文様・開窓		色調		出土	備考		
				外側		内側					
				外側	内側	外側	内側				
33	深鉢	トイE-E3層	3層	ナデ・指添汪底 透酒・ナデ・ナ	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英	底面調整ナデ・压痕				
	深鉢	トイ□□区		貝殻条痕・ナデ	にぶい程	角閃石・長石・石英	底面調整ナデ				
	深鉢	トイE-1層 トイW-3層	1層・3層	貝殻条痕・ナデ ナデ	程	にぶい程	長石・石英・黒色粒子	底面調整ナデ			
	深鉢	トイF		貝殻・条痕・ナ デ	透酒・ナデ・ナ デ	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整ナデ・透 通・ナデ			
	深鉢	トイD-C3層	3層	ナデ	ナデ	にぶい黄緑	透青	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整ナデ・内面に灰化物付着		
	深鉢	不明		貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい程	透青	角閃石・長石・石英	底面調整透酒		
	深鉢	トイG-C5b層	2b層	ナデ	透通・ナデ	にぶい程	灰	角閃石・長石・石英	底面調整ナデ		
	深鉢	不明		ナデ	ナデ	にぶい黄緑	透青	角閃石・長石・石英	底面調整透酒		
	深鉢	トイG-1層	1層	ナデ	ナデ	にぶい程	透青	角閃石・長石・石英	底面調整透酒		
	改鉢	トイ125区		沈縫/研磨	研磨	にぶい黄緑・灰	長石・石英・墨母				
34	浅鉢	トイA-3層	3層	沈縫/研磨	研磨	にぶい黄緑・高 温	角閃石・長石・石英				
	浅鉢	トイF		沈縫/研磨	研磨	程	程	角閃石・長石・石英			
	浅鉢	トイD-W2b層	2b層	研磨	沈縫/研磨	明赤褐・赤黒	にぶい赤褐・黒	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	浅鉢	トイA-E3層	3層	研磨	研磨	にぶい黄緑・灰 黄緑	角閃石・長石・石英				
	浅鉢	トイGSK-C	一	研磨	ナデ	透黄	透黄	角閃石・長石・石英			
	浅鉢	トイE-E3層	3層	研磨	研磨	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子	ヒレ状突起			
	浅鉢	トイA-E3層	3層	沈縫/研磨	研磨	灰黄	透黄	角閃石・長石・石英・墨母			
	浅鉢	トイA-3L層	3L層	沈縫/研磨	研磨・ナデ	浅黄・黒褐	透黄・黒褐	角閃石・長石・石英	リボン状突起		
	浅鉢	トイA-E3層	3層	沈縫/研磨	研磨	浅黄・黒褐	透黄・黒褐	角閃石・長石・石英			
	浅鉢	トイA-3L層	3L層	研磨	研磨	にぶい黄緑	透黄	角閃石・長石・石英			
35	浅鉢	トイA-3層	3層	研磨	研磨・ナデ	にぶい黄緑	透黄	角閃石・長石・石英			
	浅鉢	トイD-E2b層	2b層	沈縫/研磨	ナデ	にぶい黄緑	長石・石英・黒色粒子	底面調整研磨			
	浅鉢	トイ125区		研磨	研磨	にぶい程・糊狀	角閃石・長石・石英・赤色粒子	糊状口縁			
	浅鉢	トイHPT-10		沈縫/研磨	研磨	糊狀・にぶい黄 緑	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子	糊状口縁		
	浅鉢	トイ106区		研磨	研磨	にぶい黄緑・灰 透黄	にぶい黄緑・糊 狀	角閃石・長石・石英・墨母	糊状口縁		
	浅鉢	トイ123区		糸目・糸目突起 ナデ	研磨	明赤褐	透青	角閃石・長石・石英			
	浅鉢	トイG-SU3層	3U層	研磨・ナデ	ナデ	灰透青・黒透 青	角閃石・長石・石英		外面に灰化物付着		
	改鉢	トイ105区		ナデ	ナデ	にぶい程	にぶい黄緑	角閃石・長石・赤色粒子			
	浅鉢	トイ105区		研磨	ナデ・研磨	にぶい程	にぶい黄緑	角閃石・長石・赤色粒子			
	浅鉢	トイ105区		研磨	ナデ・研磨	にぶい程	にぶい黄緑	角閃石・長石・赤色粒子			
36	浅鉢	トイD-E3層	3層	研磨	ナデ	にぶい黄緑	透黄	角閃石・長石・石英			
	浅鉢	トイC-E25層	2b層	ナデ	ナデ	にぶい程	にぶい黄緑	角閃石・長石・赤色粒子			
	浅鉢	トイ105区		研磨	ナデ	にぶい黄緑・黒透 青	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
	浅鉢	トイ105区		研磨	ナデ	にぶい程	にぶい黄緑	角閃石・長石・赤色粒子			
	浅鉢	トイ105区		研磨	ナデ	にぶい程	にぶい黄緑	角閃石・長石・赤色粒子			
	浅鉢	トイC-E25層	2b層	ナデ	ナデ	にぶい程	にぶい黄緑	角閃石・長石・赤色粒子			
	浅鉢	トイ105区		研磨	ナデ	にぶい黄緑	透黄	角閃石・長石・石英			
	浅鉢	トイ105区		研磨	ナデ	にぶい程	透黄	角閃石・長石・石英			
	浅鉢	トイ105区		研磨	ナデ	にぶい黄緑	透黄	角閃石・長石・石英			
	浅鉢	トイD-E3層	3層	ナデ	ナデ	にぶい黄緑	透黄	角閃石・長石・石英			
37	浅鉢	トイE-E3層	3層	沈縫/研磨	研磨	灰透青・黒	黒褐	角閃石・長石・赤色粒子			
	浅鉢	トイC-3層	3層	糸目・ナデ 透通	ナデ	にぶい黄緑・灰 透青	にぶい黄緑	角閃石・長石・赤色粒子	外面に灰化物付着		
	浅鉢	トイC-3層	3層	研磨	研磨	透黄・灰透 青	透黄・灰透 青	角閃石・長石・赤色粒子			
	浅鉢	トイ121区		研磨	研磨	透黄透	透黄透	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
	浅鉢	不明		研磨	研磨	にぶい黄緑	透黄透	角閃石・長石・石英			
	浅鉢	トイD-E3層	3層	研磨	研磨・ナデ	にぶい黄緑	透黄透	角閃石・長石・赤色粒子			
	浅鉢	トイD-E3層	3層	研磨	研磨	にぶい黄緑	透黄透	角閃石・長石・赤色粒子			
	浅鉢	トイ□□区		研磨	研磨	黒褐・にぶい青	にぶい青	角閃石・長石・赤色粒子			
	浅鉢	トイD		透酒・ナデ	透酒・ナデ	にぶい黄緑	角閃石・長石・石英・赤色粒子	外面に灰化物付着			
	浅鉢	トイE-1層 トイE-3層	1層・3層	研磨	研磨	灰透青	灰透青	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
38	浅鉢	トイD-W2b層	2b層・3層	研磨	研磨	糸目・にぶい青 透青	糸目・にぶい青 透青	角閃石・長石・石英			
	浅鉢	トイE-E3層	3層	研磨	研磨	灰透青・黒	灰透青・黒	角閃石・長石・石英			
	浅鉢	トイC-C3層	3層	ナデ	ナデ	にぶい黄緑・黒	透黄透	角閃石・長石・赤色粒子	内面に灰化物付着		
	浅鉢	トイC-C3層	3層	ナデ	ナデ	にぶい黄緑・黒	透黄透	角閃石・長石・石英			
	浅鉢	トイD-E3層	3層	研磨	研磨	にぶい黄緑	透黄透	角閃石・長石・赤色粒子			
	浅鉢	トイD-C3層	3層	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい程	透黄透	角閃石・長石・赤色粒子			
	改鉢	トイC-C3層	3層	ナデ	ナデ	にぶい黄緑	透黄透	角閃石・長石・石英			
	浅鉢	トイD-E3層	3層	研磨	研磨	透黄透	透黄透	角閃石・長石・赤色粒子			
	浅鉢	トイD-E3層	3層	研磨	研磨	にぶい黄緑	透黄透	角閃石・長石・赤色粒子			
	浅鉢	トイD-E3層	3層	研磨	研磨	にぶい黄緑	透黄透	角閃石・長石・赤色粒子			

第6表 出土土器ほか観察表⑥

番号	器種	記述	層位	文様・開窓		色調		出土	備考		
				外側		内側					
				外側	内側	外側	内側				
251	浅鉢	トイ GSX-B4	—	擦過・研磨	ナゲ	黄褐色	橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
252	浅鉢	トイ C-E1b	2b層・3層	研磨	研磨	明黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
253	浅鉢	トイ E-1層	1層・3層	ナゲ	ナゲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	外面に炭化物付着		
254	浅鉢	トイ D-G6E	—	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石・石英・赤色粒子			
255	浅鉢	トイ G-N3	3層・3U層	ナゲ	研磨・ナゲ	橙	橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
256	浅鉢	トイイ-C3層	3層	貝殻条痕	貝殻条痕・ナゲ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
257	浅鉢	トイ F	—	ナゲ・擦過	擦過・ナゲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	外面に炭化物付着		
258	浅鉢	トイ H-3層	3層	貝殻条痕・ナゲ・貝殻条痕・ナゲ	貝殻条痕・ナゲ	にぶい黄褐色	橙	角閃石・長石・石英	外面に炭化物付着		
259	浅鉢	トイ I-05X	—	ナゲ・貝殻条痕	ナゲ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	外面に炭化物付着		
260	浅鉢	トイ C-1層	3層	貝殻条痕・ナゲ	貝殻条痕・ナゲ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英			
262	浅鉢	トイ D-1層	1層・3層	擦過・ナゲ	ナゲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英			
262	浅鉢	トイ DPTC-B	—	貝殻条痕・ナゲ	ナゲ	灰黄褐色・黒褐	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
263	浅鉢	トイ J-05X	—	ナゲ・擦過	ナゲ・擦過	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	ヒレ状焼起		
264	浅鉢	トイ F	—	ナゲ・擦過	ナゲ	にぶい黄褐色・褐	灰黄褐色・褐	長石・石英・赤色粒子	白色粒子 渡状口縫		
265	浅鉢	トイ F	—	擦過	ナゲ・擦過	にぶい黄褐色・褐	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	白色粒子 渡状口縫		
266	浅鉢	トイ A-31層	3L層	貝殻条痕	貝殻条痕・ナゲ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	外面に炭化物付着		
267	浅鉢	トイ I-05X	—	點付文・ナゲ	ナゲ	にぶい黄褐色・灰	浅黄褐色・灰	角閃石・長石・石英	點付文		
268	浅鉢	トイ C-C2b層	2b層	研目・擦過	ナゲ・貝殻条痕	橙	橙	角閃石・長石・石英			
269	浅鉢	トイ 61区	研目・擦過	ナゲ・擦過	橙	橙	角閃石・長石・石英				
270	浅鉢	トイ I-05X	研目・ナゲ	ナゲ	浅黃	浅黃	角閃石・長石・石英				
271	浅鉢	トイ E-3層	3層	研目・擦過	ナゲ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・長石・石英			
272	浅鉢	トイ I-05X	研目・研磨	研磨	暗褐	暗褐	角閃石・長石・石英・赤色粒子	外面に炭化物付着			
273	浅鉢	トイ I-05X	研目・研磨	研磨	黑	黑	角閃石・長石・石英				
274	浅鉢	トイ I-05X	研目・研磨	ナゲ・ナゲ・研磨	暗褐	暗褐	角閃石・長石・石英				
275	浅鉢	トイ D-1層	1層	研目・研磨	擦過	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
276	浅鉢	トイ I-05X	研目・研磨	ナゲ	にぶい褐	にぶい褐	角閃石・長石・石英				
277	浅鉢	トイ I-11区	研目・研磨	ナゲ	にぶい褐	にぶい褐	角閃石・長石・石英				
278	浅鉢	トイ I-05X	研目・研磨	ナゲ・研磨	明褐	明褐	角閃石・長石・石英				
279	浅鉢	トイ I-05X	擦過・ナゲ	ナゲ	橙	橙	角閃石・長石・石英				
280	浅鉢	トイ C-E2b層	2b層	研目・研磨・擦過	貝殻条痕	暗褐	暗褐	角閃石・長石・石英			
281	浅鉢	トイ I-05X	研目・研磨・ナゲ	ナゲ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	鐵割あり			
282	浅鉢	トイ D-3層	3層	研目・研磨・ナゲ	ナゲ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・長石・石英・赤色粒子	外面に炭化物付着		
283	浅鉢	トイ D-1層	1層・3層	貝殻条痕・(アングン)・貝殻条痕・(アングン)・貝殻条痕・(アングン)	ナゲ・研磨	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・長石・白色粒子			
284	浅鉢	トイ D-2層	3層	貝殻条痕・(アングン)	ナゲ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・長石・石英			
285	浅鉢	トイ D-B3層	3層	研磨・擦過底・(アングン)	研磨	にぶい褐・明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
286	浅鉢	トイ D-B3層	2b層・3層	研磨底・(アングン)	研磨	にぶい褐・明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英			
287	浅鉢	トイ E-3層	3層	組織底・(アングン)	研磨	にぶい褐・黒褐	にぶい褐	角閃石・長石・石英	外面に炭化物付着		
288	浅鉢	トイ D-B3層	3層	組織底・(アングン)	ナゲ	にぶい褐	にぶい褐	角閃石・長石・石英			
289	浅鉢	トイ E-3層	3層	組織底(研目)	ナゲ	にぶい褐	にぶい褐	長石・石英・赤色粒子			
290	浅鉢	トイ E-W3U層	3U層	組織底(研目)	研磨	にぶい褐・灰	灰	角閃石・長石・石英			
291	浅鉢	トイ GSX-A	—	貝殻条痕・研磨	貝殻条痕・ナゲ	明褐	明褐	長石・石英			
292	トイ F	—	ナゲ・組織底(研目)	ナゲ	灰黄褐色	灰黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	外面に炭化物付着			
293	浅鉢	トイ C-E2b層	2b層・3層	ナゲ・組織底(研目)	ナゲ	にぶい褐・黒褐	にぶい褐・黒褐	角閃石・長石・石英			
294	浅鉢	トイ D-E3層	3層	組織底(研目)	ナゲ	にぶい褐・灰	にぶい褐・灰	角閃石・長石・石英			
295	浅鉢	トイ I-05X	組織底(研目)	研磨	にぶい褐	灰黄褐色	角黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
296	浅鉢	トイ GPT-28	—	組織底(研目)	ナゲ	にぶい褐	灰黄褐色	角閃石・長石・石英			
297	浅鉢	トイ GPT-22	—	組織底(研目)	ナゲ	にぶい褐	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子			
298	浅鉢	トイ C	研磨	研磨	にぶい褐	黒	角閃石・長石・石英	底面調査研磨			
299	浅鉢	トイ I-05X	研磨	研磨	黒	にぶい黄褐色・黒	角閃石・長石・石英	底面調査研磨			
300	浅鉢	トイ I-05X	ナゲ	研磨	にぶい褐	灰黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調査研磨			

第7表 出土土器ほか観察表⑦

番号	器種	記述	部位	文様・質地				出土	備考		
				内面		外側					
				外側	内面	外側	内面				
301	浅鉢	トイE-105区	研磨	研磨	陶灰・黒	オリーブ黒	長石・石英・赤色粒子	底面側面研磨			
302	浅鉢	トイE-W10U層 3U層	研磨	研磨	程	にぶい質地・灰	角閃石・長石・石英	底面側面研磨			
303	浅鉢	トイ61区	沈殿/研磨	ナデ	明赤褐色・陶灰	明赤褐色	長石・石英・赤色粒子	底面側面研磨			
304	土器	トイ105区	沈殿/研磨	ナデ・研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	長石・石英				
305	甕	トイ105区	研磨	研磨	にぶい質地・程	灰褐色	長石・石英				
306	甕	トイ105区	ナデ・研磨	研磨・ナデ	にぶい質地	にぶい程	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
307	甕	トイ105区	研磨	研磨・ナデ	程	にぶい赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
308	甕	トイ105区	ナデ	ナデ	程	にぶい程	角閃石・長石・赤色粒子				
309	甕	トイ106区	研磨	研磨	程	程	角閃石・長石				
310	甕	不明	研磨	不明	にぶい赤褐色	陶灰・にぶい程	角閃石・長石・石英				
311	甕	トイ125区	研磨	ナデ	程	にぶい程	角閃石・長石・石英				
312	甕	トイ105区	研磨	ナデ	浅黄褐色	浅黄褐色	角閃石・石英・赤色粒子				
313	甕	トイ71区	研磨	研磨	赤褐色	にぶい赤褐色	長石・石英				
314	甕	トイ71区	研磨	研磨・ナデ	明赤褐色	にぶい質地	長石・石英				
315	甕	トイ105区	研磨	研磨	にぶい質地	にぶい質地・明赤褐色	角閃石・長石・石英				
316	甕	トイ105区	研磨	研磨・ナデ	にぶい程	にぶい程	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
317	甕	トイ105区	研磨	研磨	赤褐色	赤褐色・にぶい赤褐色	角閃石・長石・石英				
318	甕	トイ105区	ナデ	ナデ	にぶい質地	にぶい質地・明赤褐色	角閃石・石英・赤色粒子				
319	甕	トイB-3L層 3L層	研磨	ナデ	にぶい質地・明赤褐色	にぶい質地・明赤褐色	長石・石英・赤色粒子				
320	甕	トイ105区	研磨	ナデ	にぶい程	にぶい程	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
321	甕	トイ105区	底面・剥皮矢文/柱形	研磨	程	にぶい程	長石・石英				
322	甕	トイ106区	研磨・ナデ	研磨	明赤褐色・程	にぶい質地・黒	角閃石・長石・石英	底面側面研磨			
323	高环	トイD-E3層 3層	斜面/突起/ナデ	通過	程	黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
324	高环	トイD-1層 1層	突起/ナデ	工具痕・ナデ	程	程・灰黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
325	粘土器	トイD-C3層 3層	研磨	-	にぶい質地	-	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
326	甕	トイ105区	ナデ・ハケメ・ ナデ	ナデ	にぶい質地・青瓦	にぶい質地	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
327	甕	トイE-E3層 3層	ナデ	ナデ	にぶい質地・に ぶい質	にぶい質・浅黄	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
328	甕	トイ105区	ナデ	ナデ	にぶい質地	にぶい質地	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
329	甕	トイ105区	ナデ	ナデ	にぶい質地・に ぶい質	にぶい質地	角閃石・長石・石英				
330	甕	トイH-E3層 3層	ナデ	ナデ	程	程	角閃石・長石・石英				
331	甕	トイH-E3層 3層	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
332	甕	トイ71区	ナデ	ナデ	にぶい質地・暗 灰	にぶい程	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
333	甕	トイC-W3層 CW2b層 2b層・3層	ナデ	ナデ・ハケメ	にぶい質地	程	角閃石・長石・石英				
334	甕	トイ105区	ナデ	ナデ	にぶい質	にぶい質・暗灰 質	角閃石・長石・石英				
335	甕	トイ105区	ナデ	ナデ	程	程	角閃石・長石・石英				
336	甕	トイ105区	ハケメ・ナデ・ ナデ	ハケメ・ナデ・ ナデ	程・にぶい程	程	長石・石英				
337	甕	トイ105区	ナデ・ハケメ・ ナデ	ハケメ・ナデ・ ナデ	にぶい質地	にぶい質地・灰	角閃石・長石・石英				
338	甕	トイ105区	ナデ	ナデ	陶灰質	にぶい質地	角閃石・長石・石英	外表面に炭化物付着			
339	甕	トイE-3層 3L層	ナデ	ハケメ・ナデ・ ナデ・ハケメ	にぶい質地	にぶい質地	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
340	甕	トイE-1層 1層	ナデ	ナデ	陶灰質	にぶい質地	角閃石・長石・石英				
341	甕	トイ71区	ナデ	ナデ	にぶい程	にぶい質地	角閃石・長石・石英	外表面に炭化物付着			
342	甕	トイE-1層 1層	ナデ・ハケメ	ナデ・ケズリ	にぶい程	にぶい程	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
343	甕	トイH	ナデ・ハケメ	ナデ・ケズリ	にぶい質地	にぶい質地	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
344	甕	トイ106区	陶灰/ナデ・ ナデ	ハケメ・ナデ	程	程・黒	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
345	甕	トイ105区	陶灰/ハケメ・ナ デ・ナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	程	にぶい質地	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
346	甕	トイ105区	陶灰/ハケメ・ ナデ・ナデ・ハケメ	ハケメ・ナデ	にぶい程	灰黃褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
347	甕	トイ71区	陶灰/ナデ・ ナデ	にぶい程	にぶい質・に ぶい質地	角閃石・長石・石英					
348	甕	トイ71区	ナデ	ナデ	にぶい質地	浅黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子				
349	甕	トイ126区	ナデ	ナデ	にぶい質地	にぶい質地	角閃石・長石・石英				
350	甕	トイ105区	ハケメ・ナデ・ ナデ・ハケメ	ナデ・ハケメ	にぶい質地・程	にぶい質地・程	角閃石・長石・石英・赤色粒子				

第8表 出土土器ほか觀察表⑧

番号	器種	記述	層位	文様・質理		色調		出土	備考		
				外側		内面					
				ナゲ・ナゲ・面 鏡仕様/ナゲ 鏡仕様	にぶい質理	程	明黄褐色				
351	甌	トイ D						角閃石・長石・石英・赤色粒子			
352	甌	トイ 71 区		ハケメ、ナゲ、ナゲ	にぶい質理	灰		角閃石・長石・石英・赤色粒子・ 白色粒子	底面調整ナゲ		
353	甌	トイ 71 区		ナゲ	ナゲ	程	明黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整ナゲ		
354	甌	トイ 61 区		ハケメ	ハケメ、ナゲ	明黄褐色	にぶい程	角閃石・長石・石英	底面調整ハケメ・ ナゲ		
355	甌	トイ 105 区		ハケメ、ナゲ	ナゲ・面鏡仕様	灰黃		角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整ハケメ・ ナゲ		
356	甌	トイ 105 区		ナゲ	ハケメ	にぶい質理	程	角閃石・長石・石英・赤色粒子	底面調整ナゲ		
357	器台	トイ 105 区		機械式鏡・斜行 鏡仕様/ハケメ	ハケメ、ナゲ	にぶい質理	程	角閃石・長石・石英・赤色粒子	邊かしあり		
358	窓坏	トイ 91 区		ハケメ、ミガキ、 ナゲ	ハケメ、 ナゲ	にぶい程	にぶい質理	角閃石・長石・石英・墨綠・赤色 粒子			
359	窓坏	トイ H		ナゲ	エジナゲ・ナゲ・ ナゲ・工具ナゲ	程	程	長石・石英・赤色粒子			
360	瓶	トイ D-1 等	1 層	ナゲ	ケズリ	淡黃		角閃石・長石・石英・赤色粒子	把手部分		
361	瓶	トイ 106 区		ナゲ	ケズリ・ナゲ	程		角閃石・長石・石英	把手部分		
362	皿	トイ E-1 等	1 层	回転ナゲ	回転ナゲ、ナゲ	程	程	角閃石・長石・石英・赤色粒子	回転赤切り		
363	火鉢	トイ D		印文(漢)/ナゲ	ナゲ	灰白		角閃石・長石・石英			
364	环身	トイ 105 区		回転ナゲ	回転ナゲ	灰白		長石			
365	环身	トイ 105 区		回転ナゲ・回転 ヘラタスリ	回転ナゲ、ナゲ	灰白		長石			
366	甌	トイ 105 区		回転ナゲ	回転ナゲ	灰白		長石・石英	外面に自然船		
40 367	甌	トイ HPT377		回転ヘラケズリ、 回転ナゲ	ナゲ、回転ナゲ	灰	灰	長石・石英			
368	甌	トイ 126 区		回転ヘラケズリ、 回転ナゲ	回転ナゲ	灰	灰	長石			
369	甌	トイ 61 区?		タタキ、ナゲ	同心円凸・具模	灰	灰	長石			
370	不明	トイ 105 区		ハラケズリ、回 転ナゲ、カキメ	回転ナゲ	灰・灰黃	灰黃・灰黃	石英			
371	皿	トイ 91 区		吉兆文・界線 花文、界線	ヌノウホワイト	-			基盤底、周縁を行 なぐく		

## 2 石器

1は角錐状石器である。黒曜石の厚手の剥片を素材とし、主要剥離面側から加工を行う。

2・3は黒曜石の石核である。どちらも3cm強のサイズで、小型の剥片を作出する。3は上下二方向に剥離作業を行っている。

4～7はスクレイパーで、いずれもサスカイト製である。4は片面に自然面を残し、左右側刃に加工を施す。5は台形状をなし、両面からの剥離加工を行う。6は比較的薄手の剥片を素材としており、周縁には細かい加工を施して刃部としているが、特に上刃側は使用によるものと思われる摩耗が著しい。7は素材剥片の打点付近を欠く。弧状をなす末端側には細かい剥離が両面にみられる。

8・9はサスカイトを素材とする横型の石匙である。8は両面から丁寧な剥離を行い、弧状の刃部を作る。9は左右を欠損するが、比較的小型のものである。

10～40は石鎚である。10～19は基部に深い抉りを入れ、脚部を作り出すものである。10は先端部を欠くが、残存長が4cmを超える。裏面には素材面を残す。11・12は透明度のない暗灰色黒曜石を素材としており、側刃は鋸歯状となる。12は脚部の開きが大きく、長さに対して幅が広い。14・15は先端部が細身である。17は灰色黒曜石を素材としている。19は側刃に鋸歯状の加工を行ったものと思われる。

20～30は浅く内湾するように基部加工を行ったものである。22は表面に自然面を、裏面には素材の主要剥離面を残す。厚手で減厚は達成できておらず、形状もいびつであることから、未成品の可能性もある。24は左右の側刃が鋸歯状をなし、先端付近で屈曲する。28は左右の側刃下半部にわずかに抉入する部分がみられ、矢柄への装着を意識した作りかもしれない。

33～40は平基のものである。33, 36は裏面に素材剥片の主要剥離面を大きく残す。39は厚手で、途中で製作をやめた未成品であろう。

41・42はサスカイト製の石錐である。41は幅6mmほどの錐部と円形の基部を作り出す。

43・44は黒曜石の剥片で、どちらも使用によるものと思われる微細な剥離が側刃に連続して認められる。

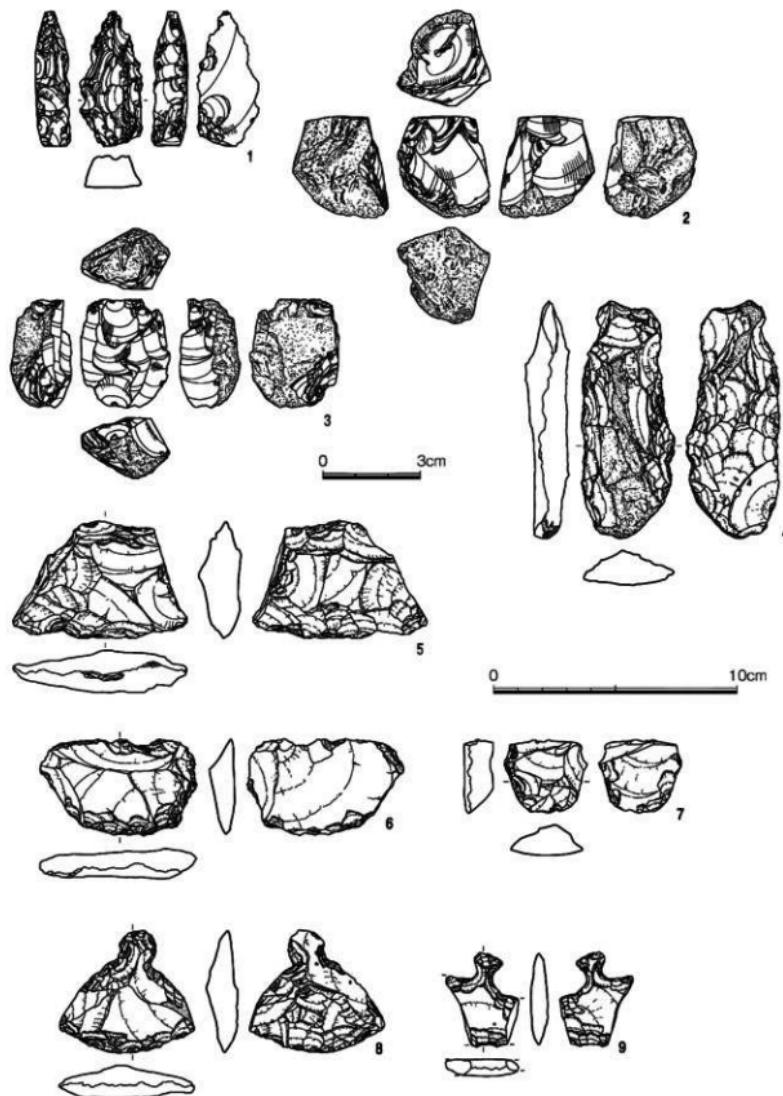
45は安山岩製の打製石斧である。比較的小型品で、全体に使用による摩耗がみられる。

46～49は磨製石斧である。46・47は安山岩製で、全体に研磨が施されている。46の刃部は弧状をなす。48は蛇紋岩を素材とする。基部の方が刃部より幅の狭い撥形の形状である。49は頁岩製で整形剥離のち研磨を行うが、研磨面が全体を覆うほどではない。刃部の再形成のための剥離がみられるが、その後の研ぎ出しには至っていない。

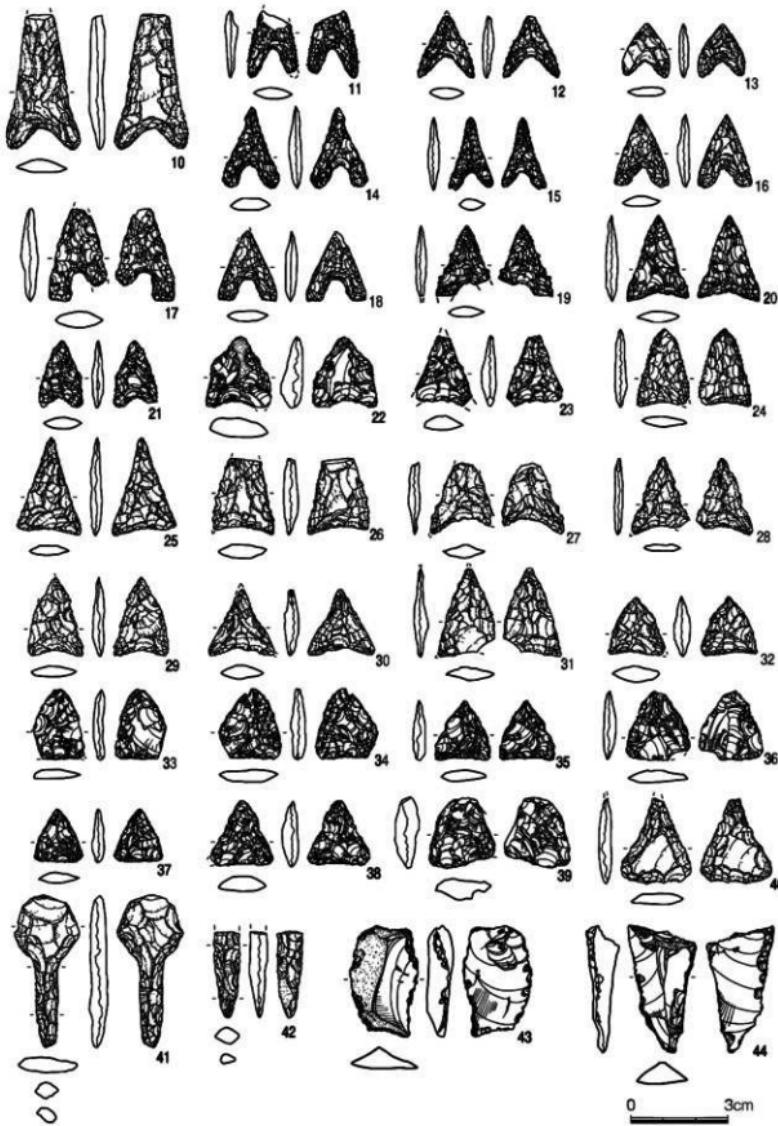
50・51は磨製石斧の未成品である。50は長さ27.3cmを測る大型品で、頁岩を素材とする。周縁からの整形剥離が行われているが、片面には大きく水磨を受けた自然面をとどめる。51は砂岩を素材とした乳棒状石斧の未成品で、整形剥離のち全体に敲打を施すが、研磨作業は行っていない。

52は水磨砂岩の上下端に抉入部をもつ石錐である。表裏両面には潰痕をもつことから、敲石としての使用も確認できる。

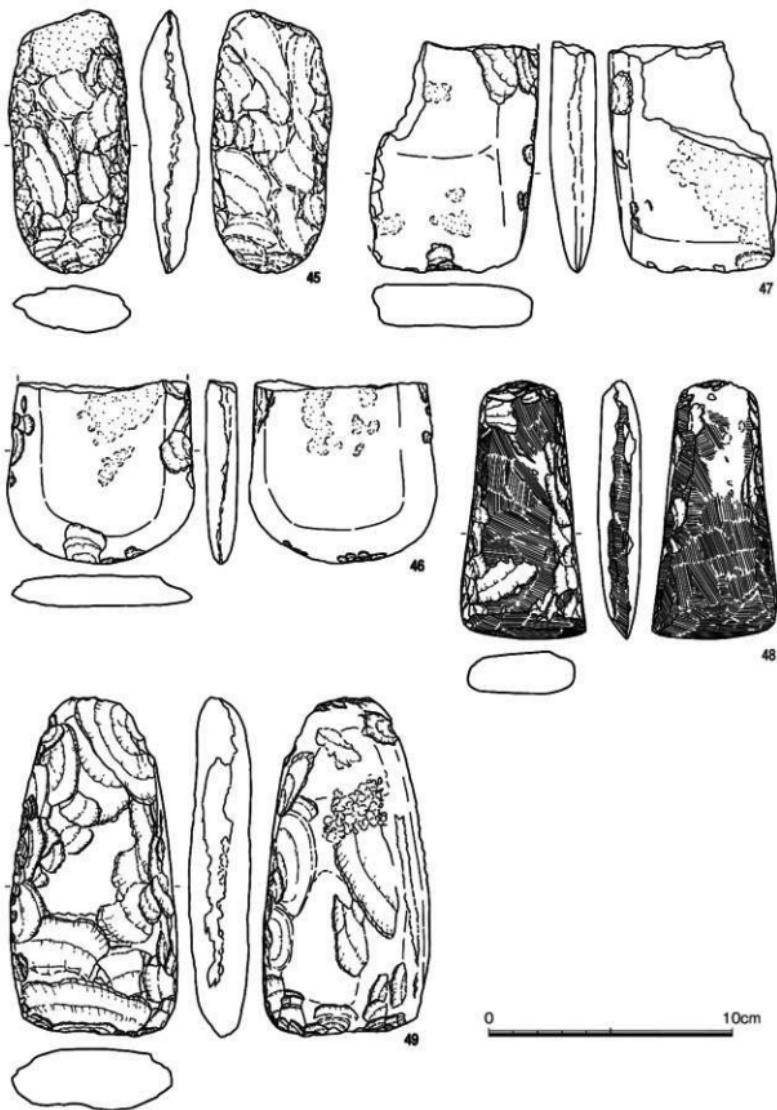
53は砂岩製の石皿・砥石である。表裏両面に凹部と研ぎ面をもち、最薄部は0.8cmである。片面には構造の研ぎ面も認められる。54～57はいずれも砂岩製の砥石である。54は4面が、55は表裏面、側面の3面が作業面である。56は板状を呈し、表裏面に研ぎ面をもつが、表面には凹部を形成する。57は扁平な水磨砾の表裏両面で作業を行っている。



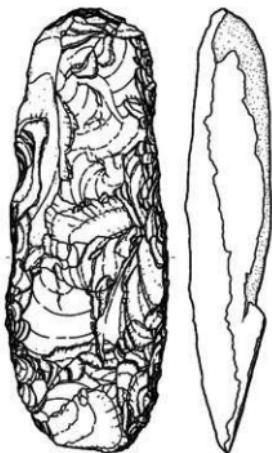
第41図 石器実測図① (1~3 : S = 2/3, 4~9 : S = 1/2)



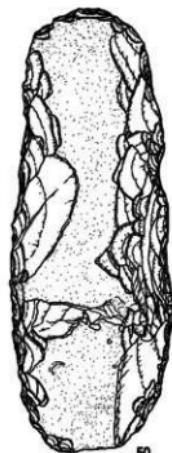
第42図 石器実測図② (S = 2 / 3)



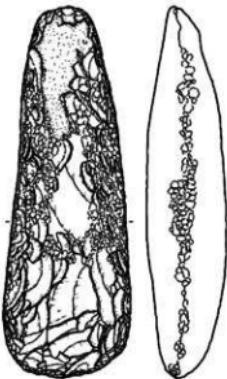
第43図 石器実測図③ (S = 1 / 2)



50



51

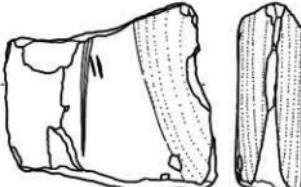


52



53

0 10cm

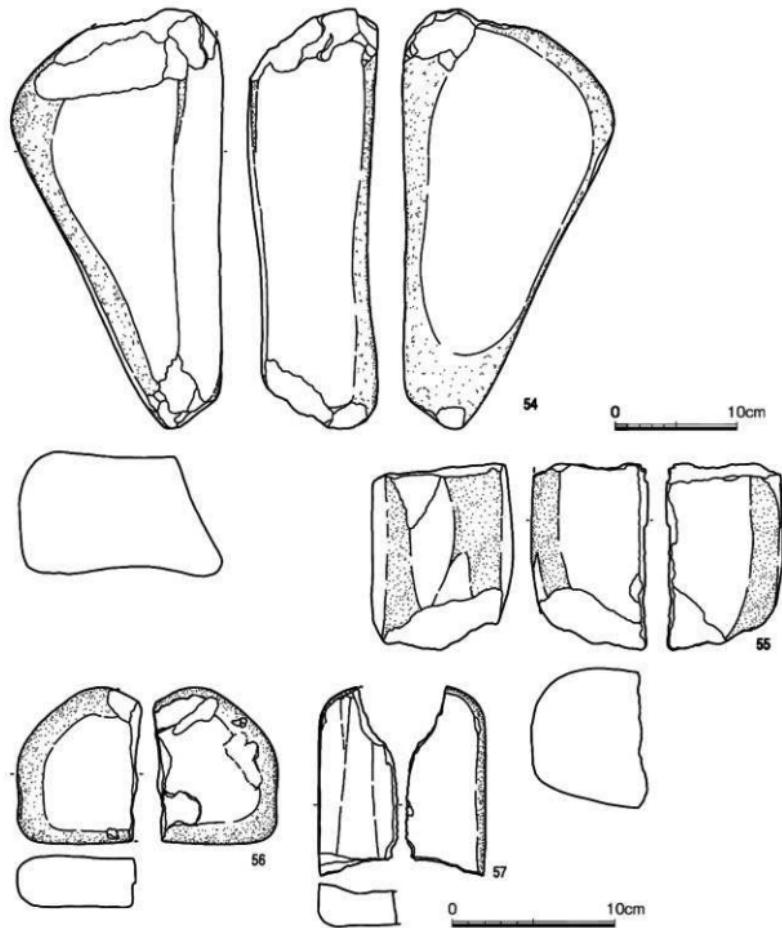


53



0 20cm

第44図 石器実測図④ (50~52 : S = 1/3, 53 : S = 1/4)

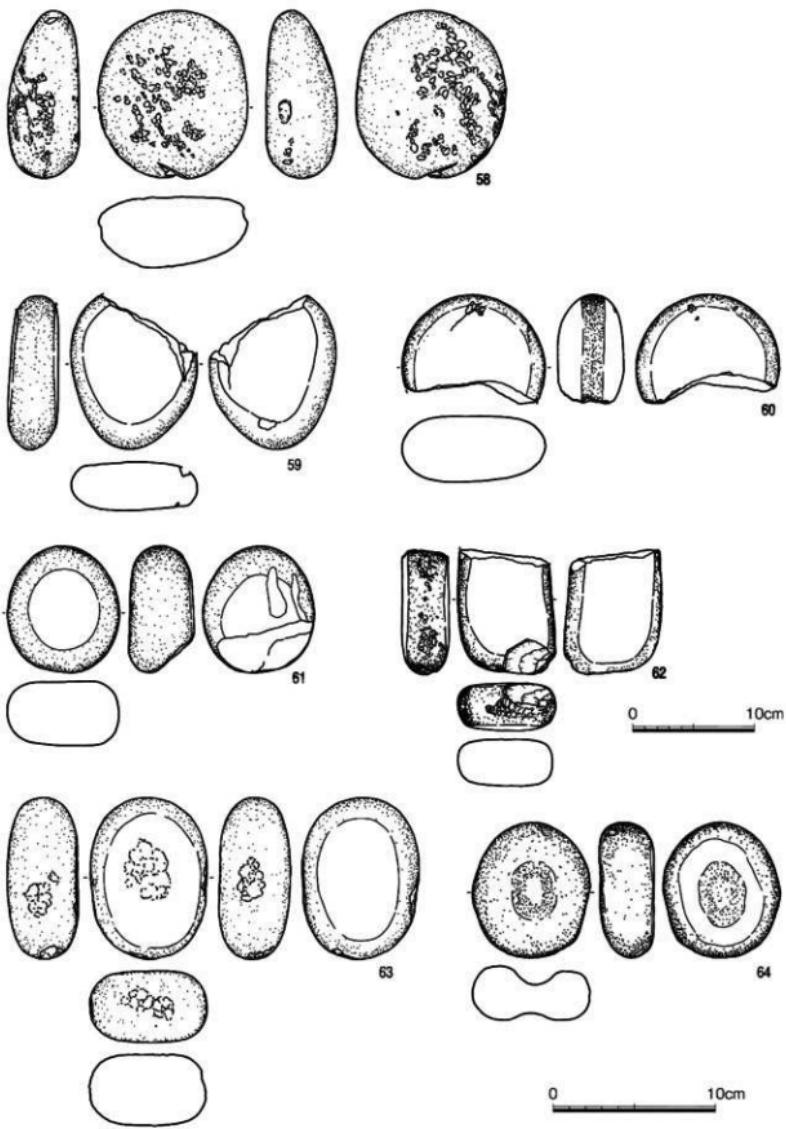


第45図 石器実測図⑤ (54・55: S = 1/4, 56・57: S = 1/3)

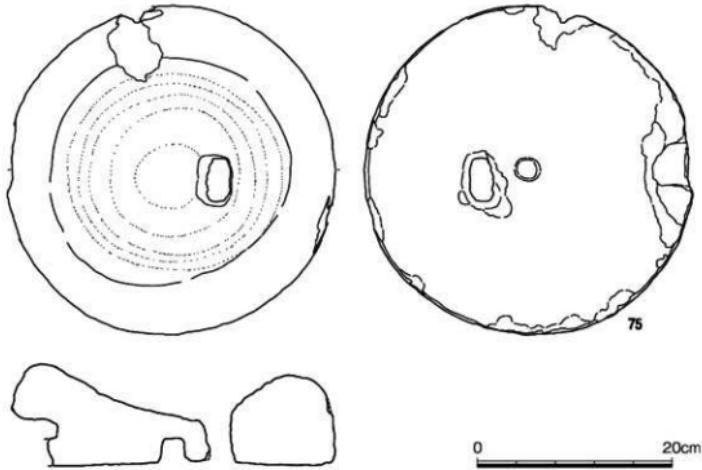
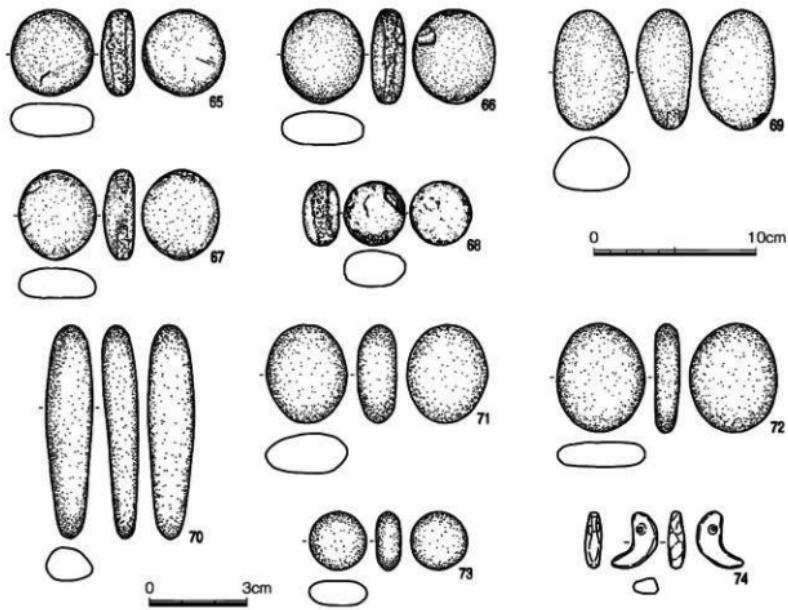
58~70は磨石・敲石類である。58は磨石から敲石への転用品で、表裏面及び側面に潰痕をもつ。59, 61は安山岩製、60は砂岩製の磨石である。62は水磨した砂岩を用いた敲石で、側面に打撃作業による潰痕と剥落が認められる。63は磨石・敲石の併用品である。64は安山岩を素材としており、表裏面に凹部をもつ。65~69は側面に潰痕が巡る。66~69は線条痕が観察され、打撃の対象物が鋭利、硬質なものであったことがうかがえる。70~73は小型の磨石で、土器製作の調整具などとしての使用が想定される。

74は蛇紋岩製の勾玉で、穿孔は両面から施されている。

75は石臼の上臼である。物入れの孔が貫通し、上面には凹部をもつ。側面には挽き手の差込口を、下面には軸受けの孔をもつ。



第46図 石器実測図⑥ (58~62 : S = 1/4, 63・64 : S = 1/3)



第47図 石器実測図⑦ (65~69: S = 1/3, 70~74: S = 2/3, 75: S = 1/5)

第9表 出土石器観察表①

図	番号	器種	石材	注記	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
41	1	角錐状石器	黒曜石	トイ C-E3層	3層	4.1	1.9	1.1	8.4	
	2	石核	黒曜石	トイ D-1層	1層	3.1	2.8	2.9	26.1	
	3	石核	黒曜石	トイ105区		3.3	2.7	1.9	16.6	
	4	スクレイパー	安山岩	トイ □-2b層	2b層	9.7	3.8	1.8	58.9	
	5	スクレイバー	サヌカイト	トイ105区		4.8	7.1	1.7	52.6	
	6	スクレイバー	サヌカイト	トイ105区		4.0	6.4	1.3	30.8	刃部摩耗
	7	スクレイバー	サヌカイト	トイ105区		3.0	3.4	1.2	13.8	
	8	石匙	サヌカイト	トイ D		5.0	5.5	1.4	26.6	
	9	石匙	サヌカイト	07といの1-6区 松尾413 9/21		3.9	(3.0)	0.7	(7.3)	
42	10	石鎌	サヌカイト	07といの1-6区 松尾413 9/20		(4.1)	2.2	0.5	(3.4)	
	11	石鎌	黒曜石(暗灰色)	トイ C-W2b層	2b層	(2.1)	1.6	0.4	(0.7)	銅鑄造
	12	石鎌	黒曜石(暗灰色)	07といの1-6区 松尾413 9/20	3層	(1.9)	1.7	0.3	(0.6)	銅鑄造
	13	石鎌	安山岩	トイ C-W3層	3層	(1.6)	1.5	0.3	(0.5)	
	14	石鎌	黒曜石(灰色)	トイ C-1層	1層	(2.5)	1.8	0.4	(0.9)	
	15	石鎌	黒曜石	トイ D-C3層	3層	2.2	1.3	0.3	0.5	
	16	石鎌	安山岩	トイ D-W3L層	3L層	(2.2)	1.6	0.4	(0.8)	
	17	石鎌	黒曜石(灰色)	トイ E-W3U層	3U層	(2.9)	(1.8)	0.5	(1.7)	
	18	石鎌	安山岩	トイ C-W3層	3層	(2.2)	1.8	0.4	(0.9)	
	19	石鎌	黒曜石	トイ D-W3層	3層	(2.2)	(1.6)	0.3	(0.7)	銅鑄造
	20	石鎌	黒曜石	07といの1-6区 松尾413 9/21		2.6	1.9	0.4	1.0	
	21	石鎌	黒曜石	トイ E-W3層	3層	(2.0)	(1.3)	(0.4)	(0.7)	
	22	石鎌	黒曜石	07といの1-6区 松尾413 9/20		(2.2)	2.0	0.7	(2.2)	
	23	石鎌	黒曜石	トイ C-1層	1層	(2.2)	(1.7)	0.5	(1.1)	
	24	石鎌	安山岩	トイ C-W3層	3層	(2.4)	(1.6)	0.4	(1.1)	
	25	石鎌	安山岩	トイ C-E2b層	2b層	3.0	1.9	0.4	1.2	
	26	石鎌	安山岩	トイ D-W3層	3層	(2.3)	1.9	0.5	(1.8)	
43	27	石鎌	安山岩	トイ E-W3層	3層	(2.2)	(1.9)	0.4	(1.0)	
	28	石鎌	安山岩	トイ D-C3層	3層	(2.3)	(1.7)	0.2	(0.6)	
	29	石鎌	安山岩	トイ D-E2b層	2b層	(2.4)	1.7	0.4	(1.2)	
	30	石鎌	安山岩	トイ D-3L層	3L層	(2.0)	(2.0)	0.4	(1.1)	
	31	石鎌	安山岩	トイ E-W3層	3層	2.7	1.7	0.4	1.2	
	32	石鎌	安山岩	トイ E-W3U層	3U層	1.8	1.7	0.5	1.1	
	33	石鎌	黒曜石	トイ E-W3U層	3U層	(2.1)	(1.5)	0.4	(1.0)	
	34	石鎌	黒曜石	トイ C-1層	1層	2.2	1.9	0.4	1.5	
	35	石鎌	黒曜石	トイ C-W2b層	2b層	1.8	1.7	0.4	0.9	
	36	石鎌	黒曜石	トイ C-W2b層	2b層	2.1	(1.9)	0.4	(1.3)	
	37	石鎌	黒曜石	トイ D-3L層	3L層	1.6	1.5	0.4	0.7	
	38	石鎌	黒曜石	トイ C-3層	3層	2.0	(1.9)	0.5	(1.4)	
	39	石鎌	黒曜石	トイ C-1層	1層	2.2	2.0	0.7	2.5	
44	40	石鎌	安山岩	07といの1-6区 松尾413 9/20		2.6	2.1	0.4	1.7	
	41	石鎌	サヌカイト	トイ C-3層	3層	(4.7)	2.1	0.6	(3.4)	
	42	石鎌	サヌカイト	トイ C-W2b層	2b層	2.6	0.8	0.6	1.2	
	43	微細剥離片	黒曜石	トイ105		3.4	2.1	0.8	3.9	
	44	微細剥離片	黒曜石	トイ105		3.9	2.1	1.0	4.4	
	45	打製石斧	安山岩	トイ126区		10.7	4.9	2.3	127.1	
	46	磨製石斧	安山岩	トイ D-E3層	3層	(7.5)	(7.7)	1.3	(125.4)	
47	47	磨製石斧	安山岩	トイ D-E3層	3層	(9.4)	(6.9)	1.9	(170.2)	
	48	磨製石斧	蛇紋岩	トイ D-C3層	3層	10.6	5.1	1.7	127.8	
	49	磨製石斧未成品	頁岩	トイ C-3層	3層	13.9	6.8	2.5	347.8	
	50	磨製石斧未成品	頁岩	トイ126区		27.3	10.0	5.3	1766.0	

第10表 出土石器観察表②

図	番号	器種	石材	注記	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
44	51	磨製石斧未成品	砂岩	トイ D-E 3層	3層	22.8	7.8	4.9	1161.5	
	52	石鏨	砂岩	トイ E-W 3層	3層	7.7	7.4	3.4	236.0	
	53	石皿	砂岩	07といのE-1-61区 板塊413 1-24支線		(15.5)	(17.5)	5.6	(2000.0)	
45	54	砥石	砂岩	07といい F432		(34.4)	17.3	10.7	(6800.0)	
	55	砥石	砂岩	07といい F432 07といい E-1-61区 板塊413 1-24支線		(15.3)	(9.6)	(11.6)	(2600.0)	
	56	砥石	砂岩	トイ C-1層	1層	(9.6)	(7.7)	(3.2)	(393.0)	
46	57	砥石	砂岩	トイノ26区		(11.6)	(4.9)	(2.6)	(221.0)	
	58	磨石・敲石	砂岩	トイ A-E 3層	3層	13.8	12.3	5.9	1128.0	
	59	磨石	安山岩	トイ A-3L層	3L層	(12.6)	(10.4)	(4.2)	(683.0)	
47	60	磨石	砂岩	トイ D-3層	3層	(9.0)	(11.8)	(5.5)	(785.5)	
	61	磨石	安山岩	トイノ26区		(10.4)	9.2	(5.3)	(729.5)	
	62	敲石	砂岩	トイ D-3層	3層	(10.3)	(8.0)	(3.9)	(544.5)	
48	63	磨石・敲石	砂岩	トイノ26区		9.9	7.2	4.4	489.5	
	64	磨石・敲石	安山岩	トイ E-E 3層	3層	8.3	7.3	3.4	247.5	
	65	磨石・敲石	砂岩	トイ		5.3	5.1	2.0	81.5	
49	66	敲石	砂岩	トイ E-W 3層	3層	5.8	5.0	2.1	87.6	
	67	磨石・敲石	砂岩	トイ D-C 3層	3層	5.5	4.7	1.9	71.1	
	68	磨石	砂岩	トイ A-E 3層	3層	4.0	3.8	2.2	40.5	
50	69	磨石・敲石	砂岩	トイ A-3層	3層	7.3	4.6	3.4	149.1	
	70	磨石	砂岩	トイ126区		6.5	1.4	1.1	13.2	
	71	磨石	砂岩	トイ C-3L層	3L層	3.0	2.5	1.2	12.4	
51	72	磨石	砂岩	トイ C		3.3	2.7	0.8	10.3	
	73	磨石	砂岩	トイ C-セ7		1.8	1.8	0.8	3.5	
	74	勾玉	蛇紋岩	07といのE区(奥～)明局 色土 6/11 番目2		1.7	1.4	0.5	1.1	両面から穿孔
52	75	石臼(上臼)	デイサイト	トイ EPT263		33.8	33.7	10.4	15550.0	

## 第Ⅲ章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

### 第1節 樹種同定

#### 1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

#### 2 試料

試料は、大苑地区通野遺跡の遺構内などから採取された炭化材53点である。試料の詳細を分析結果表に示す。

#### 3 方法

試料を剖析して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比により行った。

#### 4 結果

第11表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

##### アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 第48図-1

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～5個放射方向に複合してややまばらに散在する散孔材である。放射断面：道管の穿孔は單穿孔で道管の内壁には微細ならせん肥厚が存在する。放射組織は、ほとんどが平伏細胞であるが上下の縁辺部には方形細胞が現れる。接線断面：放射組織は、上下の縁辺部が方形細胞からなる異性放射組織型で1～3細胞幅である。

以上の形質よりアサダに同定される。アサダは、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、土木、船舶、車両などに用いられる。

##### クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第48図-2

横断面：年輪のはじめに大型の道管が数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmくらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、

薪炭、椎茸ほど木など広く用いられる。

コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 第48図-3・第49図-4

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が単独および放射方向に配列もしくはまばらに散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 第49図-5・第49図-6

横断面：中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ブナ科 *Fagaceae*

横断面：部分的にはあるが大型の道管と、火炎状に配列する小道管が見られる。放射断面：放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりブナ科の、クリ、シイ属、コナラ属コナラ節のいずれかである。試料が小片で広範囲の観察が困難なためブナ科の同定にとどめた。

エノキ属 *Celtis* ニレ科 第50図-7

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圈部外の小道管は多数複合して円形ないし斜線状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部に方形細胞が見られる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅の小型のものと、8～10細胞幅ぐらいで鞘細胞をもつ大型のものからなる。

以上の形質よりエノキ属に同定される。エノキ属にはエゾエノキ、エノキなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木で、高さ25m、径1.5mに達する。材は、建築、器具、薪炭などに用いられる。

クスノキ科 *Lauraceae* 第50図-8

横断面：中型から小型の道管が単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道

管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。放射断面：道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の形質よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は道管径以外の点が不明瞭なためクスノキ科の同定にとどめた。なお、道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

#### サクラ属 *Prunus* バラ科 第50図-9

横断面：小型で丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

#### 散孔材 diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が散在する。放射断面：道管が存在する。接線断面：多列幅の放射組織が存在する。

以上の形質より散孔材に同定される。試料が小片で広範囲の観察が困難なため散孔材の同定にとどめた。

#### 広葉樹 broad-leaved tree

横断面：観察することは困難である。放射断面：道管と放射組織が存在する。接線断面：多列幅の放射組織が存在する。

以上の形質より広葉樹に同定される。炭化による変形が著しく広範囲の観察が困難であることから、広葉樹の同定にとどめた。

#### 草本 grass

横断面：基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と師部かなりり、その周囲に維管束鞘が存在する。放射断面及び接線断面：柔細胞及び維管束、維管束鞘が軸方向に配列している。

以上の形質より草本に同定される。

### 5 所見

樹種同定の結果、コナラ属アカガシ亜属21点、コナラ属クヌギ節21点、クリ2点、クスノキ科2点、アサダ1点、ブナ科1点、エノキ属1点、サクラ属1点、散孔材1点、広葉樹1点、草本1点が同定

された。

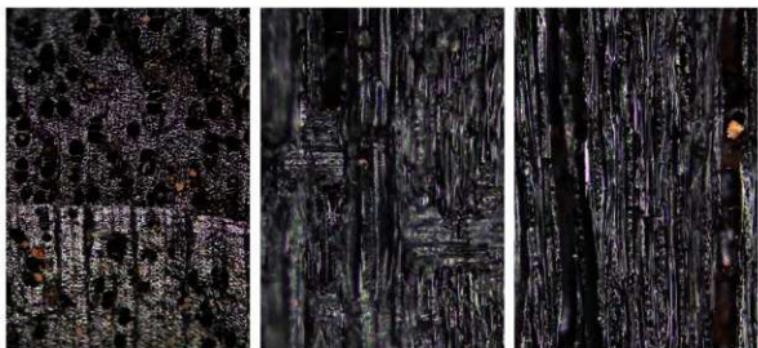
最も多い21点が同定されたコナラ属アカガシ亜属は、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素である。コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称されるが、イチイガシ、アラカシなど多くの種がある。イチイガシは自然度が高いが、アラカシは二次林性でもある。同じく21点が同定されたコナラ属クヌギ節には、クヌギとアベマキがある。温帯に広く分布する落葉広葉樹で、乾燥した台地や丘陵地に生育し二次林要素でもある。クリは温帯に広く分布する落葉広葉樹で、乾燥した台地や丘陵地を好み、二次林要素でもある。アサダは山地に、エノキ属は河川沿いや平坦地に、サクラ属は排水の良い傾斜地に生育する。クスノキ科は温帯下部の温暖な暖温帯に分布し、照葉樹林の主要構成要素を含む常緑高木である。

いずれも温帯ないし温帯下部の暖温帯に分布する樹種であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能な樹種であったと考えられる。

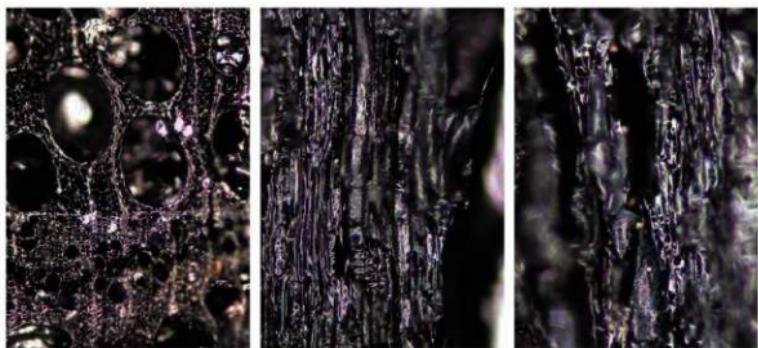
#### 文献

- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造。文永堂出版。290p.  
島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣。296p.  
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別1号。植生史研究会。242p.

第11表 樹種同定結果



横断面 : 0.4mm  
1, 39 H区明褐色土層 アサダ

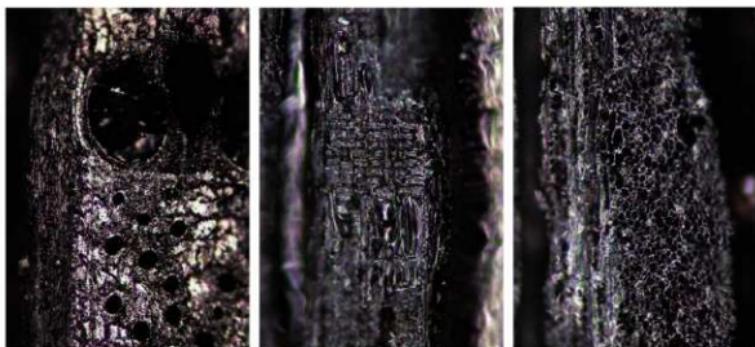


横断面 : 0.4mm  
2, 18 E区pit92 クリ

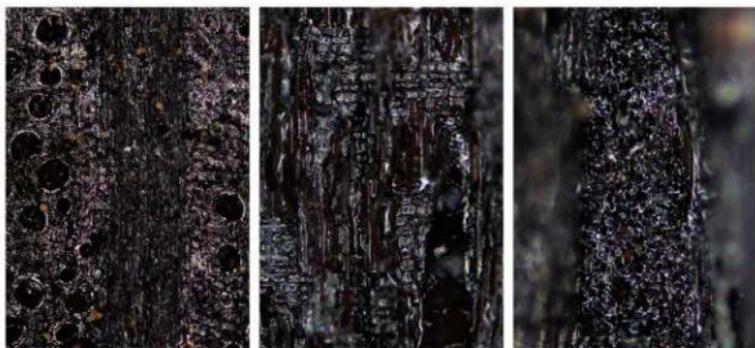


横断面 : 0.4mm  
3, 44 H区堅穴状遺構3/4ブロック コナラ属クヌギ節

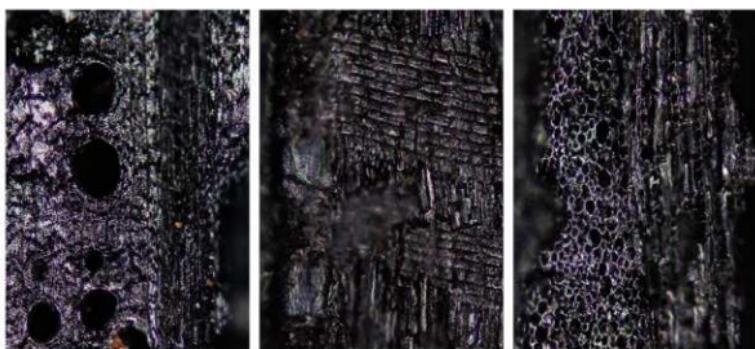
第48図 炭化材①



横断面 放射断面 接線断面 : 0.4mm : 0.2mm : 0.2mm  
4, 48 H区堅穴状遺構西側ベルト コナラ属クヌギ節

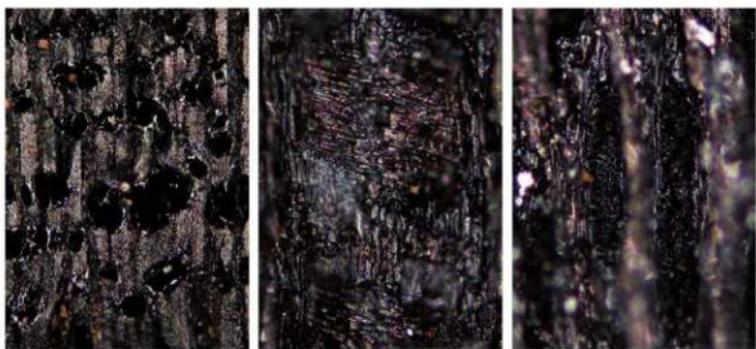


横断面 放射断面 接線断面 : 0.4mm : 0.2mm : 0.2mm  
5, 4 D区炭化材No 3-3 コナラ属アカガシ亜属



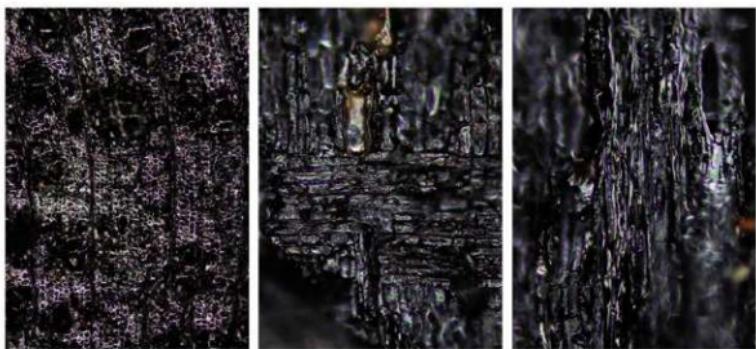
横断面 放射断面 接線断面 : 0.4mm : 0.2mm : 0.2mm  
6, 19 E区pit188 コナラ属アカガシ亜属

第49図 炭化材②



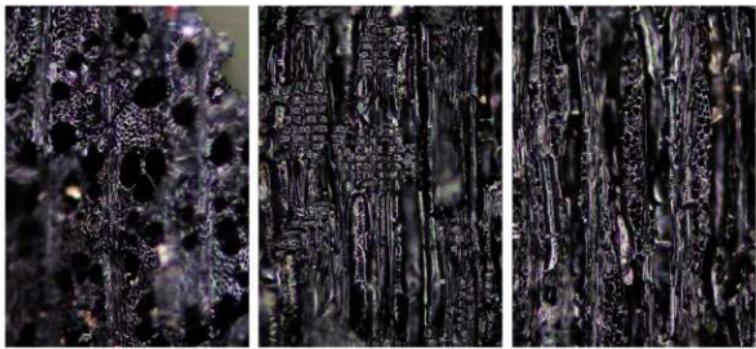
横断面 ━━━━ : 0.4mm  
放射断面 ━━━━ : 0.2mm  
接線断面 ━━━━ : 0.2mm

7. 24 E区pit268 エノキ属



横断面 ━━━━ : 0.4mm  
放射断面 ━━━━ : 0.2mm  
接線断面 ━━━━ : 0.2mm

8. 38 G区明褐色土層 クスノキ科



横断面 ━━━━ : 0.2mm  
放射断面 ━━━━ : 0.2mm  
接線断面 ━━━━ : 0.2mm

9. 23 E区pit263 (石白下) サクラ属

第50図 炭化材③

## 第2節 放射性炭素年代測定

### 1 はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

### 2 試料と方法

第12表 試料と方法

試料No.	地点・層準	種類	前処理	測定法
No 1	D 区No 3 - 1	炭化材（アカガシ亜属）	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No 2	D 区No 5 - 1	炭化材（アカガシ亜属）	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No 3	D 区No 7 - 3 (本報告ピット 3)	炭化材（アカガシ亜属）	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No 4	D 区No 8 (本報告ピット 4)	炭化材（アカガシ亜属）	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No 5	D 区No 9 (本報告ピット 5)	炭化材（アカガシ亜属）	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No 6	E 区 pit263, 石臼下 (本報告ピット 6)	炭化材（サクランボ属）	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No 7	G 区焼土塊No 1 (本報告ピット 7)	炭化材（アカガシ亜属）	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No 8	G 区焼土塊No 6 (本報告ピット 10)	炭化材（アカガシ亜属）	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No 9	H 区明褐色土層	炭化材（アサガホ）	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
No 10	H 区竪穴状遺構	炭化材（クヌギ節）	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

AMS : 加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

### 3 測定結果

第13表に放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を示し、第51図・第52図に暦年較正結果（較正曲線）を示す。

#### (1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比を補正するための炭素安定同位体比 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (%) で表す。試料の  $\delta^{13}\text{C}$  値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

#### (2) $^{14}\text{C}$ 年代測定値

試料の  $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$  比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$  の半減期は5730年であるが、国際的慣例により Libby の5568年を用いている。

### (3) 曆年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中<sup>14</sup>C 濃度の変動および<sup>14</sup>C の半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。曆年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な<sup>14</sup>C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン／トリウム) 年代と<sup>14</sup>C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線データは IntCal 04、較正プログラムは OxCal 3.1である。

曆年代 (較正年代) は、<sup>14</sup>C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した曆年代の幅で表し、OxCal の確率法により  $1\sigma$  (68.2% 確率) と  $2\sigma$  (95.4% 確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の  $1\sigma$ ・ $2\sigma$  値が表記される場合もある。( ) 内の % 表示は、その範囲内に曆年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C 年代の確率分布。二重曲線は曆年較正曲線を示す。

## 4 所見

加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定の結果、No.1 の炭化材では  $2435 \pm 20$  年 BP (2 $\sigma$  の曆年代で BC740~680, 670~640, 550~400 年)、No.2 では  $2400 \pm 20$  年 BP (BC540~400 年)、No.3 では  $2465 \pm 20$  年 BP (BC760~680, 670~480, 470~410 年)、No.4 では  $2205 \pm 20$  年 BP (BC370~200 年)、No.5 では  $2450 \pm 20$  年 BP (BC750~680, 670~640, 600~410 年)、No.6 では  $305 \pm 15$  年 BP (BC 1520~1600, 1610~1650 年)、No.7 では  $1295 \pm 15$  年 BP (AD660~780 年)、No.8 では  $2430 \pm 20$  年 BP (BC 740~690, 660~650, 550~400 年)、No.9 では  $2385 \pm 25$  年 BP (BC540~390 年)、No.10 では  $575 \pm 20$  年 BP (AD1300~1360, 1380~1420 年) の年代値が得られた。

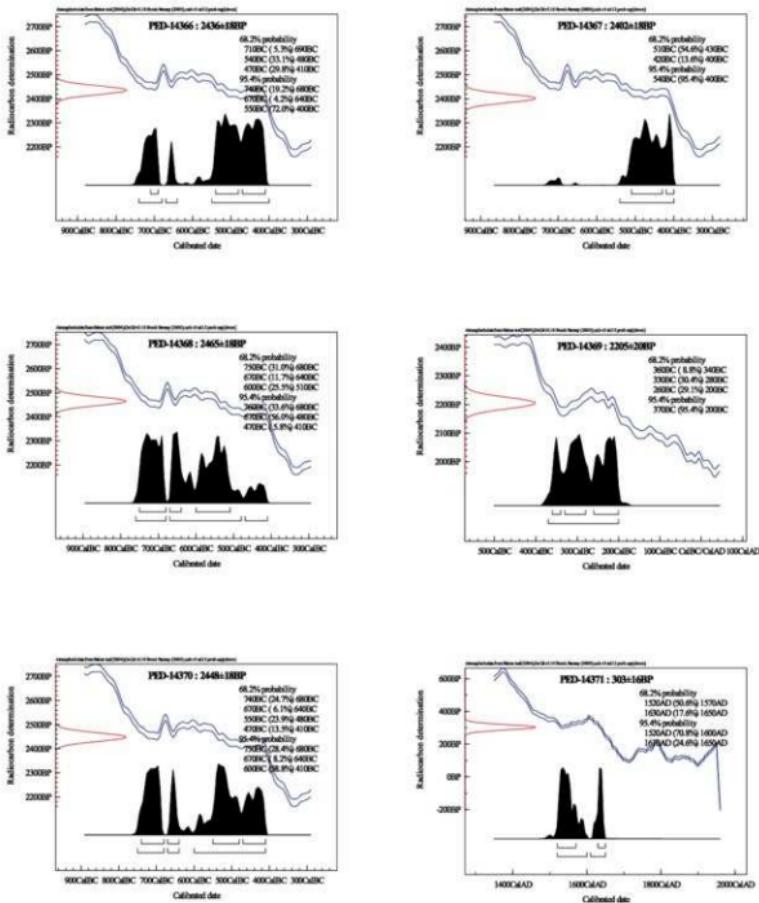
なお、樹木 (炭化材) による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分が利用されたり転用材が利用されていた場合は、遺構の年代よりも古い年代値となる。

## 文献

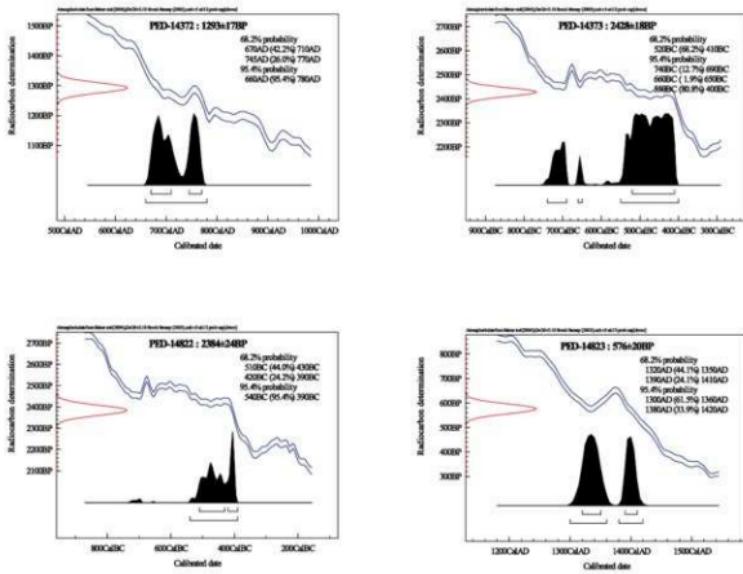
- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy. The OxCal Program. Radiocarbon, 37 (2), p.425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
- Paula J Reimer et al. (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26.0 ka BP. Radiocarbon 46, p.1029-1058.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C 年代. p. 3・20.

第13表 放射性炭素年代測定結果

試料No	測定番号 PED-	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	${}^{\text{14}}\text{C}$ 年代 (年 BP)	歴年代 (校正年代)	
				1 $\sigma$ (68.2%確率)	2 $\sigma$ (95.4%確率)
1	14366	$-25.75 \pm 0.14$	$2435 \pm 20$	710BC (5.3%) 690BC 540BC (33.1%) 480BC 470BC (29.8%) 410BC	740BC (19.2%) 680BC 670BC (4.2%) 640BC 550BC (72.0%) 400BC
2	14367	$-24.75 \pm 0.13$	$2400 \pm 20$	510BC (54.6%) 430BC 420BC (13.6%) 400BC	540BC (95.4%) 400BC
3	14368	$-26.65 \pm 0.12$	$2465 \pm 20$	750BC (31.0%) 680BC 670BC (11.7%) 640BC 600BC (25.5%) 510BC	760BC (33.6%) 680BC 670BC (56.0%) 480BC 470BC (5.8%) 410BC
4	14369	$-27.47 \pm 0.21$	$2205 \pm 20$	360BC (8.8%) 340BC 330BC (30.4%) 280BC 260BC (29.1%) 200BC	370BC (95.4%) 200BC
5	14370	$-25.78 \pm 0.11$	$2450 \pm 20$	740BC (24.7%) 680BC 670BC (6.1%) 640BC 550BC (23.9%) 480BC 470BC (13.5%) 410BC	750BC (28.4%) 680BC 670BC (8.2%) 640BC 600BC (58.8%) 410BC
6	14371	$-25.59 \pm 0.17$	$305 \pm 15$	1520AD (50.6%) 1570AD 1630AD (17.6%) 1650AD	1520AD (70.8%) 1600AD 1610AD (24.6%) 1650AD
7	14372	$-27.85 \pm 0.12$	$1295 \pm 15$	670AD (42.2%) 710AD 745AD (26.0%) 770AD	660AD (95.4%) 780AD
8	14373	$-26.31 \pm 0.13$	$2430 \pm 20$	520BC (68.2%) 410BC	740BC (12.7%) 690BC 660BC (1.9%) 650BC 550BC (80.8%) 400BC
9	14822	$-24.77 \pm 0.20$	$2385 \pm 25$	510BC (44.0%) 430BC 420BC (24.2%) 390BC	540BC (95.4%) 390BC
10	14823	$-27.02 \pm 0.15$	$575 \pm 20$	1320AD (44.1%) 1350AD 1390AD (24.1%) 1410AD	1300AD (61.5%) 1360AD 1380AD (33.9%) 1420AD



第51図 層年較正結果①



第52図 历年較正結果②

### 第3節 植物珪酸体分析

#### 1 はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 ( $\text{SiO}_4$ ) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山、2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山、1984）。

#### 2 試料

分析試料は、D区南側壁面から採取された6点、D区下層確認用深掘トレンチから採取された8点、および土器直下や土器内（第34図215）から採取された6点の計20点である。試料採取箇所を第53図に示す。

#### 3 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスピーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 檢鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-3}\text{g}$ ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山、2000）。タケア科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率およびメダケ率（メダケ属とササ属の比率）を求めた。

#### 4 分析結果

##### （1）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第14表および第53図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真（第54図）を示す。

〔イネ科〕

イネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヨシ属、シバ属、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）、ウシクサ族B（大型）、Bタイプ

〔イネ科-タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科-その他〕

表皮毛起源、棒状硅酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔シダ類〕

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、クスノキ科、アワブキ科、その他

（2）植物珪酸体の検出状況

1) D区南側壁面・下層確認用深掘トレンチ

下位の7層（試料14）では、ウシクサ族A、イネ科Bタイプ、ミヤコザサ節型、および樹木（照葉樹）のクスノキ科などが検出されたが、いずれも少量である。6層（試料12）にかけては、ミヤコザサ節型が増加傾向を示し、キビ族型が出現している。5層（試料9、10）から4層（試料7）にかけては、ミヤコザサ節型が大幅に増加し、ネザサ節型、ブナ科（シイ属）などが出現している。3層（試料4～6）では、ススキ属型が出現し、ミヤコザサ節型は減少傾向を示している。また、樹木のクスノキ科が増加している。2層（試料2）から表土～2層（試料1）にかけては、メダケ節型、ネザサ節型が増加し、イネ、ムギ類（穎の表皮細胞）、ヨシ属、シバ属型などが出現している。イネの密度は、2層（試料2）では3,300個/gと比較的高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを上回っているが、表土～2層（試料1）では2,000個/gと比較的低い値である。ムギ類（穎の表皮細胞）の密度は700～1,300個/gと比較的低い値であるが、穎（糊殻）が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。

おもな分類群の推定生産量によると、6層から3層にかけてはミヤコザサ節型が優勢であり、とくに5層上部から3層下部にかけて多くなっている。2層より上位ではネザサ節型が優勢であり、イネも比較的多くなっている。

2) 土器直下・土器内

土器直下の明褐色土層（3層：試料15、16、19、20）では、ミヤコザサ節型が多量に検出され、ススキ属型、ウシクサ族A、チマキザサ節型、および樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）、クスノキ科なども検出された。また、試料15と試料16では、ヨシ属も認められた。土器内の試料17と試料18でも、おおむね同様の結果であるが、ミヤコザサ節型はやや少なくなっている。また、試料18ではイネが検出された。イネの密度は700個/gと低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、各試料ともミヤコザサ節型が優勢となっている。

## 5 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

### (1) D区南側壁面・下層確認用深掘トレンチ

下位の7層の堆積当時は、ウシクサ、ササ属（おもにミヤコザサ節）などは見られるものの、何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと考えられる。また、遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木が生育していたと推定される。

6層から3層にかけては、ササ属（おもにミヤコザサ節）などの笹類を主体としてウシクサ族なども見られるイネ科植生が継続されていたと考えられ、とくに5層上部から3層下部にかけてはササ属が多く生育していたと推定される。また、遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと考えられる。ササ属などの笹類は常緑であることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカ類などの草食動物の重要な食物となっている（高槻、1992）。周辺にこれらの笹類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要と考えられる。

2層から表土にかけては、調査地点もしくはその近辺でイネやムギ類の栽培が行われており、周辺にはススキ属やチガヤ属、キビ族、メダケ属（メダケ節やネザサ節）などが生育していたと考えられる。また、遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

### (2) 土器直下・土器内

G区土坑内出土土器C内の試料では、少量ながらイネが検出された。当時は周辺でイネの栽培が行われており、そこから土器内に何らかの形でイネの植物珪酸体が混入したと考えられる。なお、粉殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体が認められないことから、土器内に稲粉が入れられていた可能性は低いと考えられる。

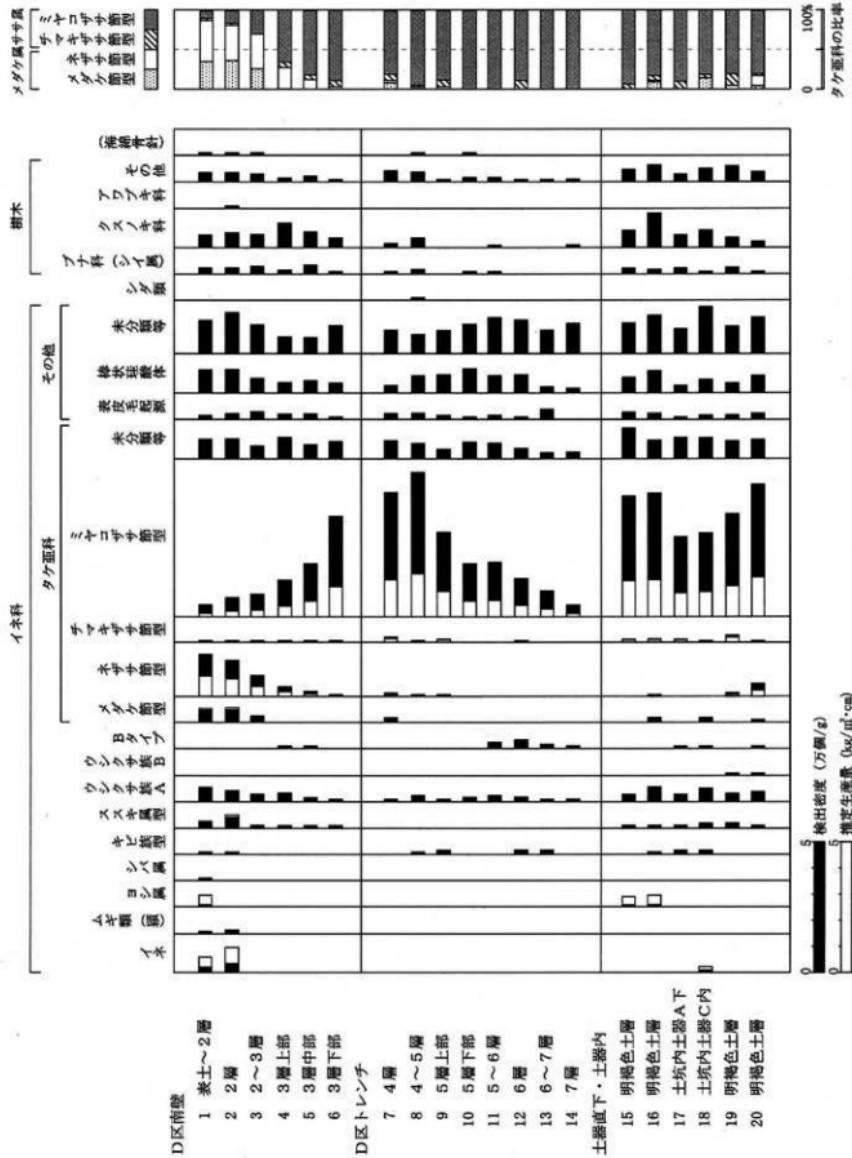
土器直下の明褐色土層（3層）の堆積当時は、ササ属（おもにミヤコザサ節）などの笹類を主体としてススキ属やチガヤ属なども見られるイネ科植生であったと考えられ、遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。各試料の植物珪酸体組成や密度は類似しており、とくに明瞭な差異は認められなかった。

#### 文献

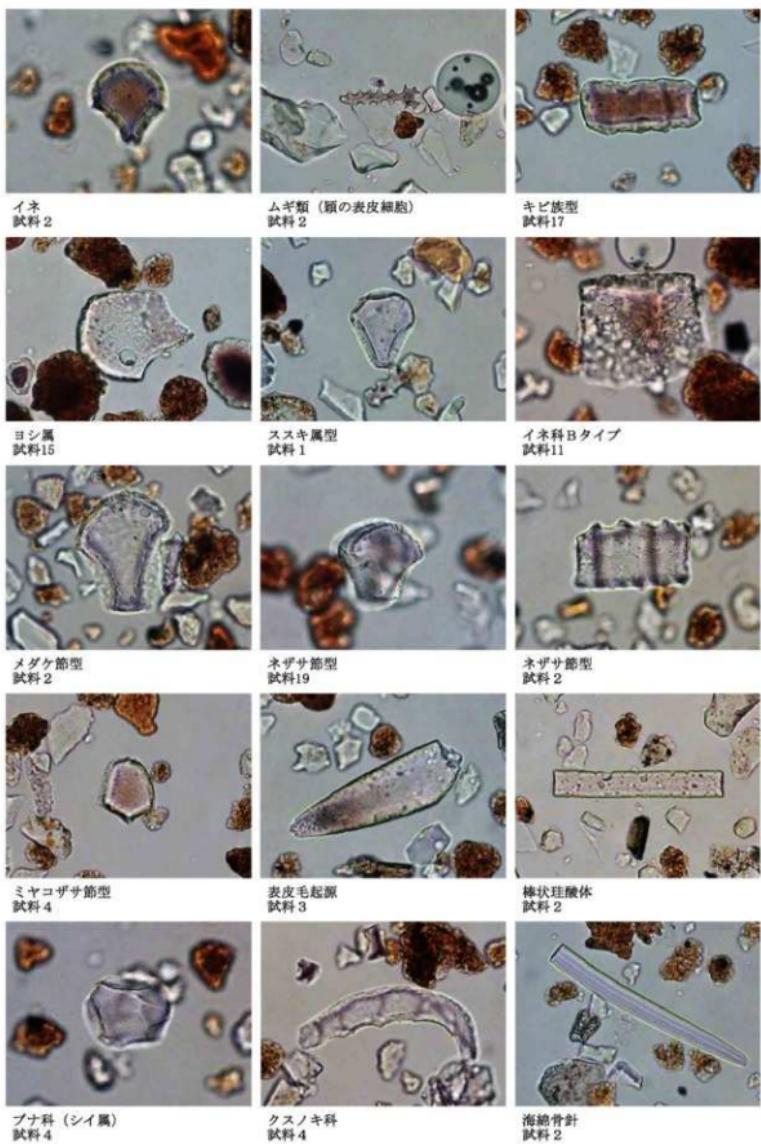
- 近藤鍊三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体、その特性と応用。第四紀研究、25、p.31-63。  
杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケアキ科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－、考古学と自然科学、19、p.69-84。  
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オバール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213。  
杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史。第四紀研究、38(2)、p.109-123。  
高槻成紀（1992）北に生きるシカたち－シカ、ササそして雪をめぐる生態学－、どうぶつ社。  
藤原宏志（1976）プラント・オバール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9、p.15-29。  
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オバール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オバール分析による水田址の探査－、考古学と自然科学、17、p.73-85。

第14表 植物珪酸体分析結果

検出密度(単位: ×10個/㎠)		地点・属科																				
分類群	学名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
イネ科 ムギ属(穀の表皮胞壁)	Oryza sativa	20	33																		7	
ヨシ属	Hordium-Triticum (husk Phytolith)	7	13																			
シバ属	Phragmites	7																				
キビ属	Zizaniopsis	7	7	6	6	7	7	13														
ススキ属	Panicum type	20	40	7	6	7	7	13														
ススキサ属A	Mitchella type	52	40	27	31	13	7	7	21	7	14	21	15	7	8	25	55	26	49	29	36	
ススキサ属B	Achnopogon A type																					
BTイブ	Achnopogon B type																					
タケ属	Bambusoidae																					
タケ属	Phloiolethites sec. Nipponocalamus	46	47	20	37	19	7	13	7	7	13	7	7	7	13	14	14	14	14	14	7	
スサナ属	Phloiolethites sec. Nerasa	163	140	80	37	141	205	390	482	561	328	265	212	148	100	45	469	481	310	325	400	514
チャキササ属	Sasa sect. Sasa etc.	7	7	6	6	14	20	7	13	7	13	7	7	7	13	14	13	7	7	29	7	
ミヤコササ属	Sasa sect. Crossodi	46	74	87	141	205	390	482	561	328	265	212	148	100	45	469	481	310	325	400	514	
未分類等	Others	72	74	47	80	51	63	66	56	33	61	57	37	21	23	114	169	79	85	71		
その他のイネ科																						
表皮毛起源																						
神代珪酸体																						
未分類等																						
シダ属																						
裸木松属	Fern																					
アオサ科 (シイ属)	Athyriaceal																					
クスノキ科	Cyatopteris	20	20	27	12	32	7	7	14	7	7	7	7	7	19	14	20	7	22	7		
アワ科	Lauraceae	46	54	47	92	58	35	13	35	7	7	7	7	7	8	63	130	46	64	36	21	
その他	Sabiaceae	33	33	27	12	19	7	40	35	7	14	14	7	7	8	44	62	26	49	38	36	
(休耕珪酸体)	Others	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7		
植物珪酸体数	Total	771	849	555	546	538	682	792	904	570	595	551	457	398	226	957	1112	673	875	882	993	
おもな珪酸体の相対性質量(単位: kg/Ha·cm)、試料の相対比率を100%として算出																						
イネ	Oryza sativa	0.58	0.98																		0.21	
ヨシ属	Phragmites	0.24	0.50	0.08	0.08	0.08	0.09															
ススキ属	Mitchella type	0.53	0.54	0.23																		
スダチ属	Phloiolethites sec. Nipponocalamus	0.78	0.67	0.39	0.18	0.69	0.03	0.06	0.03	0.03												
チャキササ属	Phloiolethites sec. Nerasa	0.05	0.05	0.05	0.05	0.10	0.15	0.05	0.10	0.15												
ミヤコササ属	Sasa sect. Crossodi	0.14	0.22	0.26	0.42	0.62	1.17	1.44	1.68	0.61	0.64	0.44	0.30	0.14	1.41	1.44	0.93	0.97	1.20	1.54		
タケ属																						
タケ属	Phloiolethites sec. Nipponocalamus	35	36	26	27	12	3	3	2	3	2	3	2	3	2	3	2	3	2	3	4	
スサナ属	Phloiolethites sec. Nerasa	3	3	7	6	8	3	9	11	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	
チャキササ属	Sasa sect. Crossodi	9	15	30	66	81	89	80	95	88	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	
ミヤコササ属																						
メダガサ	Mitchella ratio	88	82	70	27	12	3	12	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	



第53図 植物珪酸体分析結果



第54図 植物珪酸体（プランツ・オパール）

— 50 μm —

## 第IV章 まとめ

調査時から時間が経過して不明点も多いが、長らく保管されていた遺物と残されていた記録類から可能な限り情報を整理し、今回の報告を行った。調査成果を概観して周辺地域のなかでの位置づけを含めたところで幾らか考えてみたい。

まず遺構については、各地区、複数時期の遺構が混在、複合している可能性があるが、検出面が判然とせず遺構内出土遺物の整理も不十分なため、建物群を図上復元したり時期別に論じたりすることは難しい。ただそうしたなか、G区・D区・C区の遺構の分布については注目したい。D区においては調査区のはば中央を縦断するように柱穴列が検出されており、D区の山手にあたるG区においても柱穴の延長線上に溝状遺構が見て取れる。そして、この柱穴列と溝状遺構より南西側の貝森川寄りは遺構密度が低く、逆に北東側の丘陵尾根筋に近い方については非常に遺構が密集している状況がつかめる。海手のC区においては、D区からの柱穴列の延長は認められず、調査区全体において遺構の密度は薄い。柱穴列の配置がその他の遺構の分布に大きく影響していること、すなわち柱穴列が建物群の造営に強く規制を及ぼしていたことが想定される。柱穴列を含む遺構群が果たしていつの時期のもののかについて軽々に述べることは避けなければならないが、ピット3、ピット5、ピット10よりそれぞれ検出された炭化材の放射性年代測定結果が弥生時代前期の年代値を示していることには留意しておきたい。

H区の炭化材の厚い堆積がみられた竪穴状遺構については、放射性年代測定結果から中世期のものと判断され、複数行った炭化材の樹種同定の結果がクヌギに限定される点は注目される。炭焼きに関する遺構なども想定されようか。近隣での類例として古作遺跡（南島原市深江町所在）検出の土坑があげられる。

遺物のなかで最も充実しているのが縄文時代早期の押型文土器の資料である。施文には梢円文、山形文、格子目文、平行文がみられる。多くが狭小な平底から胴部、口縁部が開いて立ち上がる深鉢形の器形が基本であると思われ、口縁部の外傾・外反の度合いは内面への施文の有無が影響しているものと判断する。近隣で押型文土器を多数検出した下末宝遺跡（南島原市深江町所在）と比較すると、押型文土器全体に占める文様比率の構成は、平行文の割合が低く、格子目文の割合が高い。また、深鉢形土器において下末宝遺跡でみられた丸底や丸底気味の平底はみられない。下末宝遺跡でみられた小型の壺形を呈するものについても確認していない。加えて、島原半島において押型文土器とともに出土することがあり、その後関係について論じられることがある円筒形条痕文土器については、通野遺跡では出土していない。

縄文時代後・晚期の資料としては、磨消縄文系のものがあり、続いて肥後地方でいうところの天城式・古闕式に相当するもの、黒川式（島原地域の礫石原式）に属するものがみられる。突帯文期の資料については、大きく二分できるものと思われる。一方は口縁部からやや下がった位置に太めの突帯を貼り付けるか、反対させた口縁端部に直接刻目を施すもので、器面には条痕調整を残すなど粗い作りの一群（第32図156～177）である。もう一方は口唇部に接して細めの突帯を貼り付けて細かく刻目を施し、胴部突帯部分の屈曲は不明瞭で、器面には丁寧にナデ調整を行う一群（第32図178～189）である。前者が弥生時代早期に、後者が弥生時代前期に位置づけられるものと考える。肩部に円弧文をもつ丹塗壺（第38図321）は後者に伴うものとして捉えられよう。板付式の短く外反する如意形口縁の壺は認められない。

石器としては、角錐状石器の出土が數少ない島原半島南部の旧石器出土例として貴重となってこよう。縄文後・時期から突帯文期の土器がある程度出土しているながら打製石斧の出土が1点であることには、少ない印象を受ける。また、建築材の伐採具ともなる大型磨削石斧の未成品の存在には気をかけおきたい。

立地を考えれば通野遺跡自体が水稻耕作の直接の栽培地としては適さないことは明らかであるが、周辺には小河川がいくつも流れ、舌状の丘陵を単位としてそれぞれに遺跡が展開している。そうした状況下、小河川によって各丘陵間に作り出されたごく狭い低地が、平野部の少ない島原半島の弥生時代前半期にあって水稻耕作の場になりえるのかについては、関心を寄せるところである。

### 参考文献

本多和典編 2005『下末宝遺跡・上吐津遺跡』深江町文化財調査報告書第1集 深江町教育委員会

本多和典 2018『古作遺跡』南島原市文化財調査報告書第10集 南島原市教育委員会

# 図 版





通野遺跡全景①（南から）



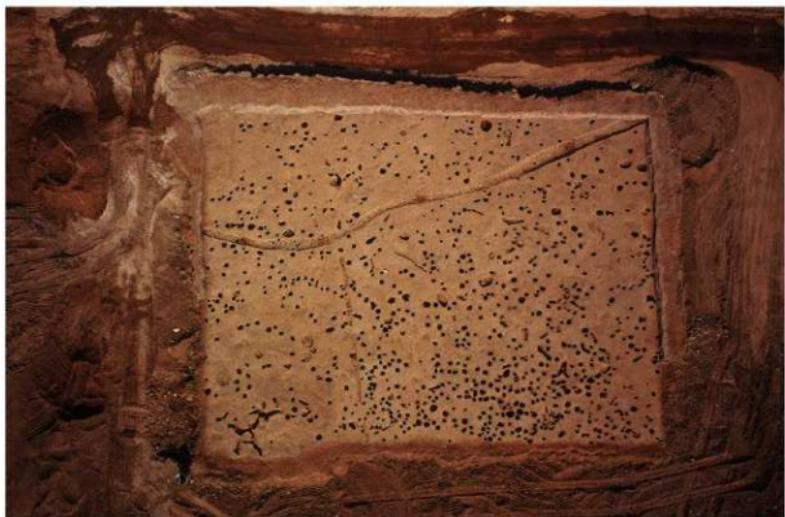
通野遺跡全景②（西から）



D区遗物检出状况



E区遗物检出状况



G区遺構検出状況



H区遺構検出状況



作業状況

図版 6



A区南壁土層①



A区南壁土層②



柱穴列検出状況①



柱穴列検出状況②



ピット 1 検出状況



ピット 2 検出状況



ピット 3 検出状況



ピット 4 検出状況



ピット 5 検出状況



ピット 6 検出状況

図版 8



ピット7検出状況



ピット8検出状況



ピット9検出状況



ピット10検出状況



ピット11検出状況



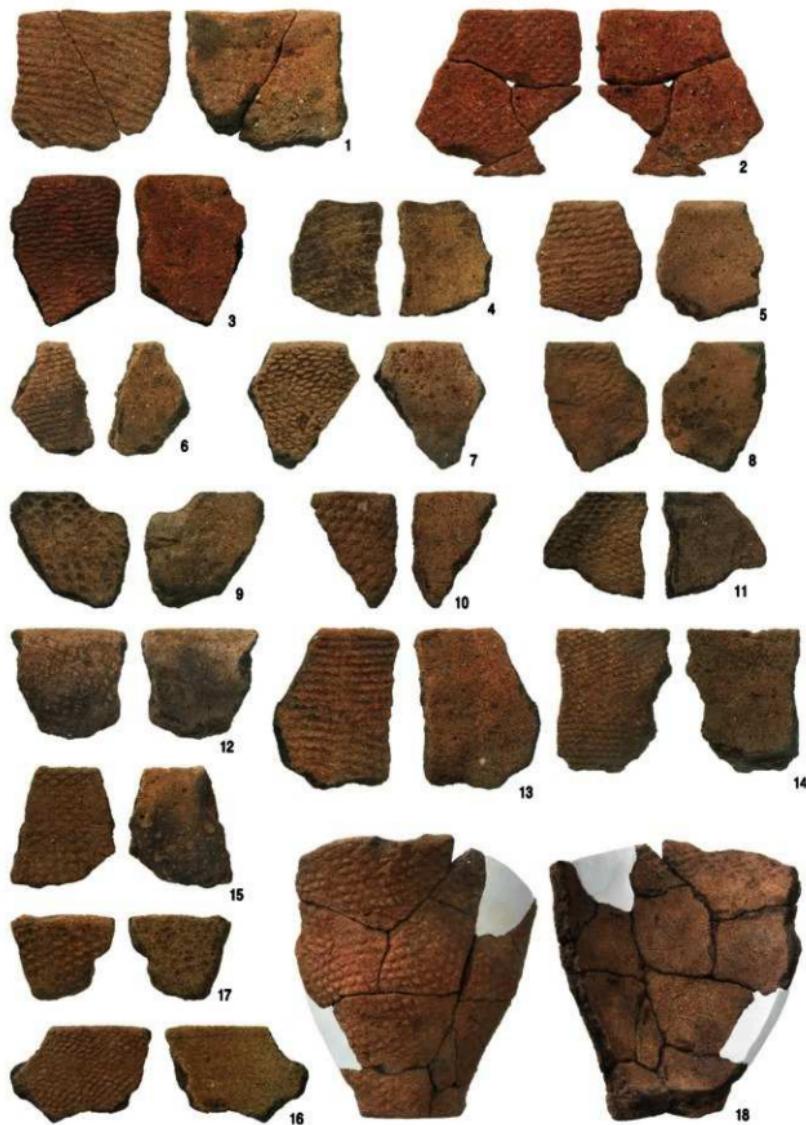
竪穴状遺構検出状況



竪穴状遺構堆積状況①



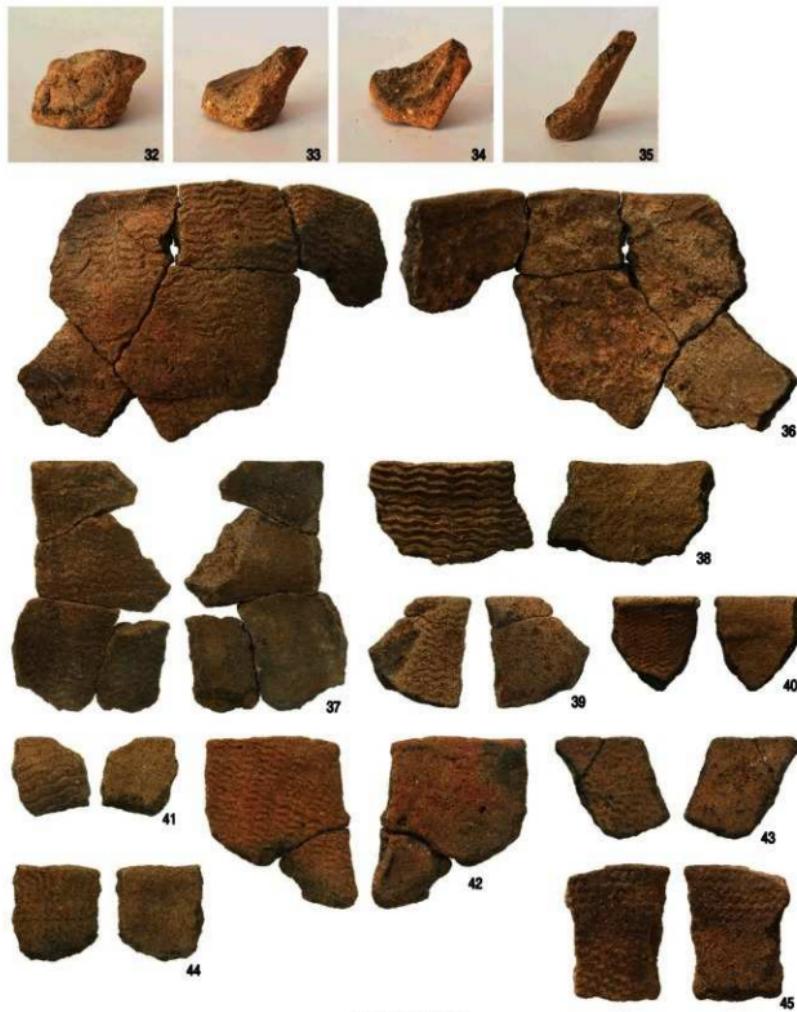
竪穴状遺構堆積状況②



出土土器ほか①



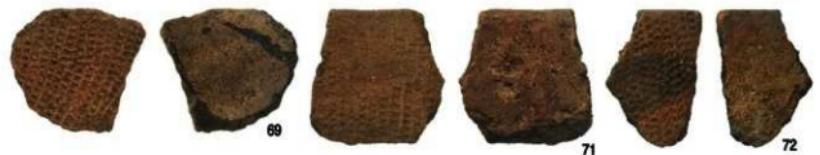
出土土器ほか②



出土土器ほか③



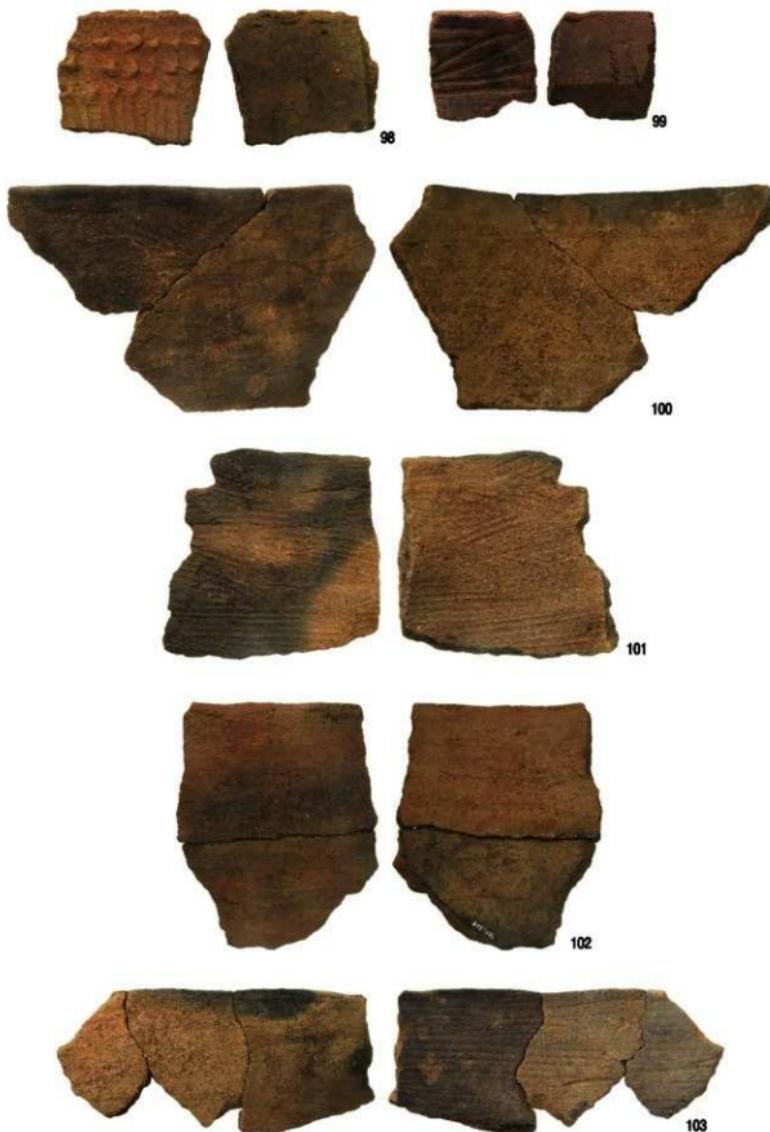
出土土器ほか④



出土土器ほか⑤

図版14



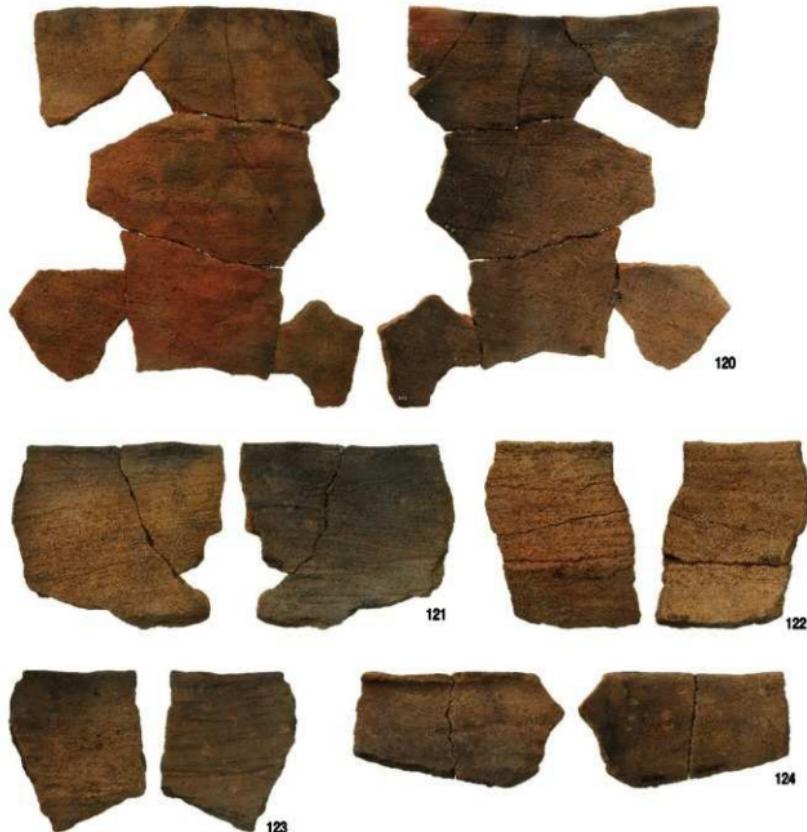


出土土器ほか⑦

図版16

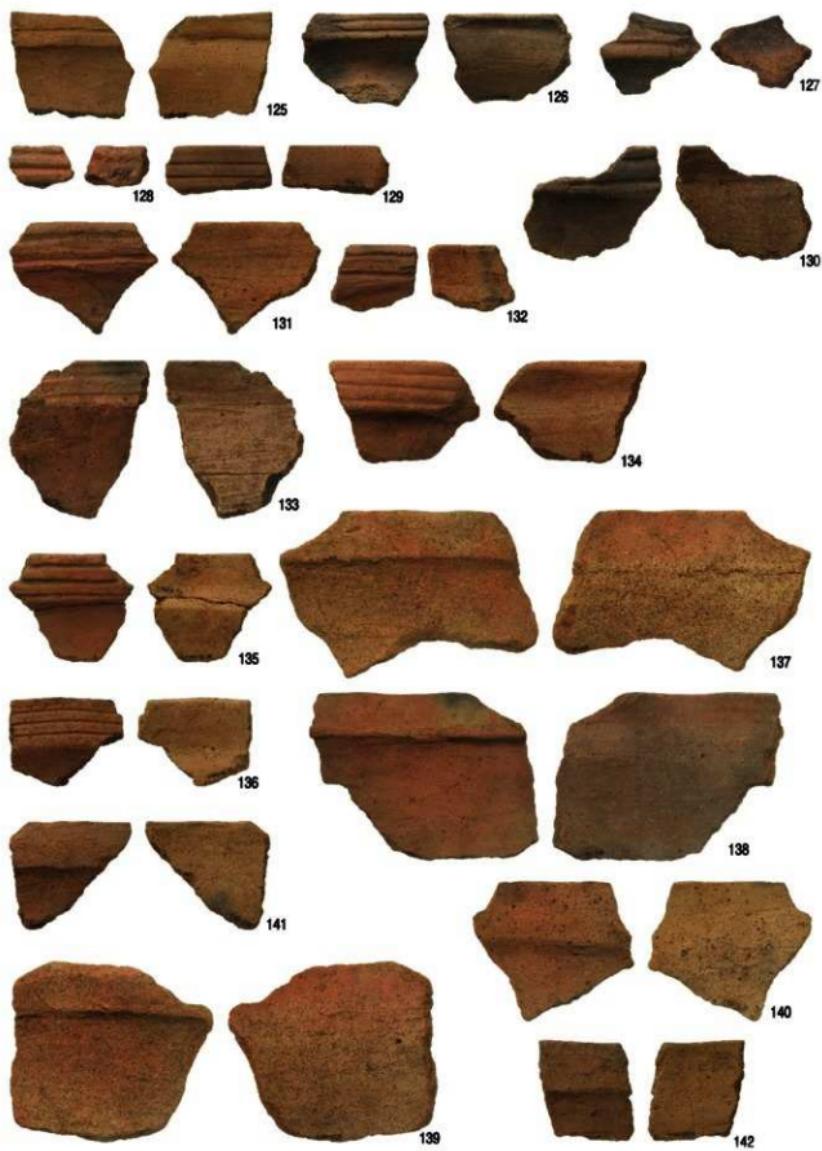


出土土器ほか⑧

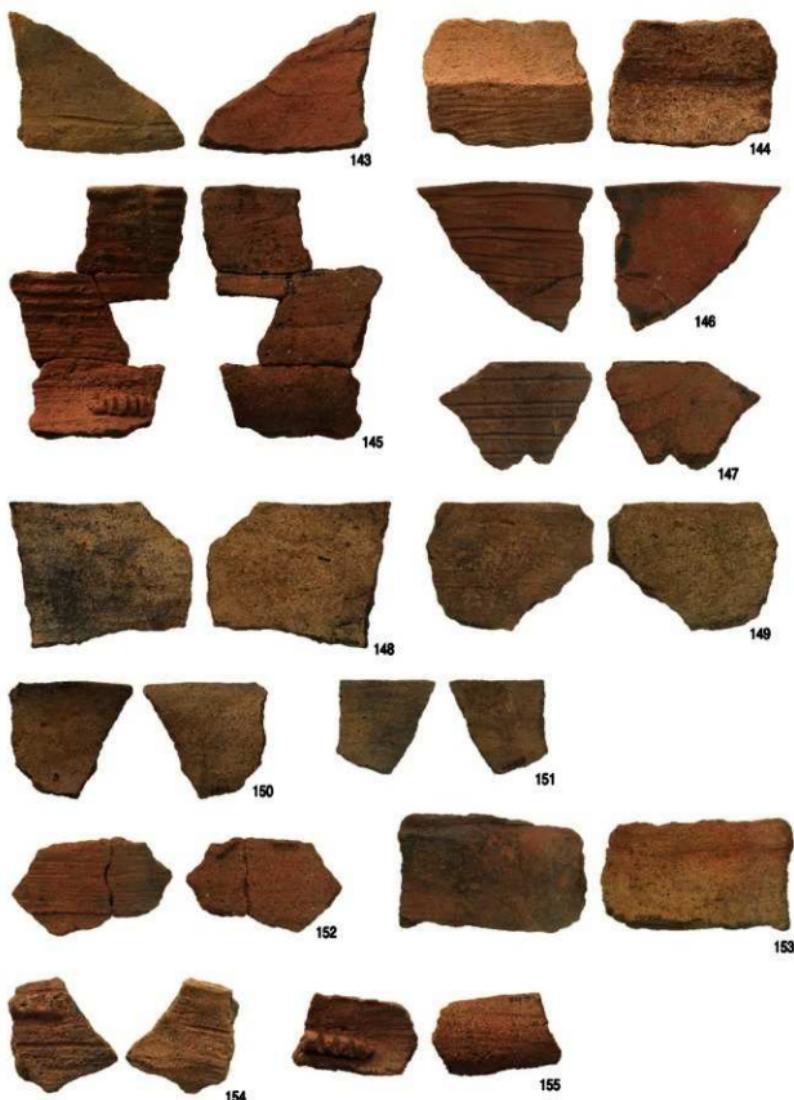


出土土器ほか⑨

図版18



出土土器ほか⑩



出土土器ほか⑪

図版20



出土土器ほか⑫

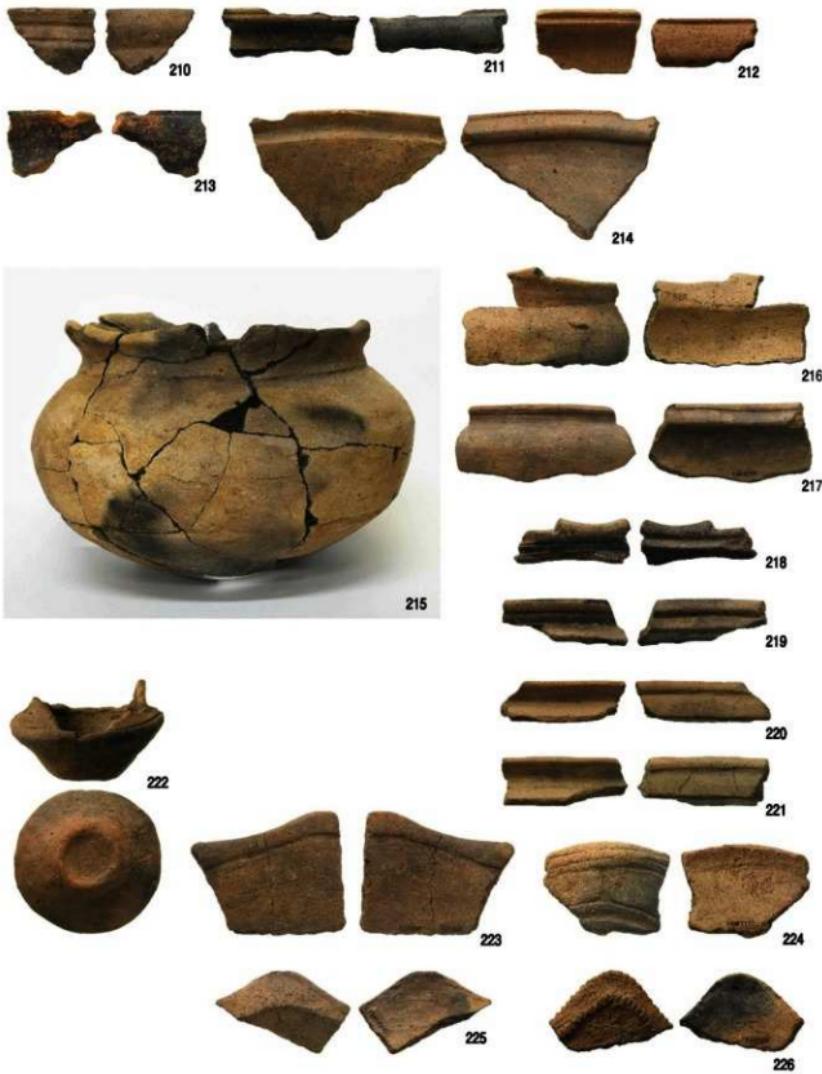


出土土器ほか⑬

図版22



出土土器ほか⑭

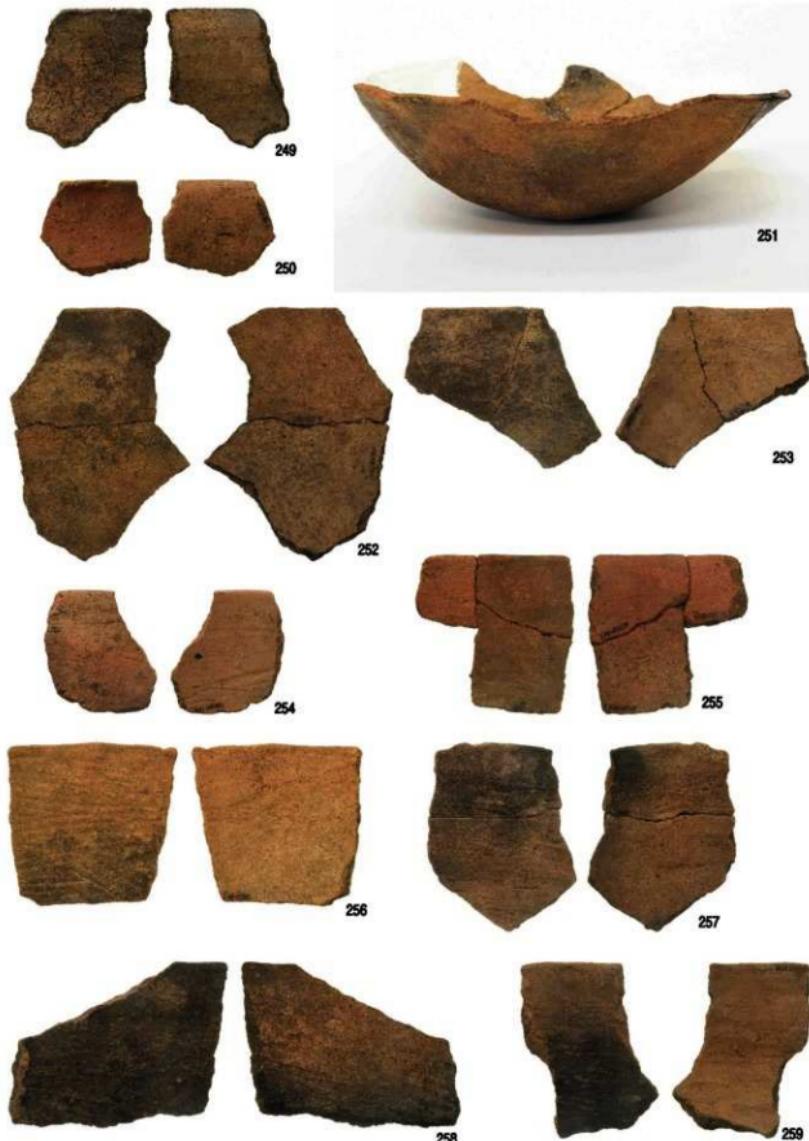


出土土器ほか⑨

図版24

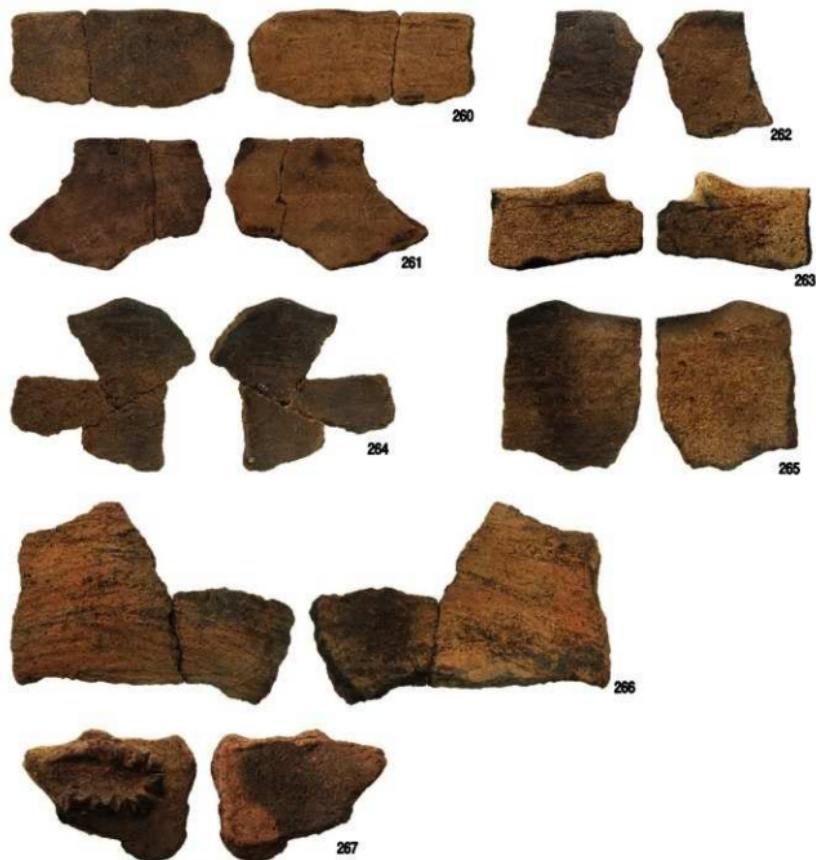


出土土器ほか⑯

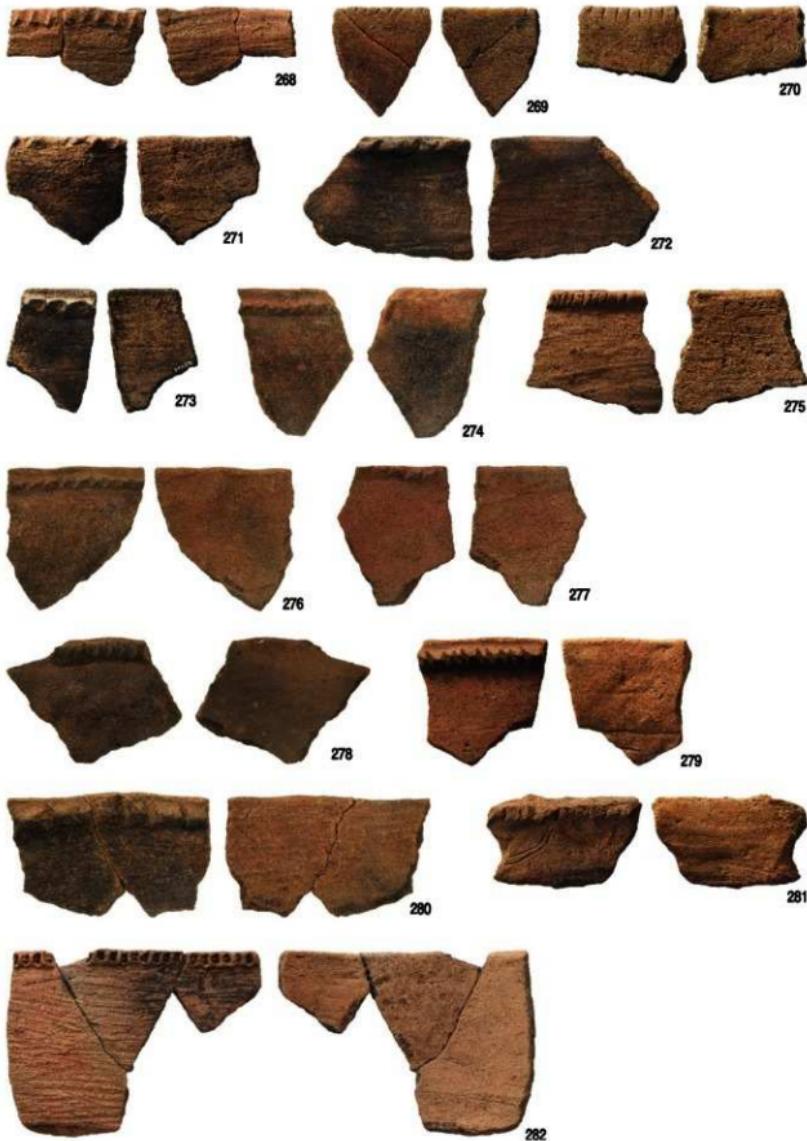


出土土器ほか⑯

図版26



出土土器ほか⑩



出土土器ほか⑮



出土土器ほか②



291



299



298



299



300



301



302



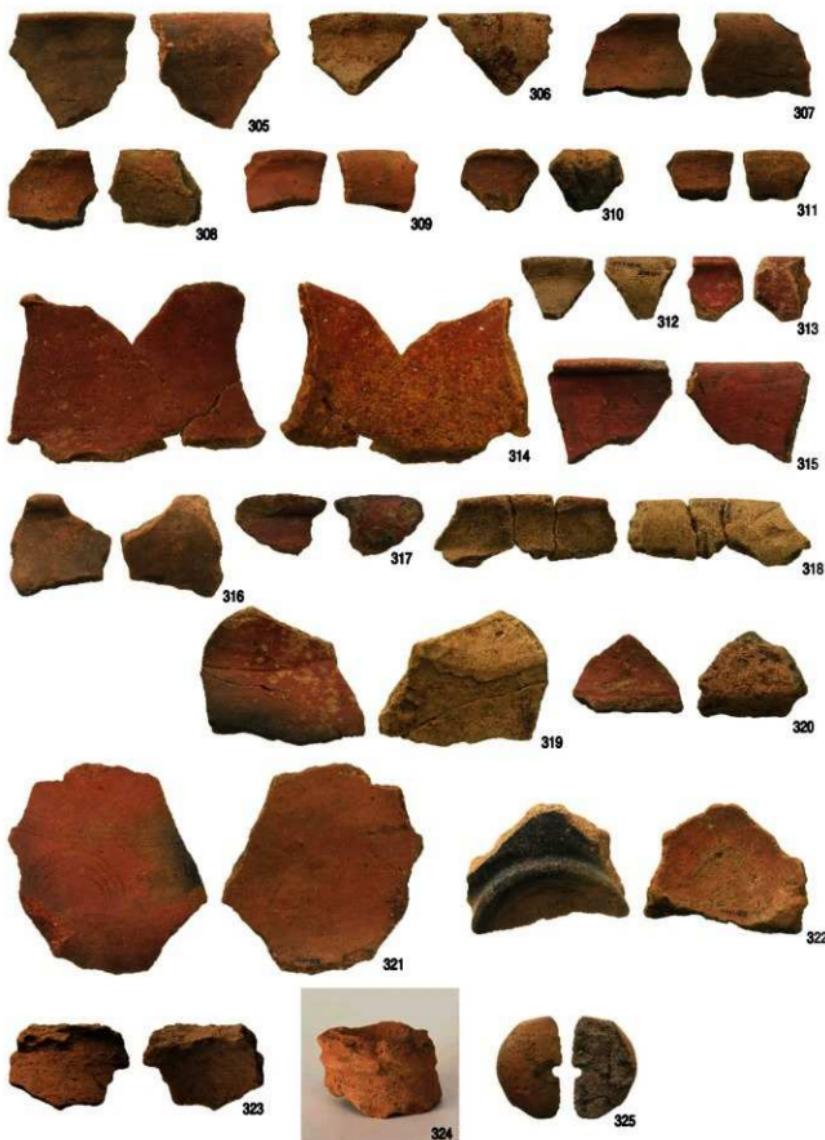
303



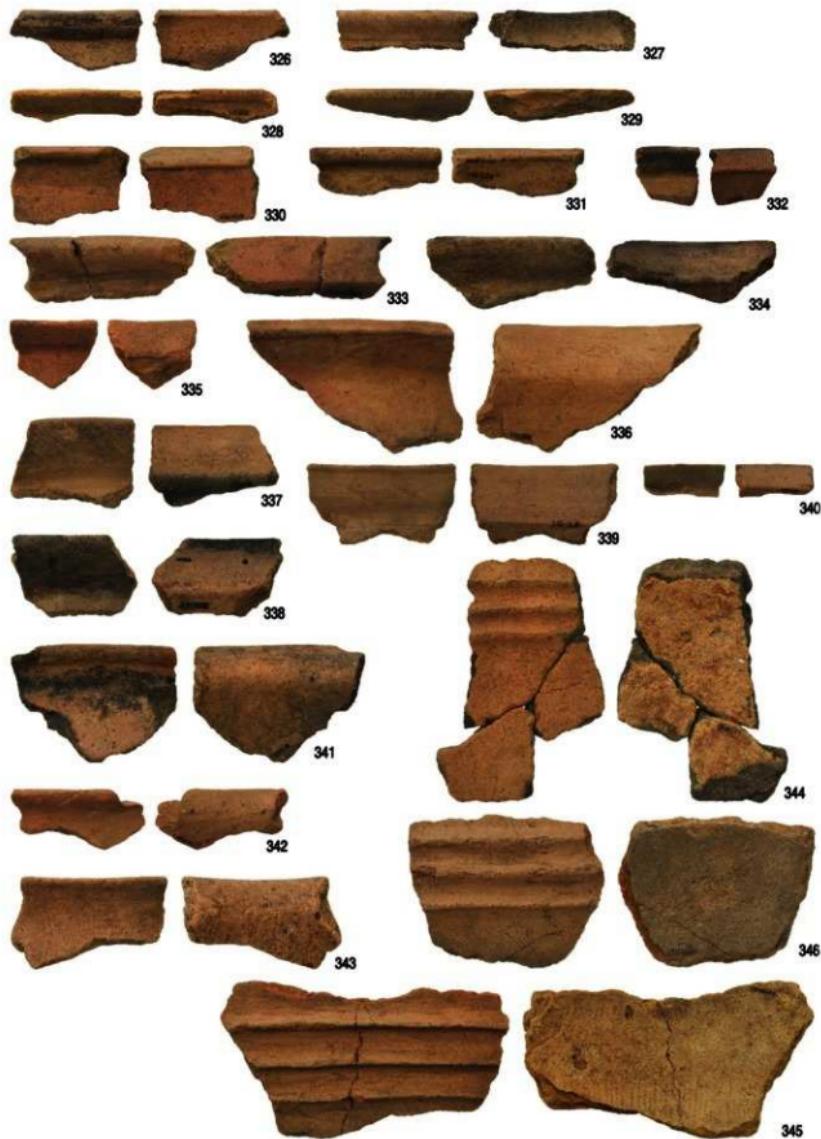
304

出土土器ほか②)

図版30



出土土器ほか②



出土土器ほか②



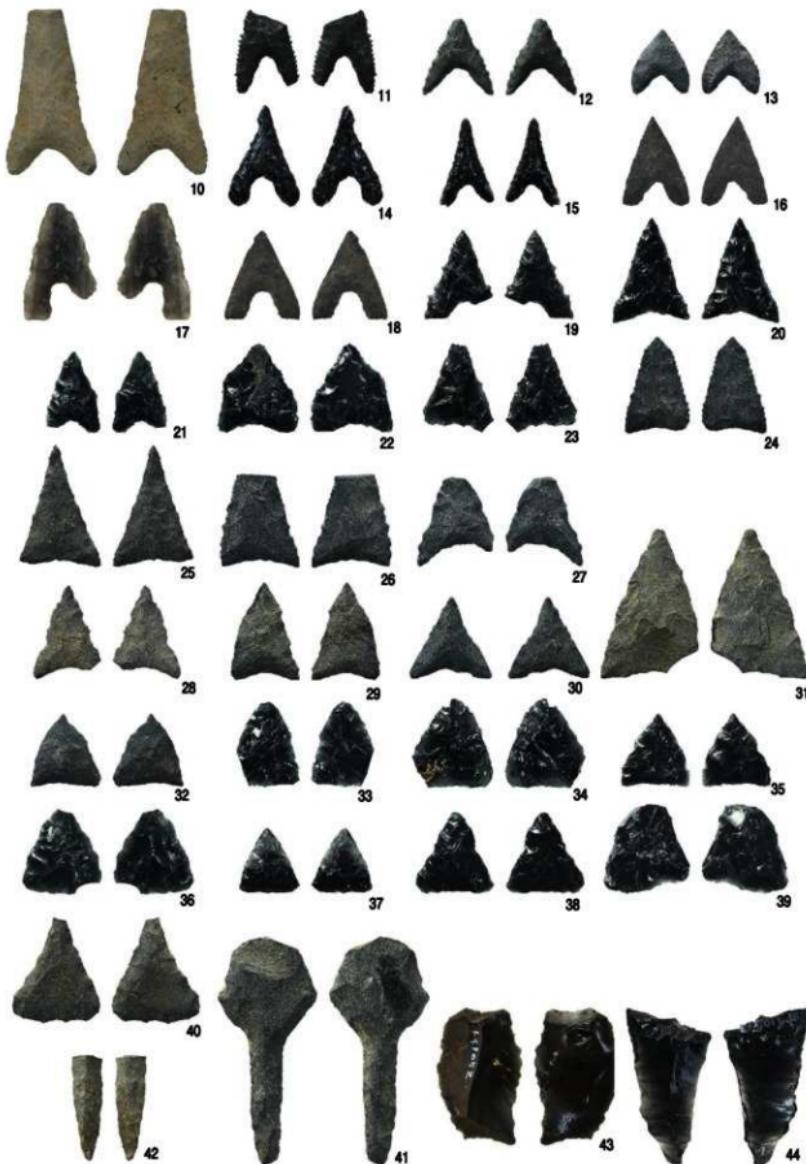
出土土器ほか②



出土土器ほか

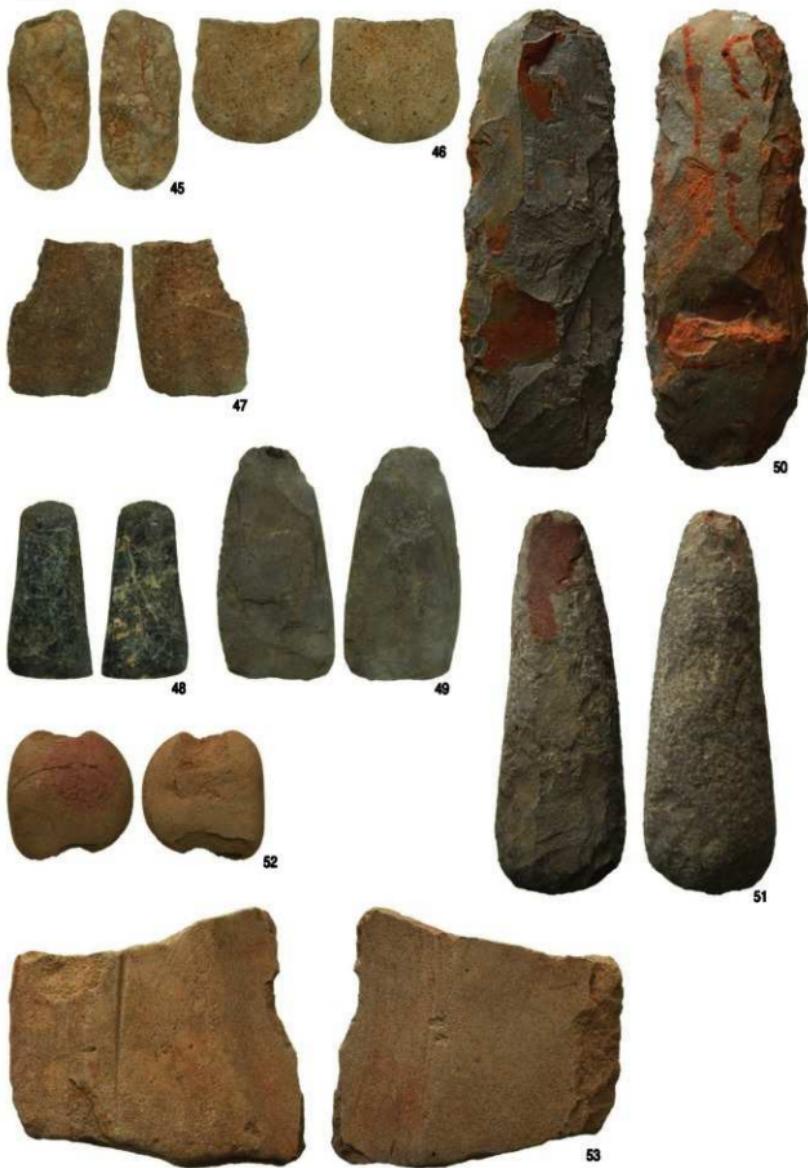


出土石器①



出土石器②

図版36



出土石器③



54

56



55



58



57



59

出土石器④

図版38



## 報告書抄録

ふりがな	といのいせき							
書名	通野遺跡							
副書名	大苑地区県営畠地帯総合整備事業（担い手育成型）に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第30集							
編著者名	本多 和典							
編集機関	南島原市教育委員会							
所在地	〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地 TEL 0957-73-6705							
発行年月日	西暦2022年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東經 °°'	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
といのいせき 通野遺跡	みなみしまばらし 南島原市 ありえちょう 有馬町	42214	106	32° 40' 56"	130° 19' 54"	A～D区 20060911～ 20070319 E～H区 20070511～ 20071019	1,670m <sup>2</sup> 2,398m <sup>2</sup>	ほ場整備
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
通野遺跡	遺物包含地	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世		柱穴列 竪穴状遺構 ピット	押型文土器 粗製土器 精製土器 突帯文土器 角錐状石器			

南島原市文化財調査報告書 第30集

## 通野遺跡

2022.3.31

発行 長崎県南島原市教育委員会

〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷 株式会社 昭和堂



